

角川つばさ文庫

君の名は。

しんかい まこと
新海 誠・作
ち一こ・挿絵



Kadokawa
Tsubasa
Bunko





* * * * * * * * * * * * * * * *
君きみの名なは。

新しん海かい誠まこと・作
ちーこ・挿絵

* * * * * * * * * * * * * * * *
角川つばさ文庫

保護者のみなさまへ

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載したりすることを禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。

本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本作品の内容は、底本発行時の取材・執筆内容に基づきます。

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。



もくじ

第八章
君の名は。

第七章
うつくしく、もがく

第六章
再演

第五章
記憶

第四章
探訪

第二章
日々

第一章
端緒

夢

キャラクター

紹介



*宮水三葉

やまぶか いなかまち く こうこう ねんせい
山深い田舎町に暮らす高校二年生。
こうこう そつぎゅう
高校を卒業したら
どうきょう で おも
東京に出たいと思っている。

*立花瀧

とうきょう す こうこう ねんせい
東京に住む高校二年生。
けんちくぶつ きょうみ つかさ たかぎ
建築物に興味があり、司や高木と
めぐ
カフェ巡りをしている。



*一葉

みつは よつは そば
三葉と四葉の祖母。
せんぞ つづ
先祖から続く、
みやみずじんじゅ まも
宮水神社を守っている。



*四葉

みつは ひよと
三葉の妹。
じぶん もの
自分をしっかり者だと
おも
思っている。



*司 & 高木

たき おな こうこう かよ とも
瀧と同じ高校に通う友だち。



*奥寺先輩

たき さき せんぱい
瀧のバイト先の先輩。
たき おも よ
瀧がひそかに想いを寄せている。



*サヤちゃん & テッシー

みつは おな こうこう かよ しんゆう
三葉と同じ高校に通う親友。

第一
一
章

夢



懐なつかしい声こえと匂におい、愛いとおしい光ひかりと温おん度ど。

私わたしは大たい切せつなだれかと隙すき間まなくぴったりとくっついている。分わかちがたく結むすびついている。乳ち房ぶさに抱いだかれた乳ち呑のみ児ごの頃ころのように、不ふ安あんや寂さびしさなんてかけらもない。失うしなったものは未いまだひとつもなく、とても甘あまやかな気き持もちが、じんじんと体からだに満みちている。

ふと、目めが開ひらく。

天てん井じょう。

部へ屋や、朝あさ。

ひとり。

東とう京きょう。

そうか。

夢ゆめを見みていたんだ。私わたしはベッドから身みを起おこす。

そのたった二秒びょうほどの間あいだに、さっきまで私わたしを包つつんでいたあたたかなーいっ体たい感かんは消きえ失うせている。跡あと形かたもなく、余よ韻いんもなく。そのあまりの唐とう突とつさに、ほとんどなにを思おもう間まもなく、涙なみだがこぼれる。

朝あさ、目めが覚さめるとなぜか泣ないでいる。こういうことが私わたしには、時とき々どきある。

そして、見みていたはずの夢ゆめは、いつも思おもい出だせない。

俺おれは涙なみだをぬぐった右みぎ手てを、じっと見みる。人ひと差さし指ゆびにのった小ちいさな水すい滴てき。ついさっきまでの夢ゆめも、目め尻じりを一いっ瞬しゅん湿しめらせた涙なみだも、もう乾かわいでいる。

とても大たい切せつなものが、かつて。

この手てに。

分わからない。

俺おれはあきらめてベッドから降おり、部へ屋やを出でて洗せん面めん所じょに向むかう。顔かおを洗あらいながら、この水みずのぬるさと味あじにかつて驚おどろいたことがあったような気きがして、じっと鏡かがみを見みる。

どこか不ふ満まんげな顔かおが、俺おれを見み返かえしている。

私わたしは鏡かがみを見みつめながら髪かみを結ゆう。春はる物ものスーツに袖そでを通とおす。

俺おれはようやく結むすび慣なれてきたネクタイを締しめ、スーツを着きる。

私わたしはアパートのドアを開あけ、

俺おれはマンションのドアを閉しめる。目めの前まえには、

ようやく見み慣なってきた、東とう京きょうの風ふう景けいが私わたしの前まえに広ひろがっている。かつて山やま々やまの峰みねの名なを自し然ぜんに覚おぼえたように、今いまではいくつかの高こう層そうビルの名な前まえを私わたしは言いえるようになっている。

俺おれは混こみ合あつた駅えきの改かい札さつを抜ぬけ、エスカレーターを降おり、

通つう勤きん電でん車しゃに、私わたしは乗のる。ドアに寄よりかかり、流ながれていく風ふう景けいを眺ながめる。ビルの窓まどにも、車くるまにも、歩ほ道どう橋きょうにも、街まちには人ひとが溢あふれている。

ぼんやりとした花はな曇ぐもりの白しろい空そら。百人にんが乗のった車しゃ輪りょう、千人にんを運はこぶ列れっ車しゃ、その千本ぼんが流ながれる街まち。

気きづけばいつものように、その街まちを眺ながめながら

俺
おれ
は、
私は
わたし
は、

れかひとりを、ひとりだけを、探さがしている。

だ

第一
二
章

端緒

知しらないベルの音おとだ。

まどろみの中なかでそう思おもった。目め覚ざまし？ でも、俺おれはまだ眠ねむいのだ。昨さく夜やは絵えを描かくのに夢む中ちゅうになっていて、ベッドに入はいったのは明あけ方がただったのだ。

「……くん。……たきくん」

今こん度どは、誰だれかに名なを呼よばれている。女おんなの声こえ。……女おんな？

「たきくん、瀧たきくん」

泣なき出だしそうに切せつ実じつな声こえだ。遠とおい星ほしの瞬またきのような、寂さみしげに震ふるえる声こえ。

「覚おぼえて、ない？」

その声こえが不ふ安あんげに俺おれに問とう。でも、俺おれはお前まえなんて知しらない。

突とつ然ぜん電でん車しゃが止とまり、ドアが開ひらく。そうだ、電でん車しゃに乗のっていたんだ。そう気きづいた瞬しゅん間かん、俺おれは満まん員いんの車しゃ輪りょうに立たっている。目めの前まえに見み開ひらいた瞳ひとみがある。まっすぐに俺おれを見みつめている少しよう女じょ、その制せい服ふく姿すがたが、降こう車しゃの乗じょう客きやくに押おされて俺おれから遠とおざかっていく。

「名な前まえは、みつは！」

少しよう女じょはそう叫さけび、髪かみを結ゆっていた紐ひもをするりとほどき、差さし出だす。俺おれは思おもわず手てを伸のばす。薄うす暗ぐらい電でん車しゃに細ほそく差さし込こんだ夕ゆう日ひみたいな、鮮あざやかなオレンジ色いろ。人ひと混ごみに体からだを突つっこんで、俺おれはその色いろを強つよく掴つかむ。

そこで、目めが覚さめた。

少しよう女じょの声こえ、その残ざん響きょうが、まだうっすらと鼓こ膜まくに残のこっている。

……名な前まえは、みつは？

知しらない名なで、知しらない女おんなだった。なんだかすごく必ひっ死しだった。涙なみだがこぼれる寸すん前ぜんの瞳ひとみ、見みたことのない制せい服ふく。まるで宇う宙ちゅうの運うん命めいを握にぎっているかのような、シリアルスで深しん刻こくな表ひょう情じょうだった。

でもまあ、ただの夢ゆめだ。意い味みなんかない。気きづけばもう、どんな顔かおだったかも思おもい出だせない。鼓こ膜まくの残ざん響きょうもすでに消きえている。

それでも。

それでも、俺おれの鼓こ動どうはまだ、異い常じょうに高たか鳴なっている。奇き妙みょうに胸むねが重おもい。全ぜん身しんが汗あせばんでいる。とりあえず、俺おれは息いきを深ふかく吸すう。

すー一つ。

「……？」

風邪かぜか？ 鼻はなと喉のどに違い和わ感かんがある。空くう気きの通とおり道みちが、いつもよりもすこし細ほそい。胸むねが、奇き妙みょうに重おもい。なんというか、物ぶつ理り的てきに重おもいのだ。俺おれは自じ分ぶんの体からだに目めを落おとす。そこには胸むねの谷たに間まがある。

そこには胸むねの谷たに間まがある。

「……？」

そのふくらみに朝あさ日ひが反はん射しゃし、白しろい肌はだが滑なめらかに光ひかっている。ふたつの胸むねの間あいだには、青あおく深ふかい影かげが湖みずうみのようにたまっている。

触さわってみるか。

俺おれはすとんとそう思おもう。りんごが地ち上じょうに落おちるみたいにほとんど普ふ遍へん的てきに自じ動どう的てきに、そう思おもう。

.....。

.....。

.....?

...!

俺おれは感かん動どうしてしまう。おおお、と思おもう。なんなんだ
これは。これってなんというか……女おんなの体からだってすげえ
な……。

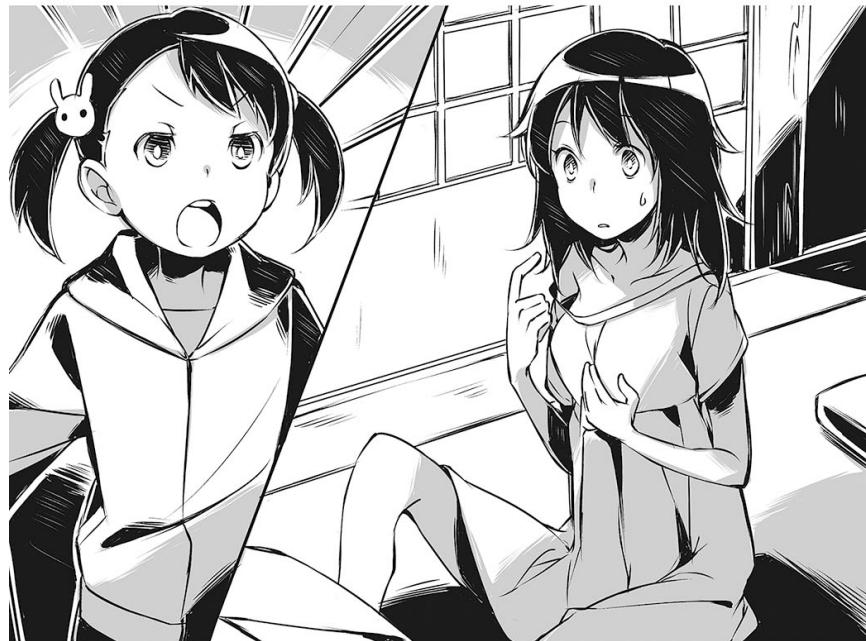
「……お姉ねえちゃん、なにしとるの？」

ふと声こえの方ほう向こうを見みると、小ちいさな女おんなの子こが
襖ふすまを開あけて立たっていた。俺おれは胸むねに手てをあてたま
ま、素す直なおな感かん想そうを言いう。

「いや、すげえリアルだなあって……。え？」

あらためて少しう女じょを見みる。まだ十歳さいくらいか、ツイン
テールでツリ目めがちの、生なま意い気きそうな子こどもだ。

「……お姉ねえちゃん？」



俺おれは自じ分ぶんを指ゆびさし、その子こに問とう。ていうこと

は、こいつは俺おれの妹いもうとか？ その子こは呆あきれきっとうな表ひょう情じょうで言いう。

「なに寝ねぼけとんの？ ご・は・ん！ 早はやく来きない！」

ぴしゃり！ と叩たたきつけるように襖ふすまを閉しめられる。なんか凶きょう暴ぼうそうな女じょ児じだなと思おもいながら、俺おれは布ふ団とんから立たち上あがる。そういうばあ腹はらも減へっている。ふと、視し界かいの隅すみの鏡きょう台だいに目めがとまる。畳たたみの上うえを何なん歩ぽか歩あるき、鏡かがみの前まえに立たってみる。緩ゆるいパジャマを肩かたからずらすと、それはぱさりと床ゆかに落おち、俺おれは裸はだかになる。鏡かがみに映うつった全ぜん身しんを、じっと見みつめる。

寝ね癖ぐせでところどころ飛とび跳はねた、黒くろく長ながい水すい流れゅうみたいな髪かみ。小ちいさな丸まる顔がおに、もの問といたげな大おおきな瞳ひとみ、どこか楽たのしげな形かたちの唇くちびる、細ほそい首くびと深ふかい鎖さ骨こつ、おかげさまで健けん康こうに育そだちました！ と主しゅ張ちょうしているかのような胸むねのふくらみ。うっすらと浮うかぶ肋ろつ骨こつの影かげ、そこから続つづく、柔やわらかな腰こしの曲きよく線せん。

まだ俺おれは生なまで見みたことはないけれど、これは間ま違ちがいなく、女おんなの体からだだ。

……女おんな？

俺おれが、女おんな？

突とつ然ぜんに、それまでぼんやりと体からだを覆おおっていたまどろみが晴はれわたる。頭あたまが一いっ気きにクリアになって、一いっ気きに混こん乱らんする。

そしてたまらずに、俺おれは叫さけんだ。

*

*

*

「お姉ねえちゃん、おーそーいー！」

引ひき戸どを開あけて居い間まに入はいると、四よつ葉はの攻こう撃げき的てきな声こわ色いろが飛とんできた。

「明日あしたは私わたしが作つくるでね！」

ごめんの代かわりに私わたしはそう言いう。この子こはまだ乳にゅう歯しも全ぜん部ぶ生はえ替かわってない子こどものくせに、姉あねよりも自じ分ぶんの方ほうがしっかりしていると断だんじている節ふしがある。謝しゃ罪ざいなどして弱よわみを見みせてはいけないわ！ と思おもいつつ私わたしはかばんと炊すい飯はん器きを開あけ、ぴかぴかした白はく飯はんを自じ分ぶんの茶ちゃ碗わんに盛もりつける。あ、盛もりすぎか？ まあいいか。

「いただきまーす」

つるりとした目め玉だま焼やきにソースをたっぷりかけて、ご飯はんと一緒に緒しょに口くちに入いれる。あああ、美味おいしい。しあわせかも。……ん？ こめかみあたりになにやら視し線せんが。

「……今日きょうは、普ふ通つうやなあ」

「え？」

気きづけばお祖母ばあちゃんが、ご飯はんを噛かむ私わたしをじっと見みている。

「昨日きのうはヤバかったもんなあ！」

と、四よつ葉はもにやにやと私わたしを見みる。

「突とつ然ぜん悲ひ鳴めいあげたりしてな」

悲ひ鳴めい？ 怪あやしげなものを検けん分ぶんするようなお祖母ばあちゃんの視し線せんに、ばかにしている（に違ちがいない）四よつ葉はのにやつき。

「え、なになに？ なんなんよ!?」

なんなのよ、二人ふたりそろって感かんじ悪わるい
ピンポンパンポーン。

突とつ如じょ暴ぼう力りょく的てきな音おん量りょうで、鴨かも居いに設せつ置ちされたスピーカーが鳴なる。

『皆みなさま、おはようございます』

その声こえは、親しん友ゆうのサヤちゃんのお姉ねえさん（町まち役やく場ば・地ち域いき生せい活かつ情じょう報ほう課か勤きん務む）である。ここ、糸いと守もり町まちは人じん口こう千五百人にんのしょぼい小ちいさな町まちだけに、大たい抵ていの人ひとたちは知しり合あい、あるいは知しり合あいの知しり合あいなのだ。

『糸いと守もり町まちから、朝あさのお知しらせです』

スピーカーから流ながれる言こと葉ばは、いともりまち・から・あさの・おしらせです、と文ぶん節せつを区く切ぎって、ゆっくりと読よみ上あげられる。スピーカーは町まち中じゅうの屋おく外がいにも設せつ置ちされているから、放ほう送そうは山やま々やまに反はん響きょうして輪りん唱しようのように重かさなっていく。

毎まい日にち朝あさ夕ゆう二回かい、かかさず町まち中じゅうに流ながされる防ぼう災さい無む線せん放ほう送そうだ。町ちょう内ないのどの家いえにも必かならず受じゅ信しん器きがあって、運うん動どう会かいの日にっ程ていだとか雪ゆきかき当とう番ばんの連れん絡らくとか、昨日きのうは誰だれが産うまれたとか今日きょうは誰だれのお葬そう式しきだとか、そういう町まちのイベントを日ひ々び律りち儀ぎにアナウンスしてくれるのだ。

『来らい月げつニは十つ日かに行おこなわれる、糸いと守もり町まち町ちょう長ちょう選せん挙きょについて、町まちの、選せん挙きょ管かん理り委い員いん会かいから』

ぶつり。

鴨かも居いのスピーカーが沈ちん黙もくする。スピーカー本ほん体たいには手てが届とどかない故ゆえに、お祖母ばあちゃんがコンセントを抜ぬいたのだ。八十歳さいを過すぎ、いつも古こ式しきゆかしい着き物もの姿すがたでありつつも無む言ごんで怒いかりを表ひょう明めいするその行こう動どう。クールだわと思おもいつつ私わたしはリモコンを手てに取とり、連れん係けいプレイのごとくテレビの電でん源げんを入れる。サヤちゃんお姉ねえさんの声こえを引ひき継ついで、N H Kお姉ねえさんがにこやかにしゃべり出だす。

『千二百年ねんに一度どという彗すい星せいの来らい訪ほうが、いよいよひと月つき後ごに迫せまっています。彗すい星せいは数すう日じつ間かんにわたって肉にく眼がんでも観かん測そくできると見みられており、世せい紀きの天てん体たいショーを目もく前ぜんに、ＪAXAジャクサをはじめとした世世界かい中じゅうの研けん究きゅう機き関かんは観かん測そくのための準じゅん備びに追おわれています』

画が面めんには『ティアマト彗すい星せい、一ヶ月げつ後ごに肉にく眼がんでも』の文も字じと、ぼやけた彗すい星せいの映えい像ぞう。なんとなく会かい話わは途と切ぎれ、ＮＨＫに混まじって私わたしたち女あんな三人にんの食しょく事じの音おとだけが、授じゅ業ぎょう中ちゅうの密みつ談だんみたいにひそひそかちゃかちゃと後うしろめたげに鳴なっている。

「……いいかげん、仲なか直なおりしないよ？」

唐とう突とつに、四よつ葉はが空くう気きを読よまない発はつ言げんをする。

「大人おとの問もん題だい！」

ぴしゃりと、私わたしは言いう。そう、これは大人おとの問もん題だいなのだ。なにが町ちょう長ちょう選せん挙きょよ。ピーひょろろ、と、なんだか間ま抜ぬけな声こわ色いろでどこかしらでトンビが鳴ないた。

いってきまーす、と声こえを揃そろえてお祖母ばあちゃんに告つげて、私わたしと四よつ葉はは玄げん関かんを出でた。

盛せい大だいに、夏なつの山やま鳥どりが鳴ないている。

斜しや面めん沿ぞいの狭せまいアスファルトを下くだり、いくつかの石いし垣がきの階かい段だんを降おりると、山やまの影かげが切きれてもらろに直ちょく射しゃ日にっ光こうが降ふりそそぐ。眼がん下かにはまあるい湖みずうみ、糸いと守もり湖こ。その凧ないだ水すい面めんが、朝あさ日ひを反はん射しゃしてびかーっと無ぶ遠えん慮りょに輝かがやいている。深しん緑りよくに連つらなった山やま々やまに、青あおい空そらに白しろい雲くも、隣となりには無む意い味みにスキップなどして

いる赤あかランドセルのツインテール幼よう女じょ。そして私わたしは、生なま足あしも眩まぶしい女じょ子し高こう生せい。私わたしは頭あたまの中なかで、壯そう大だいなストリングスのBGMを流ながしてみる。おお、日に本ほん映えい画がのオープニングみたい。ようするに日に本ほん的てき昭しょう和わ的てきど田舎いなかに、私わたしたちは住すんでいる。

「み一つはー！」

と背せ中なかに声こえをかけられたのは、小しょう学がっ校こうの前まえで四よつ葉はと別わかれた後あとだった。自じ転てん車しゃを漕こぐ不ふ機き嫌げんそうなテッサーと、その荷に台だいにちょこんと腰こし掛かけてにこにこ顔があのサヤちんだ。「お前まえ早はやく降おりろ」ぶつぶつとテッサーが言いっている。「いいにん、ケチ！」「重おもいんやさ」「失しつ礼れいやな！」と、夫婦めおと漫まん才ざいのよくなイチャコラを二人ふたりは朝あさから繰くり広ひろげる。

「あんたたち、仲なかいいなあ」

「良よくないわ！」

と二人ふたりがハモる。その真しん剣けんな否ひ定ていっぴりがおかしくて、私わたしはくすぐすと笑わらってしまう。軽けい快かいなギターソロなんかに、私わたしの脳のう内ないBGMは切きり替かわっている。私わたしたち三人にんはもう十年ねん来らいの親しん友ゆうである。小こ柄がらで前まえ髪がみぱつん&お下さげ髪がみのサヤちんと、ひょろりとした長ちょう身しんで坊ぼう主ず頭あたまがダサめのテッサー。二人ふたりはいつもいがみ合あっているふうだけれど会かい話わのテンポがぴったりで、実じつはお似に合あいなのではないかと私わたしは密ひそかに思おもっている。

「三みつ葉は、今日きょうは髪かみ、ちゃんとしとるな」

自じ転てん車しゃから降おりたサヤちんが、私わたしの髪かみ紐ひものあたりを触さわりながらにやにやと言いう。私わたしはいつもと同おなじ髪かみ型がたをしている。左さ右ゆうの三みつ編あみをくるりと巻まいて頭あたまの後うしろで髪かみ紐ひもで束たばねる、ずっと昔むかしにお母かあさんに教おしえてもらったまとめ方かた。

「え、髪かみ？　なに？」

そういえば、朝ちょう食しょくの時ときにはやむやになった会かい話わを私わたしは思おもい出だす。今日きょうはちゃんとしてるって、じゃあ昨日きのうはおかしかったってこと？ 昨日きのうのことを思おもい出だそうとすると、

「そうや、ちゃんと祖母ばあちゃんにお祓はらいしてもらったんか？」

とテッサーが心しん配ぱい顔がおを乗のりだした。

「オハライ？」

「ありやゼッタイ狐きつね憑つきやぜ！」

「はああ？」唐とう突とつな言こと葉ばに私わたしは顔かおをしかめる。サヤちんが呆あきれたように代だい弁べんする。

「あんたはもう、なんでもオカルトにしんの！ きっと三みつ葉ははストレス溜たまつるんよ。なあ？」

ストレス？

「え、ちょ、ちょっと、なんの話はなし？」

どうしてみなにそろって心しん配ぱいされてるの、私わたし？ 昨日きのうは……とっさには思おもい出だせないけれど、いつもの一いち日にちだったはず。

あれ？

本ほん当とうに、そうだった？ 昨日きのう、私わたしは……

『 そしてなによりも！』

拡かく声せい器きの野の太ぶとい声こえが、私わたしの疑ぎ問もんを消けし去さった。

ビニールハウスの建たち並ならんだ向むかい側がわ、町ちょう営えい駐ちゅう車しゃ場じょうの無む駄だに広ひろい敷しき地ちに、こんもりと一ダースくらいの人ひとだかりができている。その中ちゅう心しんでマイクを持もって立たっているのは、ひとり背せが高たかく堂どう々どうとした態たい度どの、私わたしの父ぢちだ。スーツの上じょう半はん身しんにかけたたすきには、誇ほこらしげに「現げん職しょく・宮み

や水みずとしき」と書かかれている。町ちょう長ちょう選せんの選せん
挙きょ演えん説ぜつなのだ。



『なによりも、集しゅう落らく再さい生せい事じ業ぎょうの継けい続ぞ

く、そのための町まちの財ざい政せい健けん全ぜん化か！ それが実じつ現げんして初はじめて、安あん全ぜん、安あん心しんな町まち作づくりができるのです。現げん職しょくとして、ここまで進すすめさせていただいてきた町まち作づくりを完かん遂すいさせたい、さらなる磨みがきをかけたい！ そして新あらたな情じょう熱ねつでこの地ちを導みちびき、子こどもからお年とし寄よりまで、誰だれもが安あん心しんして活いき活いきと活かつ躍やくできる地ち域いき社しゃ会かいを実じつ現げんしていきたい！ それが私わたしの使し命めいやと、決けつ意いを新あらたにしとります……』

その高こう圧あつ的てきなほど堂どうに入いった演えん説ぜつは、なんだかテレビで見る政せい治じ家かの人ひとみたいで、こんな畠はたけに囲かこまれた駐ちゅう車しゃ場じょうと全ぜん然ぜんマッチしていない気きがして、私わたしは白しら々じらとした気き持もちになる。どうせ今こん期きも宮みや水みずさんで決きまりやろ、だいぶ撒まいてるみたいやしね、聴ちょう衆しゅうから聞きこえてくるそんな囁ささやき声ごえも、私わたしの気き持もちをさらに暗くらくする。

「おう、宮みや水みず」

「……おはよう」

最さい悪あく。私わたしに声こえをかけてきたのは、苦にが手てなクラスマイト三人にん組ぐみだ。高こう校こうでも派は手で系けいイケてるヒエラルキーに属ぞくするこのヒトたちは、地じ味み系けいカテゴリーに属ぞくする私わたしたちにことあるごとにちくちくと嫌いやみを投なげつけるのだ。

「町ちょう長ちょうと土ど建けん屋やは」と一人ひとりが言ひって、わざとらしく、演えん説ぜつ中ちゅうの父ちちに視し線せんを向むける。見みると、父ちちの横よこにはテッサーのお父とうさんが満まん面めんの笑えみで立たっている。自じ分ぶんの建けん設せつ会がい社しゃのジャケットを着きて、腕うでには「宮みや水みずとしき応おう援えん団だん」と書かかれた腕わん章しょうを巻まいている。そこから私わたし、それからテッサーに視し線せんを回まわしながら、そいつは続づける。

「その子こどもたちも癒ゆ着ちゃくしとるな。それ、親おやの言いいついでつるんどるの？」

ばかみたい。私わたしは返へん事じをせず、足あしを速はやめてその

場ばを去さろうとする。テッシーも無む表ひょう情じょう、サヤちんだけが困こまったように落おち着つかなげ。

「三みつ葉は！」

突とつ然ぜん、大おお声ごえが響ひびいた。ひとつ、息いきが止とまりそうになる。信しんじられない。演えん説ぜつ中ちゅうだった父ちり親おやが、マイクを下おろした地じ声ごえで、私わたしに向むかって声こえを張はり上あげているのだ。聴ちょう衆しゅうも一いっ斉せいに私わたしを見みる。

「三みつ葉は、胸むね張はって歩あるかんか！」

私わたしは真まっ赤かになる。あまりの理り不ふ尽じんに、涙なみだまで流ながしてしまいそうになる。駆かけ出だしたくなるのを懸けん命めいにこらえて、大おお股またでその場ばから遠とおざかる。「身み内うちにも厳きびしいなあ」「さすが町ちょう長ちょうやわ」聴ちょう衆しゅうがそんなふうに囁ささやいている。「うわ、きつつ」「ちょっとかわいそう」というクラスメイトの半はん笑わらいが耳みみに届とどく。

最さい悪あく。

さっきまで鳴なっていたBGMは、いつの間にか消きえている。BGMなしのこの町まちは、ただただ息いき苦ぐるしいだけの場ば所しおだったと私わたしは思おもい出だす。

カッカッカッ、と黒こく板ばんが音おとをたてて、短たん歌からしきモノが書きつけられる。

誰たそ彼かれと われをな問とひそ 九なが月つきの 露つゆに濡ぬれつつ 君きみ待まつわれそ

「誰たそ彼かれ、これが黄昏たそがれ時どきの語ご源げんね。黄昏たそ

がれ時どきは分わかるでしょう？」

ユキちゃん先せん生せいの澄すんだ声こえがそう言ひて、黒こく板ばんに大おおきく『誰たそ彼かれ』と書かく。

「夕ゆう方がた、昼ひるでも夜よるでもない時じ間かん。人ひとの輪りん郭かくがぼやけて、彼かれが誰だれか分わからなくなる時じ間かん。人ひとならざるものに出で会あうかもしれない時じ間かん。魔ま物ものや死し者しゃに出でくわすから『逢おう魔まが時とき』なんていう言こと葉ばもあるけれど、もっと古ふるくは、『かれたそ時とき』とか『かはたれ時とき』とか言ひたそうです」

ユキちゃん先せん生せいは、今こん度どは『彼かれ誰たそ』『彼かは誰たれ』と書かく。なんだそりや、ダジャレ？

「はーい、センセイしつもーん。それって『カタワレ時とき』やないの？」

そう誰だれかが発はつ言げんし、そうだよ、と私わたしも思おもう。タソガレ時どきはもちろん分わかるけど、夕ゆう方がたを指さす言こと葉ばとして子こどもの頃ころから耳みみ馴な染じみがあるのは『カタワレ時とき』だ。それを聞きいて、ユキちゃん先せん生せいは柔やわらかく笑わらう。それにしても、こんな田舎いなかの高こう校こうには不ふ相そう応おうなくらい美び人じんなのよねこの古こ典てん教きょう師し。

「それはこのあたりの方ほう言げんじゃない？ 糸いと守もりのお年とし寄よりには万まん葉よう言こと葉ばが残のこってるって聞きくし」

ど田舎いなかやからなあ、と男だん子しが言ひて、くすくすと笑わらしい声ごえが上あがる。確たしかに、時とき々ときうちのお祖母ばあちゃんもそれ何なに語ご？ 的てきな言こと葉ば使つかうかも。一いち人にん称しよう「ワシ」だし。そんなことを考かんがえながらノートをめくると、まだ白はく紙しのはずのページに大おおきな文も字じが書かれていた。

お前まえは 誰だれだ？

……え？

なにこれ？ 周しゅう囲いの音おとが、見み覚おぼえのない筆ひつ跡せきに吸すい込こまれるみたいにしてすーっと遠とおざかる。これ、私わたしの字じじやない。ノートを誰だれかに貸かしたりなんかもしてないはず。え？ お前まえは誰だれだって、どういうこと？

「……さん。次つぎ、宮みや水みずさん！」

「あ、はい！」

私わたしは慌あわてて立たち上あがる。九十八ページから読よんでくださいね、とユキちゃん先せん生せいが言いつて、私わたしの顔かおを見みながらおかしそうに付つけ足たす。

「宮みや水みずさん、今日きょうは自じ分ぶんの名な前まえ、覚おぼえてるのね」

そしてクラス中じゅうがどっと笑わらう。はああ？ なんのよこれ、どういうこと？

「……覚おぼえとらんの？」

「……うん」

「ほんとに？」

「うんってば」

そう答こたえて、ちゅーっとバナナジュースをすすった。ごくん。おいし。サヤさんは不ふ思し議ぎなモノを見みるような目めで私わたしを見みている。

「……だってあんた、昨日きのうは自じ分ぶんの机つくえもロッカーも忘わすれたって。髪かみはぼさぼさの寝ね癖ぐせで結むすんどらんし、制せい服ふくのリボンもしどらんかったし、なんかずっと不ふ機き嫌げんやったし」

私わたしはその姿すがたを想そう像ぞうしてみる。……え？

「ええええ！　うそ、ほんと!?」

「なんか、昨日きのうの三みつ葉は、まるで記き憶おく喪そう失しつみたいやったよ」

私わたしは慌あわてて思おもい返かえしてみる。……やっぱりおかしい。昨日きのうのことが思おもい出だせない。いや、切きれぎれに覚おぼえていることもある。

あれは……どこかの知しらない街まち？

鏡かがみに映うつった……男おとこの子こ？

私わたしは記き憶おくをなんとか辿たどろうとする。ピーヒヨロローと、茶ちゃ化かすようにトンビが鳴なく。昼ひる休やすみ、私わたしたちは校こう庭ていのすみっこで紙かみパックジュースを手てにだべっている。

「うーん……なんか、ずっと変へんな夢ゆめを見みとったような気きがするんやけど……あれは、別べつのヒトの人じんせいの、夢ゆめ？
……うーん、よく覚おぼえとらんなあ……」

「……分わかった！」

突とつ然ぜんテッシーが大おお声ごえを上あげて、私わたしはびくっとしてしまう。読よみさしのオカルト雑ざつ誌し『ムー』を私わたしたちの鼻はな先さきに突つきつけ、泡あわを飛とばす勢いきついで言う。

「それって、前ぜん世せの記き憶おくや！　いやそれは科か学がく的でないとオマエらは言いうやろうそうやろう、ならば言いい方かたを変かえてエヴェレットの多た世世界かい解かい釈しゃくに基もとづくマルチバースに無む意い識しきが接せつ続ぞくしたという説せつ明めいは」

「あんたは黙だまっとって」サヤちゃんがぴしりと叱しかりつけ、「あー、もしかしてあんたが私わたしのノートに落らく書がきを！」と私わたしも叫さけぶ。

「は？　落らく書がき？」

あ、いや、違ちがうか。テッシーはそういうツマラナイいたずらをす

るタイプじゃないし、動どう機きもない。

「あ、ううん。なんでもない」と私わたしは取とり消けす。

「は？ なんだよ落らく書がきて。俺おれ疑うたがわれとる？」

「なんでもないってば」

「うわ、ひでえ三みつ葉は！ サヤちん聞きいたか、冤えん罪ざいやエンザイ！ 検けん察さつ呼よんでくれよ検けん察さつ、いや呼よぶのは弁べん護ご士しか？ あいこういう場ば合あいどっちやっけ？」

「でも三みつ葉は、昨日きのうはマジでちょっとヘンやったよ」と、テッシーの訴うったえを華か麗れいに無む視ししてサヤちんが言いう。「もしかして、どっか体たい調ちよう悪わるいんやないの？」

「んー、おかしいなあ……ホントにストレスとかかなあ……」

私わたしもあらためて、ここまで数かず々かずの証しょう言げんについて考かんがえてみる。テッシーはと言いえば、何なにごともなかつたかのようにオカルト雑ざっ誌しに再ふたたび夢む中ちゅうになっている。こういう引ひきずらないところが、彼かれの美び点てんだ。

「そうや、きっとストレス！ 三みつ葉は、最さい近きんそういうのいっぱいあるにん！」

そうなのだ。町ちょう長ちょう選せんは言いうに及およばず、いよいよ今こん夜やに迫せまったあの儀ぎ式しき！ この小ちいさな町まちで、なんだってよりによって私わたしの父ぢち親おやは町ちょう長ちょうで、私わたしのお祖母ばあちゃんは神じん社じやの神かん主ぬしなのだろう。私わたしは両りょう膝ひざに顔かおをうずめ、深ふか々ぶかと嘆なげく。

「あーもう、私わたししさっさと卒そつ業ぎょうして東とう京きょう行いきたいわあ。この町まち狭せますぎるし濃こすぎるんやさ！」

分わかる、とってもとってもよく分わかる！ とサヤちんもうんうんうなずいてくれる。

「うちなんか母子おやこ姉妹しまい三連れん続ぞくで町ちょう内ない放ほう送そう担たん当とうだもん。近きん所じょのおばちゃんたち、子こどもの頃ころからずっと私わたしを『放ほう送そうのお嬢じょうちゃ

ん』呼よばわりやよ!? そして私わたしはなぜか放ほう送そう部ぶ所しょ属ぞくやし！ もう自じ分ぶんでもなにがしたいのか分わからんわあー」

「サヤちゃん、卒そつ業ぎょうしたら一いっ緒しょに出でよう東とう京きょうに！ こんな町まち、大人おとなになっても学がっ校こうヒエラルキーまんま持もち越こしやよ！ この因いん襲しゅうから自じ由ゆうにならな！ ほらテッサー、あんたも一いっ緒しょに行いくんやろ？」

「んん？」テッサーはぼんやりとオカルト雑ざつ誌しから顔かおを上あげる。

「……あんた、話はなし聞きいとった？」

「あー……。俺おれは別べつに……普ふ通つうにずっと、この町まちで暮くらしてくんやと思おもうよ」

どはああ、と私わたしとサヤちゃんは深ふかく溜ため息いきを吐はく。こんなんだから女じょ子しにモテないのだ、こいつは。まあ私わたしだって彼かれ氏しとかいたことないけれど。

そよ、と吹ふいた風かぜの行ゆき先さきに目めをやると、眼がん下かの糸いと守もり湖こがいかにも無む闇かん心しんそうに平へい和わに凧ないでいた。

こんな町まち、本ほん屋やもないし歯は医い者しゃもないし。電でん車しゃは二時じ間かんに一本ぽんやしバスは一日にちに二本ほんやし天てん気き予よ報ほうは対たい象しよう地ち域いき外がいやしグーグルマップの衛えい星せい写しゃ真しんは未いまだにモザイクやし。コンビニは九時じに閉しまるしそのくせ野や菜さいの種たねとかハイグレード農のう機き具ぐとかは売うってるし。

学がっ校こうからの帰かえり道みち、私わたしとサヤちゃんの対たい糸いと守もり町まち・愚ぐ痴ちりモードはまだ続つづいている。

マックもモスもないくせにスナックは二軒けんもあるし。雇こ用ようはないし、嫁よめは来こないし、日につ照しよう時じ間かんは短みじかいし。ぐちぐちぐちぐち。普ふ段だんはこういう町まちの過か疎そっぷりが逆ぎゃくにすがすがしくどこか誇ほこらしく感かんじられたりもす

るのだけれど、今日きょうの私わたしたちは本ほん気きで絶ぜつ望ぼうしているのだ。

ぬぼーっと自じ転てん車しゃを押おしながら黙だまってついてきていたテッシーが、ふいに苛いらついたように声こえを上あげた。

「お前まえらなあ！」

「……なによ」と不ぶ機き嫌げんな私わたしたちに、ニヤリ、と不ぶ気き味みな笑えみを浮うかべるテッシー。

「そんなことより、カフェにでも寄よってかんか」

「え……」「な……」「な……！」

「カフェえええ!?」と、私わたしたちは盛せい大だいにハモった。

がっちゃん！ という金きん屬ぞく音おんが、ひぐらしの声こわ色いろに溶とけていく。ほらよ、とテッシーが自じ販はん機きから取とり出だした缶かんジュースを差さし出だす。びーんという音あとを立たてて、電でん動どうスクーターにまたがった畠はたけ帰がえりのおじいちゃんが目めの前まえを通つう過かし、通とおりすがりの野の良ら犬いぬが「俺おれも付つき合あってやるか」という風ふ情ぜいで座すわり込こんであくびをした。

そのカフェは、あのカフェではなかった。つまりスタバとかタリーズとか、あるいはこの世よのどこかにあるというパンケーキやベーグルやジェラートを供きょうする夢ゆめ空くう間かんでもなく、三十年ねんくらい前まえのアイスクリーム看かん板ばんが貼はり付つけられたベンチと自じ動どう販はん売ばい機きがぽつんとあるだけの、近きん所じょのバス停ていだった。三人にん並ならんでベンチに座すわり、ついでに野の良ら犬いぬも足あし元もとに座すわっていて、私わたしたちは缶かんジュースをちょびちょびと飲のんでいる。テッシーにだまされたというよりも、まあそりゃそうか、という気き持もちになる。

「じゃ、私わたし先さきに帰かえるね」

今日きょうは昨日きのうより一度どくらい気き温おんが低ひくいね、いや私わたしは一度どくらい高たかいと思おもう、そういう心しん底そ

「どうでもいい会かい話を缶かんジュース一本ぽん分ぶんし終おえてから、私わたしは二人ふたりにそう伝つたえた。」

「今こん晩ばんがんばってな」とサヤちゃん。「後あとで見みにいってやるでな」とテッシー。

「来こなくていいよ！　ていうかゼッタイ来くんna！」と釘くぎを刺さしつつ、私わたしは内ない心しんで「恋こい人びと同どう士しになれるようにがんばれ～」と二人ふたりに向むかって祈いのってあげた。しばらく石いし段だんを登のぼってから振ふり返かえり、夕ゆう焼やけ色いろの湖みずうみをバックにベンチに座すわっている二人ふたりに、リリカルなピアノ曲きょくなんかをそっとかぶせてみる。うんうん、やっぱりお似に合あいやん。私わたしはこれから不ふ幸こうな夜よるのお務つとめだけど、あなたたちだけはせめて若わかさを謳おう歌かしなさいね。

「あーん、私わたしもそっちがいいわあ」

四よつ葉はが不ふ満まんげな声こえを漏もらす。

「四よつ葉はにはまだ早はやいわ」とお祖母ばあちゃん。

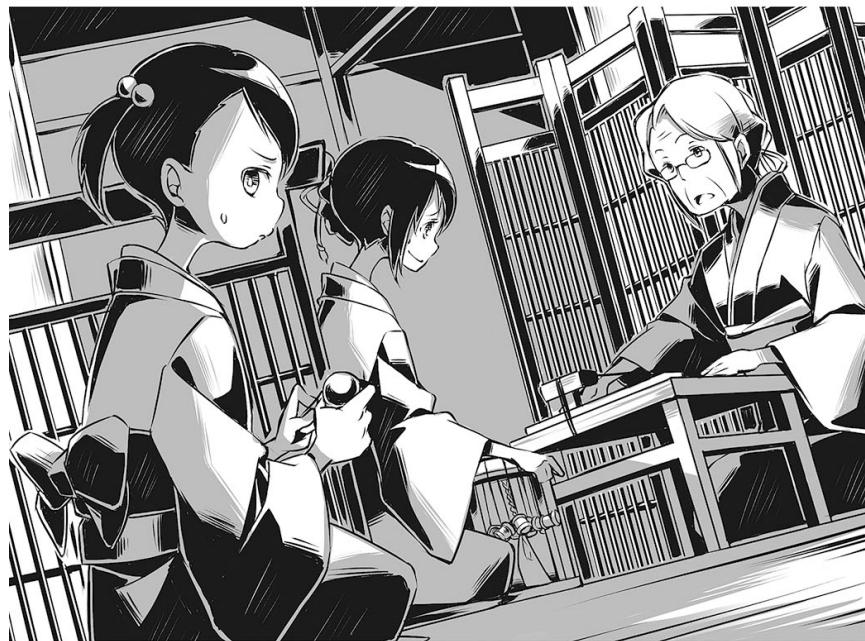
八畳じょうほどの作さ業ぎょう部べ屋やには、かちんかちんと、重おもり玉だまがぶつかる音おとが間かん断だんなく響ひびいている。「糸いとの声こえを聞きいてみない」と、作さ業ぎょうの手てを止とめずにお祖母ばあちゃんは続づける。

「そうやってずーっと糸いとを巻まいとるとな、じきに人ひとと糸いとの間あいだに感かん情じょうが流ながれだすで」

「へ？　糸いとはしゃべらんもん」

「ワシたちの組くみ紐ひもにはな」と、四よつ葉はの抗こう議ぎを無む視してお祖母ばあちゃんは続づける。私わたしたち三人にんはそれぞれに着き物もの姿すがたで、今こん夜やの儀ぎ式しきに使つかう紐ひも作づくりの仕し上あげをしているのだ。組くみ紐ひも、という古ふるくから伝つたわる伝でん統とう工こう芸げいで、細ほそい糸いとを組くみ合あわせ一本ぽんの紐ひもを組くむ。完かん成せいした組くみ紐ひもには、様さまざまな図ず柄がらが編あみ込こまれたりしていて力

ラフルで可愛かわいい。とはいえ作さ業ぎょうにはそれなりの習しゅう
熟じゅくが必ひつ要ようだから、四よつ葉はのぶんはお祖母ばあちゃん
が担たん当とう。四よつ葉はは重おもり玉だまにひたすら糸いとを巻ま
くというアシスタント作さ業ぎょうをやらされている。



「ワシたちの組くみ紐ひもにはな、糸いと守もり千年ねんの歴れき史し

が刻きざまれとる。まったくあんたらの学がっ校こうも、元がん来らいはこういう町まちの歴れき史しをまずは子こどもに教おしえにやいかんのに。ええか、今いまをさかのぼること二〇〇年ねん前まえ……」

また始はじました、と私わたしは小ちいさく苦く笑しようする。小ちいさな頃ころからこの作さ業ぎょう場ばで繰くり返かえし聴きかされてきた、お祖母ばあちゃん得とく意いの口こう上じょうだ。

「ぞうり屋やの山やま崎ざき繭まゆ五ご郎ろうの風ふ呂ろ場ばから火ひが出でて、このへんは一いつ帯たい丸まる焼やけとなつてた。お宮みやも古こ文もん書じよも皆みな焼やけ、これが俗ぞくに言いう」

お祖母ばあちゃんがちらりと私わたしを見みて、

「『繭まゆ五ご郎ろうの大たい火か』」

すらりと私わたしは答こたえる。うむ、と満まん足ぞくそうなお祖母ばあちゃん。「え、火か事じに名な前まえついとるの!?」と驚おどろいた様よう子すの四よつ葉は。マユゴローさん、こんなことで名な前まえが残のこるなんてかわいそ、とぶつぶつと言ひっている。

「おかげで、ワシたちの組くみ紐ひもの文もん様ようが意い味みするところも、舞まいの意い味みも解わからんくなつてた、残のこったのは形かたちだけ。せやけど、意い味みは消きえても、形かたちは決けつして消けしちゃあいかん。形かたちに刻きざまれた意い味みは、いつか必かならずまたよみがえる」

お祖母ばあちゃんの話はなしには小こ唄うたのような独どく特とくの拍ひょう子しがついていて、私わたしは組くみ紐ひもを組くみながら、同おなじ言こと葉ばを口くちの中なかで小ちいさく諳そらんじる。形かたちに刻きざまれた意い味みは、いつか必かならずまたよみがえる。それがワシら宮みや水みず神じん社じやの。

「それがワシら宮みや水みず神じん社じやの、大たい切せつなお役やく目め。せやのに……」

それから、お祖母ばあちゃんの柔にゅう和わな目めが悲かなしげに伏ふせられる。

「せやのに、あのバカ息子むすこは……。神しん職しょくを捨すて家いえを出でていくだけじゃ飽あき足たらんと、政せい治じとはどもなら

ん……」

お祖母ばあちゃんの溜ため息いきに忍しのばせて、私わたしも小ちいさく息いきを吐はく。この町まちが好すきなのか嫌きらいなのか、どこか遠とおくに行いきたいのかそれともずっと家か族ぞくや友ともだちといたいのか、私わたしは本ほん当とうは自じ分ぶんでもよく分わからない。鮮あざやかな色いろに組くみ上あがった組くみ紐ひもを丸まる台だいから外はずすと、かたりと寂さみしげな音おとがした。

夜よるの神じん社じゅから流ながれてくる大和やまと笛ぶえの音おとは、例たとえば都と会かいのヒトなんかからしたらちょっとしたホラーなんじゃないかなと私わたしは思おもう。ナントカ村むら殺さつ人じん事じ件けんとか、ナントカ家けの一いち族ぞくとか、そういう不ふ吉きつな出で来き事ごとの舞ぶ台たいみたいなイメージで。そして私わたしも、もうスケキヨでもジェイソンでもなんでもいいからいっそ殺ころしてえ楽らくにしてちょうど一くらいの暗くらい気き持もちで、さっきから巫女みこ舞まいを舞まっている。

毎まい年としこの時じ期きに行おこなわれる宮みや水みず神じん社じゅの豊ほう穣じょう祭さいの主しゅ役やはくは、不ふ幸こうにして私わたしたち姉妹しまいである。この日ひにはぱりっとした巫女みこ装しよう束ぞくを着きて、真まっ赤かな口くち紅べにを塗ぬりじゃらじゅらした頭あたま飾かざりまでつけて、神楽かぐら殿でんに立たち觀かん衆しゅうの前まえに出でて、お祖母ばあちゃんに仕し込こまれた舞まいを舞まう。火か事じで意い味みが失うしなわれたという、二人ふたりが対ついになった舞まいだ。それぞれにカラフルな紐ひもが下さがった鈴すずを持もって、しゃらんしゃらんと鳴ならし、くるりくるりと回まわり、ふわりふわりと紐ひもをなびかせる。さっき回まわった時ときには視し界かいの隅すみにテッシーとサヤちんの姿すがたも見みえて、あいつらあれだけ言いいったのに来きやがって巫女みこパワーで呪のろってやる、LINEラインの呪のろいスタンプ送おくりまくってやる、とさらに気き持もちが落おち込こんだ。とはいえ、嫌いやなのはこの舞まいではないのだ。これはこれでちょっと恥はずかしくはあるけれど、子こどもの頃ころからのことなのでまあすっかり慣なれている。これじゃなくて、大人おとなになるほど恥はずかしさがつのるあの儀ぎ式しき。この後あとしなければならないアレ。女じょ子しに対たいする辱はずかしめ

としか思おもえないアレ。

あーもー、

やーだーよー！

とか思おもいつつ体からだを動うごかしていたら、すとんと舞まいは終おわってしまった。ああ。ついに。

もぐもぐもぐ。

もぐ。

もぐもぐもぐもぐ。

私わたしはひたすら米こめを噛かむ。なるべくなにも考かんがえないように、味あじも音おとも色いろも感かんじないように、目めをつむってひたすらに噛かむ。隣となりでは四よつ葉はも同おなじことをしている。私わたしたちは並ならんで正せい座ざをしていて、それぞれの前まえには台だいに置おかれた小ちいさな升ますがある。そしてもちろんその先さきには、老ろう若にやく男なん女によ、私わたしたちを見けん物ぶつしている観かん衆しゅうがいる。

もぐもぐもぐ。

もぐもぐ。

ああ、もう。

もぐもぐもぐ。

そろそろ出ださなくちゃ。

もぐもぐ。

ああ。

もぐ。

私わたしはあきらめて、目めの前まえの升ますを取とる。口くち元も

とまで持もってきて、せめてもと千ち早はやの裾すそで口くち元もとを隠かくす。

そして。ああ。

私わたしは口くちをすぼめて、今まで噛かんでいた米こめを升ますの中なかに吐はき出だす。それは唾だ液えきと混まじって、どろりとした白しろい液えき体たいとなって口くちから垂たれる。ざわざわざわと、観かん衆しゅうがどよめいたような気きがする。ええええん。私わたしは心こころの中なかで泣なく。お願ねがい、みんな見みないでー。

口くち噛かみ酒ざけだ。

米こめを噛かんで、唾だ液えきと混まざった状じょう態たいで放ほう置ちしておくだけで、発はっ酵こうしてアルコールになるという日に本ほん最さい古このお酒さけ。これを神かみさまに供そなえるのだ。昔むかしは色いろ々いろいろな地域いきで作つくられていたそうだけれど、二十一世せい紀きになってまでこんなことを続つづけている神じん社じやが果はたして他ほかにあるのだろうか。ていうか巫女みこ服ふくでこれってマニアックすぎるわよいったい誰だれ得とく!? とかぐずぐずと考かんがえつつも、けなげな私わたしはまたひと掴つかみ米こめをつまみ、口くちに入いれる。そしてまた噛かむ。四よつ葉はも涼すずしい顔かおで同おなじことをしている。この小ちいさな升ますがいっぱいになるまで、私わたしたちはこれを繰くり返かえさなければならない。だら~……っと、唾だ液えきと米こめを私わたしはまた吐はき出だす。心こころの中なかでまたさめざめと泣なく。

ふと、知しった声こえが耳みみをかすめる。さざ波なみのような嫌いやな予よ感かんを感かんじつつ、私わたしはすこしだけ視し線せんを上げる。

ああ。

思おもわず神じん社じやごと爆ばく破はしたくなる。やはりそこには、イケてる派は手で系けいクラスメイト三人にん組ぐみ。にやにやと私わたしを見みつめて、なにやら楽たのしそうに話はなしている。きや~あたしひツタイ無む理りいとか、なんかヒワイ~とか、よく人ひと前まえでやりよるよな嫁よめに行いけんぜとか、距きよ離り的てきには聞きこえるはずのない声こえまでがくつきりと耳みみに届とどく気きさえする。

卒そつ業ぎょうしたら町まちを出でて、遠とおくに行いこう。

私わたしは強つよくつよく決けっ心しんをする。

「お姉ねえちゃん元げん気きだしないよー。いいにん、学がっ校こうのヒトに見みられたらくらい。だいたい、なにがそんなにショックなん？」

「思し春しゅん期き前まえのお子こサマは気き楽らくでええよな！」

私わたしは四よつ葉はを睨にらみつける。私わたしたちはTシャツに着き替がえ、社しゃ務む所しょの玄げん関かんを出でたところだ。

豊ほう穣じょう祭さいの後あと、私わたしたち姉妹しまいは今こん夜やの縫しめくくりとして、お祭まつりを手て伝つだってくれた近きん所じょのおじさんおばさんたちとの宴えん会かいに出しゅっ席せきした。お祖母ばあちゃんがホステスで、私わたしと四よつ葉ははお酌しゃくや話はなし相あい手てが役やく目めだ。

「三みつ葉はちゃんいくつになったの？　え、十七！　そうかあ、こんな若わかくて可愛かわいい子こにお酌しゃくしてもらっちゃあおじちゃん若わか返がえってまうなあ」

「もうガンガン若わか返がえっちゃってください！　ほらもっと飲のんで飲のんで！」

ほとんどヤケクソ気ぎ味みに接せつ待たいして、ぐったりと疲つかれ切きり、子こどもはそろそろ帰かえっていいからとようやく解かい放ほうされたところなのだ。お祖母ばあちゃんたち大人おとなは、まだ社しゃ務む所しょで宴えん会かい継けい続ぞく中ちゅうである。

「四よつ葉は、あんたさっきの社しゃ務む所しょでの平へい均きん年ねん齢れい、知しっとる？」

境けい内だいの参さん道どうはすっかり明あかりが消きえていて、涼すずしげな虫むしの音ねがあたりいちめんに響ひびいている。

「知しらん。六十歳さいくらい？」

「私わたし、台だい所どころで計けい算さんしてみたの。七十八歳さいやよ、七十八歳さい！」

「ふうん」

「そしてうちらがいなくなった今いま、あの空くう間かんは九十一歳さいやよ！ なんかもう大おお台だいやよ、人じん生せい最さい終しゅうステージやよ、社しゃ務む所しょごと冥めい界かいからお迎むかえが来くるかもやよ！」

「んんー……」

したがって早さっ急きゅうにこの町まちから脱だっ出しゅつすべきだと私わたしは言いいたいのだけれど、姉あねの必ひっ死しの訴うったえにも、四よつ葉はの反はん応のうはそっけない。なにか別べつのことを考かんがえている様よう子すで、しょせんお子こサマに姉あねの苦く惱のうは伝つたわらないんだと、私わたしはあきらめて空そらを見み上あげる。ぎらぎらと満まん天てんの星ほしが、地ち上じょうの人じん生せいとはいかにも関かん係けいなさそうに超ちょう越えつ的てきに輝かがやいている。

「……そうや！」

神じん社じやの長ながい石いし段だんを並ならんで降おりている時ときには、突とつ然ぜんに四よつ葉はが声こえを上あげる。隠かくされていたケーキを見みつけたみたいに得とく意いげな表ひょう情じょうで、四よつ葉はは言いう。

「お姉ねえちゃん、いっそ口くち噛かみ酒ざけをいっぱい作つくってさ、東とう京きょう行いきの資し金きんにしたら！」

一いっ瞬しゅん、私わたしは言こと葉ばに詰つまる。

「……あんたって、すっこい発はつ想そうするな」

「生なま写じや真しんとメイキング動どう画がとかつてさ、『巫女みこの口くち噛かみ酒ざけ』って名な前まえとかつてさ！ きっと売うれるわ！」

九歳さいでこの世世界かい観かん、大だい丈じょう夫ぶかしらと心しん配ぱいになりつつ、四よつ葉はなりに私わたしのことを心しん配ぱいしてくれてたんだと思おもい至いたり、ああやっぱり可愛かわいいなどちょっと愛いとおしくなる。よしいっちょ面目まじめに検けん討とうしてみようかな口くち噛かみ酒ざけビジネス。……あれ、お酒さけって

勝かつ手に売うっていいんだっけ？

「ねえ、どうお姉ねえちゃんこのアイデア？」

「うーん……」

うーん。やはり。

「やっぱダメ！ 酒しゅ税せい法ほう違ひ反はん！」

あれ、そういう問もん題だいやっけと自じ分ぶんで思おもいつつ、気きづけば私わたしは駆かけ出だしている。いろんな出で来き事ごとや感かん情じょうや展てん望ぼうや疑ぎ問もんや絶ぜつ望ぼうがないまぜになつて、胸むねが爆ばく発はつしそうになっている。一段だん飛とばしに階かい段だんを駆かけ下おり、踊おどり場ばの鳥とり居いの下したで急きゅうブレーキをかけ、喉のどいっぱいに夜よるの冷れい気きを送あぐり込こむ。胸むねの中なかのぐちゃぐちゃを、その空くう気きでもつて私わたしは思おもいきり吐はき出だす。

「もうこんな町まちいややー！ こんな人じん生せいいややー！ 来らい世せは東とう京きょうのイケメン男だん子しにしてください！」

さーい。さーい。さーい。さーい……

夜よるの山やまにこだました私わたしの願ねがいは、眼がん下かの糸いと守もり湖こに吸すい込こまれるようにして消きえていく。反はん射しゃ的てきに口くちにした言こと葉ばのあまりのくだらなさに、私わたしの頭あたまは汗あせと一いつ緒しょにすーっと冷ひえていく。

ああ、それでも。

神かみさま、本ほん当とうにいるならば。

どうか 。

神かみさまが本ほん当とうにいるならば、それでもなにを願ねがえば良よいのか、私わたしは自じ分ぶんでも分わからないのだった。

第三章

日々



知しらないベルの音おとだ。

まどろみの中なかでそう思おもった。目め覚ざまし？ でも、私わたしはまだ眠ねむいのだ。ていうかまだ寝ねてよう。目めをつむったまま、布ふ団とんの脇わきに置おいたはずのスマフォを手てで探さぐる。

あれ？

私わたしはさらに手てを伸のばす。もうウルサいなーこのアラーム。どこに置おいたっけ……。

「 痛いたっ！」

どしん、と背せ中なかが思おもいきり床ゆかにぶつかる。どうやらベッドから落おちてしまったらしい。いててて……って、え？ ベッド？

ようやく目めを開あけて、私わたしは上じょう半はん身しんを起おこした。

あれ？

ぜんぜん知しらない部へ屋や。

に、私わたしはいる。

私わたし、昨日きのうどこかに泊とまつたっけ？

「……どこ？」

と呴つぶやいたとたん、喉のどの妙みょうな重おもさに気きづく。反はん射しゃ的てきに手てをやる。硬かたく尖とがった喉のどに、指ゆびが触ふれる。「んん？」とふたたび漏もらした声こえが、やけに低ひくい。視し線せんを体からだに落おとしてみる。

……ない。

見み覚おぼえのないTシャツはお腹なかまですとんとまっすぐに落おちていて、ない。

おっぱいが、ない。

そして、やけに見み通とおしの良よい下か半はん身しんのその真まん中なかに、なにかがある。おっぱい不ふ在ざいの違い和わ感かんを覆くつがえすくらいの強きょう烈れつな存そん在ざい感かんを、それは放はなっている。

.....これ、なに.....?

そろりそろりと、私わたしはその部ぶ分ぶんに手てを伸のばしてみる。

.....これって。.....これって、もしかして部ぶ位い的てきに。

.....。

.....。

.....。

手てが触ふれる。

あやうく気きを失うしないそうに、私わたしはなる。

誰だれ、この男おとこ?

知しらない洗せん面めん所じょの鏡かがみに映うつった知しらない顔かおを、私わたしはじっと見みつめている。



眉まゆにかかるくらいの、無む造ぞう作さと造ぞう作さの 6 : 4 くら

いを狙ねらったようなちょっとチャラい髪かみ型がた。頑がん固こそうな眉まゆと、でもちょっとヒトの良よさそうな大おおきめの瞳ひとみ。保ほ湿しつの概がい念ねんとは無む縁えんそうな荒あれた唇くちびる、硬かたそうな首くび筋すじ。ずっと見み晴はらしの良よい薄うすい頬ほおの片かた側がわにはなぜか大おおきな絆ばん創そう膏こうが貼はってあって、恐おそるおそる触さわってみると、鈍にぶい痛いたみが走はしる。

でも。痛いたいのに、目めが覚さめない。喉のどがからからに渴かわいでいる。私わたしは蛇じゃ口ぐちをひねって、両りょう手てに溜ためた水すい道どう水すいを飲のむ。それは不ふ快かいにぬるくて、プールの水みずみたいに薫くすりくさい。

「タキ、起おきたかー？」

突然ぜん遠とおくから男だん性せいの声こえがして、きやつ、と私わたしは小ちいさく悲ひ鳴めいを上あげてしまう。タキ？

「……お前まえ、今日きょうメシ当とう番ばんだっただろ？ 寝ね坊ぼうしやがって」

リビングらしき部へ屋やをこわごわ覗のぞくと、スーツ姿すがたのおじさんがちらりと私わたしを見みて、すぐに視し線せんを食しょっ器きに戻もどしながらそう言いった。

「す、すみません！」

反はん射しゃ的てきに謝あやまってしまう。

「俺おれ、先さきに出でるからな。味噌みそ汁しるあるから、飲のんじゃってくれ」

「あ、ハイ」

「遅ち刻こくでも、学がっ校こうはちゃんと行いけよ」

おじさんはそう言いいながら手て早ばやく食しょっ器きを重かさねて小ちいさな台だい所どころに下さげ、入いり口ぐちで固かたまっている私わたしをすり抜ぬけて玄げん関かんまで行きき靴くつを履はき、ドアを開あけ、外そとに出でて、ドアを閉しめた。トンビがひと鳴なきする

くらいの、あっという間だった。

「……へんな夢ゆめ」

と私わたしは声こえに出だしてみる。あらためて部へ屋やを見み回まわす。壁かべ中じゅうに、橋はしとかビルとか建けん築ちく物ぶつの写しゃ真しんやデザイン画がが貼はってある。床ゆかには雑ざつ誌しや紙かみ袋ぶくろや段だんボールが無む造ぞう作さに散ちらかっていて、まるで老舗しにせ旅りょ館かんみたいにきっちりした宮みや水みず家け（それはお祖母ばあちゃんのおかげだけれど）に比くらべると、なんだか無む法ほう地ち帯たいといった印いん象しよう。間ま取どりはずいぶん狭せまく、これはたぶんマンションの一いっ室しつだ。私わたしの夢ゆめにしては出しゅっ典てん不ふ明めいだけれど、ずいぶんリアリティがあるなあと感かん心しんしてしまう。なにげにイマジネーション豊ゆたかなのね私わたし。将しよう来らい美び術じゅつ系けいとかもアリかな。

ぴろりん！

まるでツッコミみたいなタイミングで、廊ろう下かの奥おくで着ちゃく信しん音おんが響ひびいた。ひっ、と息いきを呑のみ、私わたしは慌あわててベッドのあった部へ屋やに駆かけ戻もどる。シーツの脇わきにスマフォが落おちていて、その画が面めんには短みじかいメッセージ。

もしかしてまだ家いえか？ 走はしってこい！ ツカサ

え、なになに？ 誰だれよツカサって!?

とにかく学がっ校こうに行いかなきゃいかんのねと、私わたしは部へ屋やを見み渡わたす。窓まどの脇わきに吊つるされた男おとこ物ものの制せい服ふくが目めに留とまり、手てに取とったところで、さらなる緊きん急きゅう事じ態たいに私わたしは気きづく。

ああ、なんてことなの……！

……私わたし、トイレに行いきたい……。

どっはああああー、と、私わたしは全ぜん身しんが崩くずれ落おちる
くらいのため息いきをつく。

男おとこの体からだっていいったいなんなのよ!?

なんとかトイレはクリアしたものの、怒いかりでまだ体からだが震ふ
るえている。

あーん、私わたし、まだ見みたこともなかったのに！　はばかりなが
らこれでも巫女みこなのにー！

あまりの恥ち辱じょくにぎゅうとうつむいて涙なみだをこらえなが
ら、いやこらえきれずに実じっ際さいに何なん粒つぶか涙なみだをこぼ
しちゃいながら、制せい服ふくに着き替がえた私わたしはマンションの
ドアを開あけた。とにかく出でかけよう、と顔かおを上あげる。

すると。

目めを、奪うばわれた。

私わたしは、眼がん前ぜんの風ふう景けいに。

息いきを呑のんだ。



私わたしが立たっているのは、たぶん高たか台だいにあるマンション

の廊ろう下か。

眼がん下かには大おおきな公こう園えんのような縁みどりが、たっぷりと広ひろがっている。空そらは色いろむらのまったくない、鮮あざやかなセルリアンブルー。その青あおと縁みどりの境さかい目めに、まるでとっておきの折おり紙がみを丁てい寧ねいに並ならべたみたいに、大だい小しようのビル群ぐんがずらりと並ならんでいる。その一つひとつには微び細さいで精せい巧こうな窓まどが編あみ目めのように刻こく印いんされていて、ある窓まどは青あおを映うつし、ある窓まどは縁みどりに染そまり、ある窓まどは朝あさ日ひをきらきらと反はん射しゃしている。遠とおくに小ちいさく見みえる赤あかい尖せん塔とうや、どこかクジラを思おもわせるような丸まるみを持もった銀ぎん色いろのビル、一枚まいの黒こく曜よう石せきから切きり取とったみたいな黒くろく輝かがやくビル、そういういくつかの建たて物ものはきっと有ゆう名めいで、私わたしにも見み覚おぼえがある。遠とおくにオモチャのような自じ動どう車しゃが、列れつをなして整せい然ぜんと流ながれている。

それは想そう像ぞうしていたよりも　いや、考かんがえてみれば私わたしは真しん剣けんにその姿すがたを思おもい描えがいたこともなかつたのだけれど　、テレビや映えい画がで見みるよりもずっとずっとるわしい、日に本ほんでいちばん大おおきな街まちの景色けしきだった。私わたしはなんだかじんと胸むねをうたれながら、

東とう京きょうだ。

と、呟つぶやいた。

世世界かいがあんまりに眩まぶしくて、私わたしは太たい陽ようを見みる時ときみたいに、息いきを吸すいながら目めを細ほそめる。

「ねーねーこれどこで買かったの？」「レッスン帰がえりに西にし麻あざ布ぶの」「あいつら次つぎのライブの前ぜん座ざでさ」「なあ今日きょう部ぶ活かつサボって映えい画がでも」「今こん夜やの合ごうコンに代だい理り店てんのリーマンが」

な、なにこの会かい話わ？　このヒトたちほんとに現げん代だい日に本ほんの高こう校こう生せい？　F a c e フェイスb o o k ブックのセ

レブの投とう稿こう読よみ上あげてるだけとか？

私わたしはドアに半はん分ぶん隠かくれるようにして、教きょう室しつを観かん察さつしながら中なかに入はいるタイミングをうかがっている。スマフォのG P Sを頼たよりにそれでも迷まよいまくりながらようやく学がっ校こうに辿たどりついた時ときには、キンコンカンコンとお昼ひるのチャイムが鳴なっていた。

それにしても、この校こう舎しゃも　壁かべ全ぜん面めんのガラス窓まどに打うち放はなしのコンクリート、丸まるい窓まどのついたカラフルな鉄てつのドア、これって世世界かい万ばん博ぱく会かい場じょうとかなのでは？　というくらい異い様ようにお洒しゃ落れだ。立たち花ばな瀧たきとかいうこの男おとこは、私わたしと同おなじ歳としでこんな世世界かいに生いきているのか。私わたしは生せい徒と手て帳ちようで確かく認にんしたコイツの名な前まえと、証しょう明めい写しゃ真しんの涼すずしげな表ひょう情じょうを思おもい浮うかべる。なんかちょっとムカつく。

「たーきっ！」

「っ！」

突とつ然ぜんに背せ中なかから誰だれかに肩かたを抱だかれて、声こえにならない悲ひ鳴めいを私わたしは上あげた。見みると、眼鏡めがねで委い員いん長ちょう風ふうの（でもさっぱりと洗せん練れんされた）男おとこの子こが、前まえ髪がみが触ふれあうくらいの距きょ離りでにっこりと笑わらっている。きゃーちょっと誰だれか、人じん生せいで最さい接せつ近きん男だん子しなんですけどこのヒト！

「まさか昼ひるから来くるとはね。メシ行いこうぜ」

そう言ひってこの眼鏡めがね男だん子しは、私わたしの肩かたを抱だいたまま廊ろう下かを歩あるき出だす。ちょっとちょっと、くっつきすぎだってば！

「メール無む視ししやがって」と怒おこったふうでもなく彼かれは言い、あ、と私わたしは思おもい至いたる。

「……ツカサ、くん？」

「はは、くん付づけ？　反はん省せいの表ひょう明めい？」

なんと答こたえて良よいか分わからず、私わたしはとりあえずすすす、と、彼かれの腕うでから体からだを離はなした。

「……迷まよったあ？」

高たか木ぎ、と呼よばれている大おお柄がらで人ひとの良よさそうな男だん子しが、呆あきれ顔がおを隠かくさずに大おお声ごえで言いう。

「お前まえさあ、どうやつたら通つう学がくで道みちに迷まよえんだよ？」

「えーと……」と私わたしは口くちごもる。私わたしたちは広ひろい屋おく上じょうのすみっこに三人にんで座すわっている。今いまは昼ひる休やすみのはずだけれど、夏なつの日ひ差ざしを避さけてか周しゅう囲いには人ひとはまばら。

「えーと、あの、私わたし……」

「ワタシ？」

高たか木ぎくんと司つかさくんが、怪け訝げんそうに顔かおを見み合あわせる。しまった、今いま、私わたしは立たち花ばな瀧たきなんだ。

「あ、その、ええと……あ、わたくし！」

「んん？」

「僕ぼく！」

「はあ？」

「……俺おれ？」

うむ、

と、怪け訝げんそうな表ひょう情じょうながらも二人ふたりはうなづく。なるほど、「俺おれ」ね。心こころ得えた！

「……俺おれ、楽たのしかったんやよ。なんかお祭まつりみたいににぎやかやね、東とう京きょうって」

「……なんか、お前まえなまってない？」と高たか木ぎくん。

「ええ！」なまってるの？ 私わたしはボッと赤あかくなる。

「瀧たき、弁べん当とうは？」と司つかさくん。

「えええ！」持もってきてないよ！

汗あせをだらだら流ながしながら学がく生せい鞆かばんを確かく認にんする私わたしを見みて、「熱ねつでもあんのか？」と二人ふたりは面おも白しろそうに笑わらう。

「司つかさ、お前まえなんかある？」「卵たまごサンド。お前まえのそこのロッケ挟はさもうぜ」

ほらよ、と即そく席せきに出で来き上あがった卵たまごコロッケサンドを、そして二人ふたりは私わたしに手て渡わたしてくれる。私わたしはじーんと感かん動どうしてしまう。

「ありがとう……」

無む言ごんでにっこり笑わらう二人ふたり。男だん子しがこんなにスマートで優やさしいなんて……！ ああダメよ三みつ葉は、二人ふたり同どう時じに好すきになつたりしちゃ！ いやまあなんないけど。とにかく東とう京きょうってやっぱりすごすぎる！

「でさ。今日きょうの放ほう課か後ご、もういっかいカフェ行いかねえ？」

そう言いった高たか木ぎくんの口くちにご飯はんが運はこばれていくのを、思おもわず私わたしは凝ぎょう視しする。

「ああ、いいね」と言ひてペットボトルの水みずを飲のむ司つかさくんの喉のどが、滑なめらかに動うごいている。え、なに、今いまどこに行いくって……

「カフェ、瀧たきは？ 行いくだろ？」

「え！」

「だからカフェ」

「か、か、カフェえええー!?」

二人ふたりの眉み間けんのしわが深ふかくなるのも構かまわず、私わたしはテンションの上じょう昇しようを抑おさえられずに叫さけんでしまう。今いまこそ、バス停ていカフェのリベンジよ！

アイドル風ふうの服ふくを着きせられた小こ型がた犬けんが二匹ひき、ちよこんと籐とう椅い子すに座すわって、あめ玉だまみたいな瞳ひとみで私わたしを見みつめながら千ち切ぎれそうな勢いきついで尻しつ尾ぼを振ふっている。テーブルとテーブルの間かん隔かくはやけにゆつたりとしていて、なんと半はん分ぶんくらいの客きやくが外がい国こく人じんで、なんと1／3がサングラスをかけていて、3／5が帽ぼう子しをかぶっていて、スーツ姿すがたは一人ひとりもおらず全ぜん員いん職しょく業ぎょう不ふ詳しようだ。

なにこの場ば所しょ？　いい大人おとなが平へい日じつの陽ひも高たかいうちから犬いぬ連つれてカフェ!?

「天てん井じょうの木き組ぐみがいいね」「ああ。やっぱ手てがかかつてんなあ」

そんな超ちょう絶ぜつお洒しゃ落れ空くう間かんで司つかさくんと高たか木ぎくんはまったく臆おくするふうもなく、笑え顔がおで内ない装そうの感かん想そうなんかを語かたり合あっている。どうもこの子こたちは建けん築ちく物ぶつに興きょう味みがあつてカフェ巡めぐりをしているらしい。なにその趣しゅ味み!?　男だん子し高こう校こう生せいの趣しゅ味みって『ムー』とかじゃないの!?

「瀧たき、決きました？」

司つかさくんにうながされ、私わたしは店てん内ない観かん察さつを中ちゅう断だんしどっしりと重おもい革かわ表びょう紙しのメニューに目めを落おとす。

「……！　こ、このパンケーキ代だいで、俺おれ一ヶ月げつは暮くらせるんですけど！」

「いつの時じ代だいのヒトだよ、お前まえは」と高たか木ぎくんが笑わらう。

「うーん……」

私わたしはしばし悩なやみ、あ、そうだ、夢ゆめだったと気きづく。じゃ、ま、いいか。お金かねも立たち花ばな瀧たきのだし。好すきなの食たべよっと。

はあー、いい夢ゆめー……。

マンゴーとかブルーベリーとかにどっかりと囲かこまれた要よう塞さい、といった風ふ情せいの重じゅう量りょう級きゅうパンケーキを食たべ終おえて、私わたしは深ふかく満まん足ぞくしてシナモンコーヒーをすする。

ぴろりん。

ポケットのスマフォが鳴なる。……なんか、怒いかりマークが多た用ようされたメッセージが。

「……わ！ ねえ、どうしよう、俺おれバイト遅ち刻こくだって！ なんか上じょう司しみたいなヒトが怒おこってる！」

「あれ、お前まえのシフト、今日きょうだっけか」と高たか木ぎくん。
「じゃ、早はやく行いったら」と司つかさくん。

「うん！」私わたしは慌あわてて立たち上あがる。あ、でも……。

「……どうした？」

「あのぉ、私わたしのバイト先さきて、どこだっけ？」

「……はああ？」

呆あきれるを通とおり越こして、なんだかキレ気ぎ味みの二人ふたり。だって私わたしこの男おとこのことなんにも知しらないんだってば！

「ねえちょっと注ちゅう文もんまだですか？」

「瀧たき！ 十二番ばんテーブルオーダー取とってこい！」

「これ、頼たのんでませんけど」

「瀧たき！ トリュフは品しな切ぎれだって言いったろ!?」

「お会かい計けいまだですかー？」

「瀧たき、そこ邪じや魔まだどけ！」

「瀧たき、てめえ真面目まじめにやれ！」

「瀧たき！」

そこは、これまた大たい変へんに格かく式しきの高たかそうなイタリアンレストランだった。

吹ふき抜ぬけの二階かい建だてで、ピカピカのシャンデリアが吊つり下さがっていて、映えい画がで見みたようなおっきなプロペラが天てん井じょうでゆったりと回かい転てんしている。立たち花ばな瀧たきは蝶ちょうネクタイ姿すがたのウェイターをやっており、そして夕ゆう食しょく時どきのその店みせはもう、地じ獄ごくみたいな忙いそがしさだった。

私わたしは注ちゅう文もんを間ま違ちがえ、配はい膳ぜんを間ま違ちがえ、お客様やくに舌した打うちされ、シェフに怒ど鳴なられながら、濁だく流れりゅうに流ながされるみたいにして右う往おう左さ往おうし続づけている。ていうか私わたしここ初はじめてなんんですけど！ ていうかアルバイト自じ体たいやつしたことないし！ ていうかこれ端たん的てきに悪あく夢むじゃん！ あーんもう、ほんとにこの夢ゆめいつ覚さめるのよお!? なにもかもアンタのせいだ立たち花ばな瀧たきめ！

「 ちょっと。ちょっとそこのお兄にいさん」

「え、あ、はい！」

私わたしはその声こえの主ぬしをちょっと通とおり過すぎてしまつてから、慌あわてて振ふり向むく（「お兄にいさん」じゃ分わかんないつづーの）。

うわ。開かい襟きんシャツに金きん色いろのネックレスをして何なん本ほんもごつつい指ゆび輪わをはめた、とても分わかりやすくチンピラ

風ふうの男おとこの人ひとだ。あ、でもこんな感かんじのヒト、私わたしの町まちの隣となりの市しくらいまで行いけば駅えき前まえとかにけっこういるな。他ほかの芸げい能のう人じんみたいなキラキラしたお客様きゃくさんたちより、ちょっと親しん近きん感かん持もてるかも。薄うすい笑えみが貼はりついた声こえで、その人ひとは私わたしに言う。

「ピザにさ、楊よう枝じが入はいってたんだけど」

「え？」

チンピラさんがつまみ上あげたバジルピザの最さい後ごの一ひと切れには、断だん面めんに「刺さしたよー」という感かんじで爪つま楊よう枝じがぷすりと刺ささっている。冗じょう談だんを言いわれているのかもしれない。どう応おうじれば良よいのかと戸と惑まどっていると、固こ定ていされたような笑えみのままチンピラさんが言いう。

「これ、喰くっちゃったら危あぶないよね？ 僕おれが気きづいたから良よかったです。……どうすんの？」

「え……」

ご自じ分ぶんで刺さしたんですよね？ とは、さすがに言いつちゃいけない気きがする。私わたしは曖あい昧まいな笑え顔がおを作つくる。と、反はん対たいに彼かれの笑え顔がおがするりと消きえた。

「どうすんのって訊きいてるんだけど!?」

ガシャン！ 膝ひざでテーブルを蹴けり上あげて突とつ然ぜんに怒ど鳴なる。店みせのざわめきが瞬しゅん間かん冷れい凍とうされたみたいにぴたりと止やみ、私わたしの体からだも固かたまってしまう。

「お客様きゃくさま！ どうかなさいましたか？」

現あらわれた女じょ性せいに、私わたしの体からだは押おしやられた。彼女かのじょはちらりとこちらを見みて、「ここはいいから！」と小こ声ごえで言いう。後うしろから別べつの人ひとに腕うでを掴つかまれ、私わたしは引ひきずられるようにその場ばから離はなされた。見みるとそれは先せん輩ぱいらしき男だん性せいウェイターで、「お前まえ、今日きょうおかしいぞ？」と心しん配ぱい顔がおだ。「 それは大たい変へん失しつ礼れいいたしました！」とチンピラさんに向むかっ

て深ふかく頭あたまを下さげる女じょ性せいの姿すがたが、目めの端はしに映うつる。店みせのざわめきが、ボリュームつまみを回まわすみたいにして再ふたたび戻もどってくる。

芝しば刈かり機きみたいいでっかい業ぎょう務む用よう掃そう除じ機きを、私わたしは床ゆかにかけている。店みせの営えい業ぎょうがようやく終おわり、シャンデリアの明あかりは落おとされて、全すべてのテーブルからクロスは剥はがされ、ある人ひとはグラスを磨みがき、ある人ひとは冷れい蔵ぞう庫この在ざい庫こをチェックし、ある人ひとはレジカウンターのパソコンを操そう作さしている。

そして私わたしを助たすけてくれたあの女じょ性せいはテーブルを一つひとつ拭ふいていて、私わたしはさっきから、話はなしかけるタイミングをつかめずにいる。緩ゆるくウェーブのかかった長ながい髪かみが横よこ顔がおから目め元もとを隠かくしていて、表ひょう情じょうが読よめない。でも、艶つややかなグロスの唇くちびるは優やさしげな微び笑しようの形かたちだ。手て脚あしがすらりとしていて腰こしがきゅっと細ほそくてでもおっぱいが大おおきくて、なんだかすごく格かっ好こいい。その誇ほこらしげなおっぱいに乗のっかったネームプレートに「奥おく寺でら」と書かかれているのを、私わたしは通とおりすがりに捉とらえる。よし！

「 奥おく寺でらさん」

と思おもい切きて声こえに出だしたところで、後うしろからコツンと頭あたまを小こ突づかれた。

「先せん輩ぱいだろうが！」冗じょう談だんめかした声こわ色いろで、私わたしを小こ突づいた男おとこの人ひとはメニューの束たばを片かた手てに厨ちゅう房ぼうに戻もどっていく。なるほど先せん輩ぱいなのね。よっしゃ！

「あの、奥おく寺でら先せん輩ぱい！ さっきは……」

「瀧たきくん。今日きょうは災さい難なんだったね」



先せん輩ぱいが振ふり向むいて、まっすぐに私わたしの目めを見みて

言いう。ばっちーんと天てん井じょうに向むかってカールした長ながい睫まつ毛げ、美び女じょの見み本ほんみたいなアーモンド型がたの瞳ひとみ、背せ中なかをくすぐる色いろっぽい声こえ。好すきです！ と反はん射しゃ的てきに告こく白はくしたくなる。頬ほおがちょっと赤あかくなきてきちゃうのを感かんじて、私わたしはあわてて目めを伏ふせる。

「あ、いえ、災さい難なんっていうか……」

「あいつ、絶ぜっ対たい言いいがかりだよ。マニュアル通どおりタダにしてやったけどさ」

さして怒おこっているふうでもなく、先せん輩ぱいは雑ぞう巾きんをくるりと裏うら返がえしにし、別べつのテーブル拭ふきに取とりかかる。あの、と話はなしの続つづきをしようとすると、

「きやつ、奥おく寺でらさん！」

と、別べつのウェイトレスさんが声こえを上あげた。

「そのスカート！」

「え？」

上じょう半はん身しんをひねって自じ分ぶんのお尻しりを見みおろした奥おく寺でら先せん輩ぱいの顔かおが、みるみる赤あかくなった。よく見みると太ふと腿ももの上うえあたりで、スカートがざっくり横よこに裂さかれている。えっ、と小ちいさく悲ひ鳴めいをあげて、先せん輩ぱいはエプロンの前まえ掛けを回まわして裂さけ目めを隠かくす。

「怪け我がしてないか？」「ひでえな、あの客きゃくか？」「なんか前まえもあったよね、こういうこと」「嫌いやがらせ？」「あいつの顔かお覚おぼえてるか？」

何なん人にんかの従じゅう業ぎょう員いんが先せん輩ぱいの周しゅう囲いに集あつまってきて、心しん配ぱいそうにそんな話はなしをする。先せん輩ぱいはじっとうつむいたまま。私わたしは言いいかけの言こと葉ばを口くちの中なかに入いれたまま、ばかみたいに突つ立たっている。奥おく寺でら先せん輩ぱいの肩かたが、すこし震ふるえている。涙なみだがすこしだけ、彼女かのじょの目め元もとに盛もり上あがるのが見みえたような気きがする。

今こん度どは私わたしが助たすけなきや。

弾はじかれるように私わたしは思おもい、気きづいたら、先せん輩ぱいの手てを掴つかんで歩あるき出だしていた。おい、瀧たきてめえ！と背せ中なかに聞きこえる声こえも無む視しして。

縁みどりは原はらっぱ。オレンジは花はなと蝶ちょう々ちょ。もう一つくらいモチーフが欲ほしい。茶ちゃ色いろは　、うん、ハリネズミに。クリーム色いろはその鼻はな。

スカートの裂さけ目めをつまんで、私わたしはすいすいとかがり縫ぬいをしていく。更こう衣い室しつの裁さい縫ほう箱ばこにはなぜか刺し繡しゅう糸いとが何なん色しょくかあったから、この際さいちよつと凝こった修しゅう繕ぜんに。お祖母ばあちゃんに鍛きたえられた私わたしにとって、針はり仕し事ごとは得とく意い中ちゅうの得とく意いだ。

「できました！」

ささっと五分ふんほどで仕し上あがったスカートを、私わたしは奥おく寺でら先せん輩ぱいに渡わたした。

「……え、これって……」

私わたしに更こう衣い室しつに連つれてこられて、なんだか不ふ審しんげで不ふ安あんそうだった先せん輩ぱいの表ひょう情じょうが、みると驚おどろきに変わる。

「すごい！ ねえ瀧たきくんすごい！ これ、前まえよりも可愛かわいい！」

スカートの裂さけ目めは十センチくらいの横よこ一いつ直ちょく線せんだったから、私わたしはその部ぶ分ぶんを縫ぬい合あわせつつも、原はらっぱで遊あそぶハリネズミのスケッチにしたのだ。スカートはダークブラウンだから小ちいさな装そう飾しょくはワンポイントになるし、先せん輩ぱいみたいなきりっとした美び人じんには可愛かわいらしいモチーフがかえって似に合あうと思おもって。雑ざっ誌しのモデルみたいだった先せん輩ぱいの整ととのった美び人じん顔がおが、近きん所じよのお姉ねえさんみたいにぐっと身み近ぢかなものに、笑わらうとなっ

た。

「今日きょうは助たすけていただいて、ありがとうございました」

やっと言いえた。

「ふふ」

先せん輩ぱいは、大おおきな瞳ひとみを柔やわらかく細ほそめる。

「ホントはね、私わたしあの時とき、ちょっと心しん配ぱいだったのよ。瀧たきくん、弱よわいクセに喧けん嘩かっぱやいから」

自じ分ぶんの左ひだり頬ほほを細ほそい指ゆびでトントンとたたきながら先せん輩ぱいは言いう。あ。と、私わたしは立たち花ばな瀧たきの顔かおに貼はられている絆ばん創そう膏こうの理り由ゆうを、なんとなく理り解かいする。

「今日きょうの君きみのほうがいいよ」と、ちょっといたずらっぽく先せん輩ぱいは言いう。

「意い外がいに女じょ子し力りよく高たかいんだね、瀧たきくんって」

すっきゅーんと、私わたしの心しん臓ぞうが跳はね上あがる。それは手て持もちのなにもかもを無む償しようで差さし出だしたくなっちゃうような最さい強きょうの笑え顔がおで、今日きょう東とう京きょうで目めにしたものの中なかでいちばん尊とうといと、私わたしは思おもった。

帰かえりの黄き色いろい電でん車しゃは、すいていた。

今いまになって、東とう京きょうは様さま々ざまな匂においに満みちていることに私わたしは気きづく。コンビニ、ファミレス、すれ違ちがう人ひと、公こう園えん脇わき、工こう事じ現げん場ば、夜よるの駅えき、電でん車しゃの中なか、ほとんど十歩ぼごとに匂においが変わつた。人にん間げんっていう生きいき物ものは集あつまるとこんなに濃こい匂においを出だすんだと、私わたしは今まで知しらなかった。そしてこの街まちには、目めの前まえを流ながれるこの窓まどの明あかりのぶんだけ、人ひとの生せい活かつがあるのだ。視し界かいの果はてまで並ならぶ建たて物もの、目めも眩くらむようなその数かずに、まるで山

さん脈みやくみたいなその圧あっ倒とう的てきな重じゅう量りょうに、私わたしの心こころはなんだかざわめく。

そして立たち花ばな瀧たきもまた、この街まちに住すむ一人ひとりなんだ。私わたしは電でん車しゃの窓まどガラスに映うつった男おとこの子こに、そっと手てを伸のばしてみる。ちょっとムカついたりもしたけれど、まあ嫌きらいじゃない顔かおかも。大たい変へんな一いち日にちを共ともに乗のりきった戦せん友ゆうみたいな親したしみを、私わたしはこの男おとこの子こに感かんじはじめている。それにしても

。

「それにしても、我われながらホントに良よく出で來きた夢ゆめやなー……」

帰き宅たくした私わたしは、今朝けさ目め覚ざめたベッドにふたたび身みを投なげ出だした。

ねえねえこんな夢ゆめを見みたんやよ、ちょっとすごくない？ そんなふうに、明日あしたテッシーとサヤちんに話はなしてあげよう。どう、まるで見みてきたみたいなこの想そう像ぞう力りょく！ 私わたしたぶん漫まん画が家かとかになれてまうな、いや絵えはちょっと苦にが手てだから小しょう説せつ家かとかなら楽らく勝しようか？ たぶんけっこう稼かせげるで、みんなで東とう京きょうでルームシェアとかしちゃう？

そんなことをにやにやと想そう像ぞうしながら、私わたしは仰あお向むけになって、なんとなく立たち花ばな瀧たきのスマフォを手てに取とり、すいすいと指ゆびで覗のぞいてみる。あ、このヒト日につ記きなんかつけてる。

「9/7 司つかさたちとKFC喰くう」「9/6 日ひ比び谷やにて
映えい画が」「8/31 建けん築ちく巡めぐり・湾わん岸がん編へん」
「8/25 バイト給きゅう料りょう日び！」

見み出だしをスクロールさせてさかのぼりながら、「マメな子こやねえ」と思おもわず私わたしは感かん心しんしてしまう。それから写しゃ真しんロールをタップ。風ふう景けい写しゃ真しんがほとんどで、その

次つぎに司つかさくんたちとの写しゃ真しんが多おおい。一いっ緒しょにラーメン食たべたり公こう園えんに行いったり、仲なか良いいんだな。牛ぎゅう丼どん屋や、駅えきのおそば屋や、お洒しゃ落れなハンバーガー屋や。学がっ校こうの帰かえり道みち、ビルの谷たに間まの夕ゆう焼やけ、友ともだちの後うしろ姿すがた、見み上あげた空そらには飛び行こう機き雲ぐも。

「いいなあ、東とう京きょう生せい活かつ」

そう呴つぶやくと、あくびがひとつ出でた。そろそろ眠ねむいかもと思おもいつつ、次つぎの写しゃ真しん。

「あ、奥おく寺でら先せん輩ぱい」

先せん輩ぱいがレストランの窓まどを拭ふいているその写しゃ真しんは後うしろ姿すがたで、こっそり隠かくし撮どりした雰ふん囲い気きだ。次つぎの一枚まいでは、気きづいた先せん輩ぱいがこちらを向むいて笑え顔がおでピースをしている。

……もしかしてこの子こ、奥おく寺でら先せん輩ぱいが好すきなのかも。ふと、私わたしはそう思おもう。でもきっと片かた想おもいなんだろうな。先せん輩ぱいは大だい学がく生せい、高こう校こう生せい男だん子しなんてぜんぜん子こどもだ。

私わたしはベッドから体からだを起おこし、日につ記きアプリで今日きょうのエントリーを作さく成せいしてみる。そして今日きょう一いち日にち、私わたしが体たい験けんした出で来き事ごとを入にゅう力りょくし始はじめる。いろいろ失しつ敗ぱいもしたけれど、最さい後ごには奥おく寺でら先せん輩ぱいと仲なか良よくなっこったこと。バイトの帰かえり道みち、店みせから駅えきまでを一いっ緒しょに歩あるいたこと。そんな全ぜん部ぶを、私わたしは立たち花ばな瀧たきに報ほう告こくしてあげたいような自じ慢まんしたいような気き持もちで日につ記きに綴つづる。書かき終おえて、もう一いち度どあくびをする。するとふと、

お前まえは 誰だれだ？

国こく語ごのノートのあの落らく書がきを、なぜか私わたしは思おも

いだした。私わたしの姿すがたになった立たち花ばな瀧たきが糸いと守もり町まちの私わたしの部へ屋やで、眠ねむる前まえにあの文も字じを書かいている。そんな姿すがたが、なんとなく目めに浮うかぶ。へんな想そう像ぞう。でもそれは妙みょうな説せつ得とく力りょくを持もっている。私わたしは机つくえの上うえのマジックを手てに取とり、自じ分ぶんの手てのひらに

みつは

と書かいた。

ふわーあ.....。

三回かい目めのあくび。さすがに、今日きょうは疲つかれた。虹にじ色いろのシャワーを浴あび続つづけてたみたいに、カラフルでわくわくした一いち日にちだった。BGMなんてかけなくたって、世世界かいはずっと輝かがやいていた。自じ分ぶんの手てに書かかれた文も字じに驚おどろく立たち花ばな瀧たきを想そう像ぞうしてみて、ちょっと笑わらいながら、私わたしは眠ねむりに落おちていった。

* * *

「.....なんだ、これ？」

俺おれは自じ分ぶんの手てのひらを見みながら、思おもわず声こえに出だした。



手てのひらの文も字じから視し線せんを落おとすと、しわになった制

せい服ふくとネクタイ。……着き替がえもせずに寝ねたってことか？

「　な、な、なんだこれ!?」

今こん度どは、叫さけんでしまった。朝ちょう食しょくの席せきで、親父おやじはそんな俺おれにちらりと目めをやったが、速すみやかに無む関かん心しんとなり茶ちゃ碗わんに戻もどる。俺おれは愕がく然ぜんとしつつスマフォを凝ぎょう視しする。覚おぼえのない日につ記きが、長なが々ながと書かかれている。

……そしてバイト帰がえり、駅えきまでの道みちを奥おく寺でら先せん輩ぱいと二人ふたりきりで歩あるきました！　ぜんぶ私わたしの女じょ子し力りょくのおかげ

「瀧たき、今日きょうもカフェ行いかね？」

「あー悪わるい、俺おれ、このあとバイト」

「ははっ、行いき先さきは分わかるのか？」

「はあ？　……あっ、司つかさてめえ、もしかしてお前まえか？」

俺おれは反はん射しゃ的てきに声こえを荒あららげる。ていうかむしろコイツの仕し業わざであってほしい。だが、司つかさの怪け訝げんな表ひょう情じょうが違ちがうと告つげている。他た人にんが手て間ま暇ひまかけてこんないたずらをする理り由ゆうなんてない、自じ分ぶんでもそれは分わかっているのだ。

俺おれは椅い子すから立たち上あがりながら、渋しぶ々しぶと言う。

「……いや、やっぱいいや。じゃあな」

教きょう室しつを出でていく俺おれの背せ中なかに、あいつ今日きょうはフツウじゃん？　という高たか木ぎの声こえが届とどく。ぞわりと足あし元もとが寒さむくなる。なにか妙みようなことが、俺おれの身みに起おきている。

「……な、なんすか？」

バイトの制せい服ふくに着き替がえ更こう衣い室しつのドアを開あけると、行いく先さきを塞ふさぐようにして先せん輩ぱいたちが三人にん立たっていた。社しゃ員いんさん一人ひとりに大だい学がく生せいのアルバイト二人ふたり、皆みな男だん性せいで、充じゅう血けつしたような涙なみだぐんだような、とにかく不ふ吉きつな目めつきで俺おれをにらんでいる。ごくりと生なま唾つばを飲のんだ俺おれに、先せん輩ぱいたちはドスの利きいた声こえで言いう。

「……てめえ瀧たき、抜ぬけ駆がけしやがって」「説せつ明めいしろコラ」「昨日きのうお前まえら一いつ緒しょに帰かえっただろ」

「え……、え、まさかマジで!? 俺おれが? 奥おく寺でら先せん輩ぱいと!?'」

てことは、あの日につ記きは現げん実じつ!?

「お前まえら、あれからどうなった!?'」

「いや、あの……俺おれ、ほんとによく覚おぼえてないんすよ……」

「ふざけんなよコラ」

胸むなぐらを掴つかまれそうになったところで、涼すずしげな声こえがホールに響ひびいた。

「奥おく寺でら、入はいりまーす」

長ながい素す足あしとトップスから露ろ出しゅつした肩かたをぴかぴかと振ふりまきながら、奥おく寺でら先せん輩ぱいがやって來きた。編あみ上あげのサンダルを気き持もち良よく鳴ならしつつ、俺おれたちにも笑え顔がおで挨あい拶さつしてくれる。

「おっつかれ~」

「ちわっす！」

この店みせのアイドル的てき存そん在ざいである先せん輩ぱいの眩まぶしさの前まえに、俺おれたち男おとこ四人にんは思おもわず声こえを

揃そろえる。一いつ瞬しゅんトラブルを忘わすれかける。と、奥おく寺でら先せん輩ぱいがくるりと振ふり返かえり、俺おれを見みた。

「今日きょうもよろしくね。ね、瀧たきくん」

語ご尾びにハートマークがついていそうな甘あまさで先せん輩ぱいは言いい、ばっちーんと音おとがしそうなワインクをし、ドアの向むこうに消きえていった。俺おれは熱ねつ湯とうを頭あたまからかぶったように真まっ赤かになる。あまりのことに、今いますぐ店みせ中じゅうのグラスをぴかぴかに磨みがいてやりたくなる。

「……おい、瀧たき」

地ちの底そこから響ひびくような男おとこたちの暗くらい声こえに、俺おれはハッと我われに返かえる。

やべえ。先せん輩ぱいたちからの慟どう哭こくめいた追つい及きゅうを受うけながら、俺おれは考かんがえる。

これはいったい、どういうことなんだ？ 皆みなで示しめし合あわせて俺おれをからかっている？ まさか。俺おれの知しらないうちに、俺おれはなにをしてかしたんだ？

「みつは」って、いったいなんなんだ？

ちゅんちゅんと、鳥とりさんたちが今朝けさも元げん気きに鳴ないている。障しょう子じ越ごしに差さし込こむ朝あさ日ひも生うまれたての清せい潔けつさで、いつもと変かわらぬ平へい和わな朝あさだ。それなのに、目め覚ざめたばかりの私わたしの手てには、苛いら立だちそのものをぶつけたみたいな見み慣なれぬ筆ひつ跡せきがある。

みつは？？？ お前まえはなんだ？ お前まえは誰だれだ？？？？

極ごく太ぶとのマジックで乱らん暴ぼうに、手てのひらから肘ひじま

でにでかでかと書かきつけてある雑ざつな文も字じ。

「お姉ねえちゃん、なにそれ？」

見みると、四よつ葉はが襖ふすまを開あけて立たっている。こっちが訊ききたいわよ、という表ひょう情じょうを私わたしはする。まあどうでもいいけどさ、という顔かおを妹いもうとは作つくる。

「今日きょうは自じ分ぶんのおっぱい触さわっとらんのやな。ご・は・ん！ 早はよ来きない！」

ぴしゃり、と襖ふすまを閉しめるいつも通どおりの姿すがたを、私わたしは布ふ団とんに座すわったまま見み送おくった。え、おっぱい？ 今日きょうは触さわってない？ はあ？ ふと、自じ分ぶんのおっぱいを嬉うれしそうに触さわる私わたしの姿すがたが目めに浮うかぶ。……そ、それじゃまるっきりヘンタイじゃん！

「おはよー」

そう言いいながら教きょう室しつに入はいったとたん、クラスメイトたちの視し線せんが一いっ斉せいに私わたしに向むいた。ひっ、と私わたしは小ちいさく息いきを呑のむ。な、なに？ 小ちいさくなりながら窓まど際ぎわの席せきまで歩あるく私わたしに、ひそひそと囁ささやきが届とどく。宮みや水みず、昨日きのうカッコよかったよな。ちょっと見み直なおしたわ。でもあいつ、なんか性せい格かく変わってね？

「な、なんか視し線せんを感かんじるんやけど……」

「まあ、しょうがないやろ。昨日きのうのアレは目め立だったもんなあ」とサヤちん。

「昨日きのうのアレ？」

席せきに座すわりながら問とう私わたしの顔かおを、サヤちんが不ふ思し議ぎそうに心しん配ぱいそうに覗のぞき込こんだ。

ほら、昨日きのうの美び術じゅつの時じ間かん、静せい物ぶつスケッチで。え、やっぱりまた覚おぼえとらんの、三みつ葉はほんとに大だい丈じょう夫ぶ？ 私わたしと三みつ葉はは同おなじグループで、花か瓶びんとりんごっていう例れいの意い味み不ふ明めいモチーフを描か

いとったのね。なのに三みつ葉はは勝かっ手てに風ふう景けいスケッチなんてしとってさ、まあそれはいいんやけど、後うしろで松まつ本もとたちがまたいつもの陰かげ口ぐちを言いっとったんよ。え、聞ききたい？ うーん、ほら、町ちょう長ちょう選せんの話はなし。え、詳くわしく？ だから、町ちょう政せいなんて助じょ成せい金きんをどう配くばるかだけやで誰だれがやったって同おなじやとか、でもそれで生せい活かつしてる子こもあるしなとか、そんなくだらない話はなし。で、それを聞きいたあんたが、「あれって私わたしのことだよね？」って訊きいたんやさ、私わたしに。そうやと思おもうよって、そりゃ訊きかれたら答こたえるやろ。そしたら三みつ葉は、あんたなにしたと思おもう？ マジで覚おぼえてないの？ あんた、松まつ本もとたちに向むかって花か瓶びんの載のった机つくえを蹴けり倒たおしたんやよ！ しかもニヤリって笑わらいながら！ 松まつ本もとたちビビっちゃって、花か瓶びんは当とう然ぜん割われるし、クラス中じゅう静しずまりかえるし、ていうか私わたしもぞっとしたんやでね！

「な……な……。なんよそれ？」

私わたしは青あおざめる。授じゅ業ぎょうが終おわり、ダッシュで家いえに帰かえる。居い間まで呑のん気きにお茶ちゃなんか飲のんでいた四よつ葉はとお祖母ばあちゃんを尻しり目めに階かい段だんを駆かけ上あがり、自じ分ぶんの部へ屋やに籠こもり、古こ典てんのノートを開ひらく。「お前まえは 誰だれだ？」の文も字じ。さらにページをめくる。

ぞわ、と全ぜん身しんが粟あわ立だつ。同おなじ筆ひつ跡せきで、見み開ひらきページいっぽいに細こまかな文も字じが書かかれている。まず、大おおきく「宮みや水みず三みつ葉は」の文も字じ。その周しゅう囲いにはたくさんのハテナと、私わたしの個こ人じん情じょう報ほうの数かず々かず。

2年ねん3組くみ／テシガワラ♂・友ゆう人じん・オカルトマニア・バカだがいい奴やつ／サヤカ♀・友ゆう人じん・大人おとなしくてちょっと可愛かわいい

祖そ母ぼと妹いもうとのヨツハと三人にん暮ぐらし／ど田舎いなか／父ちちは町ちょう長ちょう／巫女みこをやってる？／母ははは亡なくなってるっぽい／父ちち親おや別べっ居きょ／友ともだち少すくなめ／胸むねはある

そしてひときわ大おおきく、「この人じん生せいはなんなんだ？？」の文も字じ。

震ふるえながらノートを見みつめる私わたしの頭あたまに、うっすらともやが昇のぼるみたいに、東とう京きょうの風ふう景けいがゆらめく。カフェ、アルバイト、男おとこ友とも達だち、誰だれかと歩あるいた帰かえり道みち……。

私わたしの心こころのすみっこが、あり得えっこない結かつ論ろんの尻しっ尾ぽをつかむ。

「これって……これってもしかして」

「これって、もしかして本ほん当とうに……」

俺おれは部へ屋やに籠こもり、信しんじられない思おもいでスマフォを凝ぎょう視ししている。さっきから指ゆび先さきが、半はん分ぶん誰だれかのものになってしまったみたいに勝かつ手てに震ふるえている。その指ゆびで、俺おれは日にっ記きアプリのエントリーを辿たどる。自じ分ぶんの書かいた日にっ記きに挟はさみ込こまれるようにして、覚おぼえのない見み出だしがいくつもある。

初はつ 原はら宿じゅく表おもて参さん道どうパニーニざんまい！／お台だい場ば水すい族ぞく館かんに男だん子じ二人ふたりと／展てん望ぼう台だい巡めぐりとフリーマーケット／お父とうさまの仕し事ごと場ば訪ほう問もん 震かすみヶが関せき！

俺おれの頭あたまの片かた隅すみが、あり得えないはずの結けつ論ろんの尾おをつかむ。

もしかして 。

俺おれは夢ゆめの中なかでこの女おんなと

私わたしは夢ゆめの中なかでの男おとこの子こと

入いれ替かわってる!?



*

*

*

山やまの端はから朝あさ日ひが昇のぼる。湖みずうみの町まちを、太たい陽ようの光ひかりが順じゅん番ばんに洗あらっていく。朝あさの鳥とり、昼ひるの静せい寂じやく、夕ゆうの虫むしの音おと、夜よ空ぞらの瞬またたき。

ビルの間あいだから朝あさ日ひが昇のぼる。無む数すうの窓まどを、太たい陽ようが順じゅん番ばんに光ひからせていく。朝あさの人ひと波なみ、昼ひるのざわめき、カタワレ時どきの生せい活かつの匂におい、夜よるの街まちの煌きらめき。

俺おれたちは、そのひとつときひと時ときに、何なん度ども見みとれる。

そして私わたしたちは、だんだんと理り解かいする。

立たち花ばな瀧たき 瀧たきくんは、東とう京きょうに住すむ同おなじ歳としの高こう校こう生せいで、

ど田舎いなか暮ぐらしの宮みや水みず三みつ葉はとの入いれ替かわりは不ふ定てい期きて、週しゅうに二、三度ど、ふいに訪おとずれる。トリガーは眠ねむること、原げん因いんは不ふ明めい。

入いれ替かわっていた時ときの記き憶おくは、目め覚ざめるとすぐに不ふ鮮せん明めいになってしまふ。まるで明めい晰せきな夢ゆめを見みていた直ちょく後ごみたいに。

それでも、俺おれたちは確たしかに入いれ替かわっている。なによりも周しゅう囲いの反はん応のうがそれを証しよう明めいしている。

そして、これは入いれ替かわりの体たい験けんなど意い識しきするようになってからは、夢ゆめの記き憶おくもすこしずつキープできるようになってきた。例たとえば今いまでは目め覚ざめている時じ間かんでも、瀧たきくんという男おとこの子こが東とう京きょうに暮くらしているんだと、私わたしには分わかっている。

どこかの田舎いなか町まちに三みつ葉はという女おんなが暮くらしているのだと、今いまでは俺おれは確かに信しんしている。理り由ゆうも

理り屈くつも分わからないが、妙みょうな実じっ感かんがある。

そして私わたしたちは、お互たがいにコミュニケーションを始はじめた。入いれ替かわった日ひは、スマフォに日にっ記きやメモを残のこし合あうという方ほう法ほうで。

メールや電でん話わも試ためしてみたが、なぜかどちらも通つうじなかつた。でもとにかく、コミュニケーションの方ほう法ほうがあつたのは幸こう運うんだった。俺おれたちはお互たがいの生せい活かつを守まもることが必ひつ要ようなのだ。だから、俺おれたちはルールを決きめた。

瀧たきくんへ 禁きん止し事じ項こうその1

お風ふ呂ろゼッタイ禁きん止し

体からだは見みない・触さわらない

座すわるとき脚あしを開ひらかないように

テッシーと必ひつ要よう以い上じょうに仲なか良よくしないで。彼かれはサヤちんとくっつけるべき

その他ほかの男だん子しには触さわるな

女じょ子しにも触さわるな

三みつ葉はへ 禁きん止し事じ項こうV e バー r . ジョン5

無む駄だ遣づかい禁きん止しだって前まえも言いったよな？

学がっ校こう・バイトに遅ち刻こくするな、いいかげん道みちを覚おぼえろ

訛なまるな

お前まえこっそり風ふ呂ろ入はいってない？ なんかシャンプーの香かおりが.....

司つかさとベタベタするな誤ご解かいされるだろアホ
奥おく寺でら先せん輩ぱいと馴なれ馴なれしくするな頼たのむから

それなのに、と、三みつ葉はの残のこした日につ書きを読よみながら、俺おれは今日きょうも歯はぎしりをする。

私わたしは瀧たきくんの日につ書きを読よみながら、むかむかむかと腹はらが立たって仕し方かたがない。まったくまったく本ほん当とうに、



は.....！

バスケの授じゅ業ぎょうで大だい活かつ躍やくした!? 私わたしそうい

うキャラじゃないんだってば！ しかも男だん子しの前まえで飛とんだり跳はねたりしてるですって!? 胸むねも腹はらも脚あしもちゃんと隠かくせってサヤちんに叱しかられたわよ！ 男だん子しの視し線せん、スカート注ちゅう意い、人じん生せいの基き本ほんでしょう!?



三みつ葉はてめえ、ばか高たかいケーキとかドカ喰ぐいしてんじゃねえよ！ 司つかさたちが引ひいてるだろう、ていうかそれ俺おれの金かねだろうが！



食たべてるのは瀧たきくんの体からだ！ それに私わたしだってあのお店みせでバイトしてるし！ それより瀧たきくんバイト入いれすぎだよ、ぜんぜん遊あそびに行いけないじゃない。



お前まえの無む駄だ遣づかいのせいだろ！ それから婆ばあちゃんとの組くみ紐ひも作づくり、あれ俺おれには無む理りだって！



帰かえり道みち、奥おく寺でら先せん輩ぱいと二人ふたりでお茶ちゃしたよ！ おごってあげようしたら、逆ぎゃくにおごられちゃいました。先せん輩ぱいったら、「高こう校こう卒そつ業ぎょうしたらご馳ち走そうしてね」だって！ 「約やく束そくします」とクールに答こたえておきました。君きみたちの仲なかは順じゅん調ちようだよ、私わたしのおかげで



てめえ三みつ葉は、なにしてくれてんだ！ 俺おれの人にん間げん関かん係けい勝かっ手てに変かえるなよ！



ちょっと瀧たきくん、このラブレターなに!? なんで知しらない男だん子しに告こく白はくとかされてんの!? しかも「考かんがえとく」って返へん事じしたですって!?

はは。お前まえって、自じ分ぶんのスペック全ぜん然ぜん活いかせてないよな。俺おれに人じん生せい預あずけたほうがモテるんじゃね？

うぬぼれないでよね、彼女かのじょもおらんくせに！

お前まえだっていねえじゃねえか！

俺
おれ
は、

私
わたし
は、

いんじゃなくて作つくらないの！

いな

*

*

*

三みつ葉はのベルの音おとだ。

てことは、今日きょうも田舎いなか暮ぐらしだ まどろみの中なかで、俺おれはそう思おもった。やつた。放ほう課か後ごにテシガワラと進すすめているカフェ作づくりの続つづきが出で来きる。そうだ、それから

俺おれは布ふ団とんから上じょう半はん身しんを起おこし、体からだを見みおろす。

このところ、三みつ葉はのパジャマはやけに厳げん重じゅうになつた。以い前ぜんはノーブラにだぼつとしたワンピースだったのに、今朝けさはきつめの下した着ぎにボタンでかちっと閉とじられたシャツ姿すがたである。いつ起おきるか分わからない入いれ替かわりに警けい戒かいしているのだ。まあ、気き持もちは分わかる。分わかるけれど。

俺おれは胸むねに手てを伸のばす。今日きょうはこれが俺おれの体からだで、自じ分ぶんの体からだに触さわるくらいなんの問もん題だいもないはずだと、いつものように俺おれは思おもう。いや。しかし、でも……。

俺おれは手てを止とめ、小ちいさく咳つぶやく。

「……あいつに悪わるいか」

がらり、と襖ふすまが開あいた。

「……お姉ねえちゃん、ほんとに自じ分ぶんのおっぱい好すきやな」

それだけ言ひって、ぴしゃりと襖ふすまを閉しめる妹いもうとの姿すがたを、俺おれは胸むねに手てをあてたまま見み送おくった。

……いいよな、服ふくの上うえから、ちょっとくらい。

「お祖母ばあちゃん。なんでうちのご神しん体たいはこんなに遠とおくにあるのぉ？」

四よつ葉はがうんざりしたように声こえを上あげる。俺おれたちの前まえを歩あるく婆ばあちゃんが、背せ中なかで答こたえる。

「繭まゆ五ご郎ろうのせいで、ワシにも分わからん」

マユゴロー？

「……誰だれ？」隣となりを歩あるく四よつ葉はに、俺おれは小こ声ごえで訊きく。

「え、知しらんの？ 有ゆう名めいやよ」

有ゆう名めい？ 田舎いなかの人にん間げん関かん係けいはよく分わからん。

宮みや水みず家けの女あんな三人にん、俺おれと婆ばあちゃんと四よつ葉はは、もう小こ一時じ間かんほども山やま道みちを歩あるき続つづけている。なんでも、今日きょうは山やまの上うえのご神しん体たいへ捧ささげ物ものを持もっていく日ひなのだそうだ。つくづく、こいつらって昔むかし話ばなし的てき世世界かいに生いきているんだなと俺おれは感かん心しんしてしまう。

太たい陽ようを透すかしたカエデの葉は群むれが、染そめたように赤あかい。空くう気きはからりと乾かわいていて、気き持もちのいい風かぜには枯かれ葉はの匂においがたっぷりと含ふくまれている。十月がつ。この町まちは一つの間まにか、もうすっかり秋あきなのだ。

そういうばこの婆ばあちゃん、いくつなんだろうな。

俺おれは目めの前まえの小ちいさな背せ中なかを眺ながめながら考かんがえる。こんな山やま道みちでも和わ服ふく姿すがたで、意い外がいにも健けん脚きゃくで、でも腰こしほども絵えに描かいたように折おれ曲まがっているし杖つえもついている。年とし寄よりと暮くらした経けい験けんのない俺おれには、彼女かのじょの年ねん齢れいもコンディションも見けん当とうがつかない。

「ね、婆ばあちゃん！」

俺おれは駆かけ出だし、婆ばあちゃんの前まえで膝ひざをつき、背せ

中なかを差さし出だした。この小こ柄がらな婆ばあちゃんが三みつ葉はたちを育そだて、いつも美味うまい弁べん当とうを詰つめてくれているのだ。

「おぶらせて。良よかつたら」

おや、ええんかい？ そう言いいながらも嬉うれしそうに、婆ばあちゃんが俺おれの背せ中なかに体たい重じゅうを預あずけてくる。遠とおい昔むかしに誰だれかの家いえでかいだような不ふ思し議ぎな匂においがふんとする。一いつ瞬しゅん、以い前ぜんにもこんな瞬しゅん間かんがあったような、不ふ思し議ぎなあたたかな気き持もちになる。婆ばあちゃんはすごく軽かるい。

「婆ばあちゃん、すげえ軽かる うわっ」

立たち上あがった瞬しゅん間かんに重おもみで俺みつはの膝ひざがかくんと折おれて、ちょっとお姉ねえちゃん！ と文もん句くを言いいつつ四よつ葉はがとっさに支ささえてくれた。そういえば三みつ葉はの体からだも、けっこう薄うすくて細ほそくて軽かるかった。こんなんでききてるって不ふ思し議ぎだな、と俺おれはなんだかじんとする。

「三みつ葉は、四よつ葉は」

背せ中なかで婆ばあちゃんがゆったりとした声こえを出だす。

「ムスピって知しっとる？」

「ムスピ？」

俺おれのリュックを腹はらに抱かかえた四よつ葉はが、隣となりで訊き返かえす。木き々ぎの隙すき間まの眼がん下かには、丸まるい湖みずうみの全ぜん体たいが見みえている。ずいぶん高たかく登のぼってきたのだ。婆ばあちゃんを背せ負おって登のぼり続つづけて、三お葉れの体からだは汗あせだくだ。

「土と地ちの氏うじ神がみさまのことをな、古ふるい言こと葉ばで産靈むすびって呼よぶんやさ。この言こと葉ばには、いくつもの深ふかいふかーい意い味みがある」

神かみさま？ 唐とう突とつになんの話はなしだ？ でも、まんが日に本ぽん昔むかし話ばなしみたいな婆ばあちゃんの声こえには不ふ思

し議ぎな説せつ得とく力りょくがある。知しっとするかい？ とふたたび婆ばあちゃんは言いう。

「糸いとを繋つなげることもムスピ、人ひとを繋つなげることもムスピ、時じ間かんが流ながれることもムスピ、ぜんぶ、同おなじ言こと葉ばを使つかう。それは神かみさまの呼よび名なであり、神かみさまの力ちからや。ワシらの作つくる組くみ紐ひもも、神かみさまの技わざ、時じ間かんの流ながれそのものを顕あらわしとる」

川かわのせせらぎが聞きこえる。どこかに沢さわがあるのかもしれない、と俺おれは思おもう。

「よりあつまって形かたちを作つくり、捻ねじれて絡からまって、時ときには戾もどって、途と切ぎれ、またつなぎり。それが組くみ紐ひも。それが時じ間かん。それが、ムスピ」

透とう明めいな水みずの流ながれを、俺おれは考かんがえるともなく想そう像ぞうする。石いしにぶつかって分わかれ、他ほかと混まじり、また合ごう流れりゅうし、全ぜん体たいとしてはひとつに繋つながったもの。婆ばあちゃんの言こと葉ばの意い味みはさっぱり解わからないけれど、なにかとても大たい切せつなことを、俺おれは知しったような気き持もちになる。ムスピ。目めが覚さめてもこの言こと葉ばは覚おぼえておこう。あごから落おちる汗あせがやけに大おおきな音おとで地じ面めんに落おち、乾かわいた山やまに吸すい込こまれていく。

「ほら、飲のみない」

木こ陰かげで小しょう休きゅう止し。婆ばあちゃんが水すい筒とうを手て渡わたしてくれる。

砂さ糖とうを溶とかしこんだだけの、甘あまい麦むぎ茶ちゃだった。それなのに驚おどろくくらい美味うまくて、俺おれは二杯はい続つづけて飲のんでしまう。なあ私わたしも！ と、四よつ葉はがねだる。今いままで口くちにした飲のみもので、これがいちばん美味うまいかもしれない。

「それも、ムスピ」

「え？」

水すい筒とうを四よつ葉はに手て渡わたしながら、木きの根ね元もと

に座すわり込こんでいる婆ばあちゃんを思おもわず見みる。

「知しっとのか。水みずでも、米こめでも、酒さけでも、なにかを体からだに入いれる行おこないもまた、ムスピと言いう。体からだに入はいったもんは、魂たましいとムスピつくで。だから今日きょうのご奉ほう納のうはな、宮みや水みずの血ち筋すじが何なん百びやく年ねんも続つづけてきた、神かみさまと人にん間げんを繋つなぐための大たい切せつなしきたりなんやよ」

いつの間まにか樹じゅ木もくは途と切ぎれ、眼がん下かでスケッチブックくらいのサイズになった湖みずうみの町まちは半はん分ぶんが雲くもに覆おおわれている。見み上あげた雲くもには厚あつみがなく透とう明めいに輝かがやくようで、強つよい風かぜに溶とけながらみるみる遠とおくまで流ながされていく。周しゅう囲いは苔こけだけの岩いわ場ばだ。山さん頂ちょうまで、ついに来きたのだ。

「なあなあ、見みえたよ！」

はしゃぐ四よつ葉はに追おいついて、彼女かのじょの視し線せんを辿たどる。その先さきに、山やまの頂ちょう上じょうをえぐるようにして、カルデラのようなグラウンド大だいの窪くぼ地ちがある。窪くぼ地ちの内ない部ぶは緑みどりに覆おおわれた湿しつ原げんで、その中ちゅう央おう付ふ近きんには一本ぽんの大おおきな樹きが立たっている。

想そう像ぞうもしていなかった風ふう景けいに、俺おれは目めを見み張はった。

里さとからは決けっして見みえない、これはまるで天てん然ねんの空くう中ちゅう庭てい園えんだ。田舎いなかつていいちいちすげえ。

「ここから先さきは、カクリヨ」

婆ばあちゃんが言いう。俺おれたちは窪くぼ地ちの底そこに降おりていて、目めの前まえには小ちいさな小お川がわが流ながれている。巨きよ木ぼくはその先さきだ。

「かくりよ？」俺おれと四よつ葉はが声こえを合あわせる。

「隠かくり世よ、あの世よのことやわ」

あの世よ。婆ばあちゃんのその昔むかし話ばなしボイスは、まるで冷れい風ふうのように俺おれの背せ中なかを撫なでる。すこしだけ足あしがすくむ。靈れい峰ほうというかパワースポットというかセーブポイントというか、確たしかにこの世よならざる雰ふん囲い気きが、この場ば所しょには漂ただよいまくっているような気きがする。

.....踏ふみ入いれたら帰かえれない、なんてことないだろうな。

「わーい、あの世よやあ～！」

しかし四よつ葉はは歓かん声せいを上あげながら、バシャバシャと小川がわをまたいでいってしまう。ガキはすぐえな、ばかり元げん気きで。まあ天てん気きも良いいし風かぜも小川がわも穏おだやかだし、こんなんビビってちゃ恥はずかしいかもしない。俺おれは婆ばあちゃんが濡ぬれないように手てを取とって、岩いわを足あし場ばに小川がわを渡わたった。

「此し岸がんに戻もどるには」ふいに神しん妙みょうな調ちょう子しで、婆ばあちゃんが口くちを開ひらいた。「あんたたちの一いつ等とう大たい切せつなもんを引ひき換かえにせにやいかんよ」

「ええっ！」俺おれは思おもわず声こえを上あげた。

「ちょ、ちょっと婆ばあちゃん、渡わたり終おえてから言いわないでよ！」

俺おれの抗こう議ぎに、婆ばあちゃんは目めを細ほそめて笑わらう。欠かけた歯はがのぞいて余よ計けいに怖こわいんですけど。

「怖こわがらんでもええ。口くち噛かみ酒ざけのことやさ」

出だしんさい、と婆ばあちゃんにうながされ、俺おれと四よつ葉ははリュックからそれぞれ小こ瓶びんを取とり出だす。よく神かみ棚だんなんかに置おいてある、瓶へい子しだ。白しろいぴかぴかの陶とう器きで、直ちょっ径けい五センチほどの球きゅう形けいに末すえ広ひろがりの台だい座ざがついている。蓋ふたが組くみ紐ひもで封ふう印いんされていて、ちゃぷんと液えき体たいが搖ゆれる音おとがする。

「あのご神しん体たいの下したに」と言ひって、婆ばあちゃんが巨きよ木ぼくを見みる。

「小ちいさなお社やしろがある。そこにお供そなえするんやさ。その酒さけは、あんたたちの半はん分ぶんやからな」

三みつ葉はの、半はん分ぶん。

俺おれは手ての中なかの瓶びんを見みる。あいつが米こめを噛かんで作つくったという口くち噛かみ酒ざけ。この体からだと米こめがムスピついて出で来きた酒さけ。それを俺が奉ほう納のうする。いがみ合あつていた相あい手てからのパスでゴールを決きめてしまったような気き恥はずかしさと妙みょうな誇ほこらしさを感かんじながら、俺おれは大たい樹じゅに向むかって歩あるいていった。

本ほん物もののひぐらしの鳴なき声ごえを、もしかして俺おれは初はじめて聞きいたかもしれない。

なぜこれがひぐらしだと分わかるのかと言ひえれば、夕ゆう方がたの効こう果か音おんとして映えい画がやゲームでお馴な染じみだからだ。力ナカナカナという切せつなげな鳴なき声ごえは、実じっ際さいには周しゅう囲い 1360 度どからまんべんなく響ひびいてきて、映えい画がよりもよほど映えい画がらしい。

バサバサと大おおきな音おとをたて、ふいに目めの前まえの茂しげみからスズメの群むれが飛とび立たつた。鳥とりは木きにいるものと思おもい込こんでいた俺おれはぎょっとするが、四よつ葉はは追おいかけたりくるくると回まわつたりして、楽たのしそうだ。だいぶ山やま里ざとに近ちかづいてきたのか、夕ゆう食しょく時どきの匂においがかすかに風かぜに混まじっている。人にん間げんの生せい活かつの匂においってこんなにくっきりと分わかるものなのかと、俺おれはまたすこし驚おどろく。

「もう、カタワレ時どきやなあ」

一日にちの行ぎょう事じを終おえ、宿しゅく題だいから解かい放ほうされたようなすっきりとした声こえで四よつ葉はが言いう。四よつ葉はも婆ばあちゃんも、スポットライトみたいな夕ゆう陽ひに真ま横よこから照てらされていて、なんだか出で来きすぎた絵かい画がのようだ。

「……わああ！」

眼がん下かに見みえはじめた山やま里ざとの風ふう景けいに、俺おれは思おもわず声こえを漏もらした。湖みずうみを取とり囲かこむ三みつ葉はの町まちの、それは全ぜん景けいだった。町まちはすでに青あおい影かげの中なかにすっぽりと飲のみ込こまれていて、でも湖みずうみだけがぽっかりと空そらの赤あかを映うつしている。あちこちの斜しゃ面めんに、ピンク色いろの夕ゆうもやが湧わき立たちつつある。人じん家からは夕ゆう餉げの煙けむりが何なん本ぼんも狼煙のろしのように、細ほそく高たかくたなびいている。町まちの上じょう空くうを舞まうスズメが、放ほう課か後ごの埃ほこりみたいにランダムにきらきらと輝かがやいている。



「そろそろ彗すい星せい、見みえるかな？」

四よつ葉はが夕ゆう陽ひを手てのひらでさえぎりながら、空そらを探さがしている。

「彗すい星せい？」

そういえば朝ちょう食しょく時どきのテレビで、そんな話わ題だいをやっていたと俺おれは思おもい出だす。数すう日じつ前まえから、肉にく眼がんでも見みえるほどの距きよ離りに彗すい星せいが近ちかづいていること。今日きょうは日にち没ぼつ直ちよく後ごに、金きん星せいの斜ななめ上うえを探さがせばその光ひかりを見みつけられるだろうということ。

「彗すい星せい……」

もう一いち度ど、俺おれは声こえに出だしている。なにかを忘わすれているような気きが、ふいにする。目めを細ほそめ、俺おれも西にしの空そらを探さがす。それはすぐに見みつかる。ひときわ明あかるい金きん星せいの上うえに、青あおく光ひかる彗すい星せいの尾おがある。なにかが記き憶おくの底そこから出でたがっている。

そうだ、以い前ぜんも、俺おれは、

この彗すい星せいを

「おや、三みつ葉は」

気きづくと、婆ばあちゃんが覗のぞき込こむように俺おれを見み上あげている。黒くろく深ふかい目め玉だまの底そこに、俺おれの影かげが映うつっている。

「　あんた今いま、夢ゆめを見みとるな？」

！

唐とう突とつに、

目めを覚さました。

跳はね上あげたシーツが、ベッドの下したに無む音おんで落おちる。心しん臓ぞうが肋ろっ骨こつを持もち上あげるくらい激はげしく動うごいている、はずなのに、自じ分ぶんの心しん音おんが聞きこえない。おかしい　と思おもったとたん、すこしずつ血けつ流りゅうが聞きこえはじめる。窓まどの外そとの朝あさのスズメ、車くるまのエンジン、電でん車しゃの響ひびき。自じ分ぶんがどこにいるのかをようやく思おもい出だしたように、耳みみが東とう京きょうを捉とらえ始はじめる。

「……涙なみだ？」

頬ほおに触ふれた俺おれの指ゆび先さきに、水すい滴てきがのっている。

なぜ？ 理り由ゆうが分わからず、手てのひらで目め元もとをぬぐう。さっきまでの黄昏たそがれの景色けしきも、婆ばあちゃんの言こと葉ばも、そうしているうちに水みずが砂すなに染しみるようにして消きえていく。

ぴろりん。

枕まくら元もとでスマフォが鳴なる。

もうすぐ着つくよー。今日きょうはよろしくね

奥おく寺でら先せん輩ぱいからのＬＩＮＥラインだ。

着つく？ なんのことだ……？ と、俺おれはハッとする。

「まさかまた三みつ葉はが！」

慌あわててスマフォを操そう作さし、三みつ葉はからのメモを見みる。

「デートオ!?」

俺おれはベッドから飛とび起おき、全ぜん速そく力りょくで身み支度じたくをした。

明日あしたは奥おく寺でら先せん輩ぱいと六ろっ本ぽん木ぎデートだよ！ 四よツつ谷や駅えき前まえ待まち合あわせ、十時じ半はん。

私わたしが行いきたいデートだけど、もし不ふ本ほん意いにも瀧たきくんになっちゃったとしたら、

ありがたく楽たのしんでくること。

待まち合あわせ場ば所しょは、さいわいに近きん所じょだった。全ぜん速そく力りょくで走はしってきたおかげで約やく束そくまでまだ十分ぶんほどあると、俺おれは息いきを整ととのえながらスマフォで確たしかめる。先せん輩ぱいはまだ来きていないかもしれない。休きゅう日じつの午ご前ぜん中ちゅうとはいえ、駅えき前まえはそれなりに賑にぎわっている。

俺おれは汗あせをぬぐい、ジャケットの襟えりを整ととのえ、三みつ葉はのアホ、と三回かい咳つぶやいてから念ねんのために先せん輩ぱいの姿すがたを探さがし始はじめた。……あの奥おく寺でら先せん輩ぱいとデート？ しかも俺おれなにげに初はつデートじゃねえか。アイドルみたいな女じょ優ゆうみみたいなミス日にっ本ぽんみたいな奥おく寺でら先せん輩ぱいと初はつデートなんて、ハードルめちゃくちゃ高たかすぎなんですけど。今いまからでも頼たのむから交こう代たいしてくれよ三みつ葉はのアホ！

「たーきくん！」

「うわあっ！」

背はい後ごからの突とつ然ぜんの声こえに、俺おれは情なさけない声こえを上あげてしまう。慌あわてて振ふり向むく。

「ごめん、待まつた？」

「待まってません！ あ、いや、待まちました！ あ、いえ、」

なにこの質しつ問もん!? 待まつたと答こたえれば申もうし訳わけない気き持もちにさせるかもしぬ、待まつていないと言いえば遅ち刻こくと捉とらえられるリスクが発はっ生せいするじゃないですか。あああ

正せい解かいはどっちだ。

「ええと、その……」

俺おれは焦あせりながらも顔かおを上あげる。目めの前まえに、奥おく寺でら先せん輩ぱいが微ほほ笑えんで立たっている。

「……！」

俺おれは目めを大おおきく開ひらく。黒くろのミュール、白しろのフリアミニ、黒くろのオフショルダー。モノトーンの服ふく装そうからは肩かたや脚あしが眩まぶしく露ろ出しゅつしていて、いくつかの金きん色いろのアクセサリーが肌はだの魅み力りょくを注ちゅう意い深ぶかく封ふう印いんするみたいに配はい置ちされている。白しろい小ちいさな帽ぼう子しには、モカ色いろの大おおきなりボンがついている。

ものすごく垢あか抜ぬけていて、ものすごく、綺き麗れいだった。



「.....今いま、來きたとこっす」

「良よかったです！」と、屈くつ託たくなく先せん輩ぱいが笑わらう。

「いこっか」

腕うでを取とられる。……ああ、今いま一いっ瞬しゅん、一いっ瞬しゅんだけだけど、腕うでに胸むねが触ふれたんですけど。今いますぐ街まち中じゅうのガラス窓まどを磨みがいてあげたい気き分ぶんに、俺おれはなる。

「会かい話わが、ぜんっぜん続つづかねえ……」

しかしトイレの中なか、鏡かがみに頭あたまを叩たたきつけたい気き分ぶんで、俺おれは深ふかくふかくうなだれています。

デート開かい始しから三時じ間かん、俺おれはすでに人じん生せいマックスに疲つかれ切きていた。まさか自じ分ぶんにここまで対たい女じょ性せいスキルがないとは思おもいもしなかった。いや、違ちがう。違ちがうと思おもいたい。なんの準備じゅん備びもなしに俺おれをこの状じょう況きょうに放ほうり込こんだ三みつ葉はが悪わるい。そしてなによりも、先せん輩ぱいが綺き麗れいすぎるからいけないのだ。

なんせ、すれ違ちがう人ひと全ぜん員いんが、口くちをぽかんと開あけて先せん輩ぱいを見みるのだ。それから横よこを歩あるく俺おれをじろりと見みて、どうしてこんなガキがという顔かおになる。すくなくとも俺おれにはそう見みえる。そりやそうだ。俺おれだって分ぶん不ふ相そう応おうだと知しっている。ていうか俺おれが誘さそったんじゃないんすよ！ 片かたっ端ぱしから肩かたを掴つかんで言いい訳わけしてまわりたくなる。だから俺おれは、なにを喋しゃべれば良いいのかさっぱり分わからなくなってしまう。空くう気きを読よんで先せん輩ぱいから話はなしかけてくれるけれど、俺おれはそれがいたたまれなくて、ますます上手うまく言こと葉ばを継つげなくなる。悪あく循じゅん環かんだ。

ちくしょお三みつ葉は、お前まえ先せん輩ぱいと普ふ段だんどんな会かい話わしてんだよ!?

救すくいを求もとめるように、俺おれはスマフォを開ひらいて三みつ葉はからのメモを見みる。

……とはいって、どうせ君きみはデートなんかしたことないでしょう。

だから以い下か、瀧たきくんのために厳げん選せんリンク集しゅうをそろえてあげました！

「うお、マジか！」

なんだよこいつ神かみじゃねえか！ 僕おれはすがるようにリンクを開ひらく。

Linkリンク1：コミュ障しようのワイが恋こい人びとGETゲットした件けん

Linkリンク2：人じん生せいで1ミリもモテたことがない、そんな君きみのための会かい話わ術じゅつ！

Linkリンク3：もうウザイと思おもわれない！ 愛あいされメール特とく集しゅう

……なんか俺おれ、あいつにすげえ舐なめられてる気きがするんですけど……。

美び術じゅつ館かんを、僕おれはようやくすこしホッとした気き分ぶんで歩あるいている。

「郷きょう愁しゅう」と名な付づけられた写しゃ真しん展てんにはとりたてて興きょう味みもないけれど、喋しゃべらなくても不ふ自し然ぜんじじゃないという空くう間かんがありがたいのだ。奥おく寺でら先せん輩ぱいは僕おれの二メートル先さきを、写しゃ真しんを眺ながめながら余よ裕ゆうの表ひょう情じょうでゆっくりと歩あるいている。

富ふ良ら野の、津つ軽がる、三さん陸りく、陸りく前ぜん、会あい津づ、信しん州しゅう……地ち域いきごとに展てん示じエリアが分わかれていて、しかしそのどれもが似にたような田舎いなかの風ふう景けいに、俺おれには見みえる。正ただしい写しや真しんの見み方かたなんて俺おれには分わからないけれど 背はい景けいが山やまなのか海うみなのか夏なつなのか冬ふゆなのか、違ちがいはせいぜいその程てい度どだ。家いえも駅えきも道みちも人ひとも妙みょうに似にていて、そもそも日に本ほんの田舎いなかってどこにいってもこんな景色けしきなんだろうなと俺おれは思おもう。これならば、たとえば「渋しぶ谷やと池いけ袋ぶくろ」とか「赤あか坂さかと吉きち祥じょう寺じ」とか「目め黒ぐろと立たち川かわ」とか、東とう京きょうの中なかの方ほうがずっと街まちに個こ性せいがある。

飛び驛だ、と書かかれたエリアで、しかし足あしがひとりでに止とまった。

ここは、他ほかと違ちがう。

いや、やはり似にたような写しや真しんばかりなのだけれど、俺おれはここを知しっている。山やまの形かたち、道みちのカーブ、湖みずうみのスケール、鳥とり居いの佇たたずまい、畠はたけの配はい置ち。散ちらばった体たい育いく館かんシューズの中なかでもなぜか自じ分ぶんの靴くつだけはすっと見みつけられるみたいに、俺おれには自し然ぜんに分わかる。ガキの頃ころ、夏なつ休やすみに毎まい年とし遊あそびに行いっていた親しん戚せきの田舎いなかのような 実じっ際さいにはそんな絏けい験けんはないはずなのに、奇き妙みょうで強きょう烈れつな既き視し感かんが、この場ば所しょにはある。ここは

「瀧たきくん？」

声こえに目めを向むけると、先せん輩ぱいが俺おれの隣となりにいた。存そん在ざいを、一いつ瞬しゅん忘わすれていた。

瀧たきくんってさ、と、整ととのった微び笑しようで先せん輩ぱいが言いう。

「今日きょうは、なんだか別べつ人じんみたいね」

くるりと、まるでモデルのように美うつくしくターンして、先せん輩ぱいは俺おれを置おいて歩あるき出だす。

失しつ敗ぱいした。

今日きょう一いち日にち、俺おれは気きの進すすまない課か題だいを嫌いやきいやこなすようにして、三みつ葉はの立たてたデートコースをただ辿たどっただけだった。言いい訳わけばかりを考かんがえ続づけて、一いっ緒しょにいる先せん輩ぱいの気き持もちを想そう像ぞうもしなかった。俺みつはが先せん輩ぱいを誘さそったはずなのに。俺おれだって本ほん当とうは、先せん輩ぱいと過すごせて嬉うれしいはずなのに。こんな奇き跡せきみたいな日ひがいつか来くることを、ずっと願ねがっていたはずなのに。

歩ほ道どう橋きょうからは、さっきまでいた六ろっ本ぽん木ぎのビル群ぐんがまっすぐに見みえた。無む数すうの窓まどが夕ゆう日ひを反はん射しゃして金きん色いろに輝かがやいている。無む言ごんで歩あるく先せん輩ぱいの背せ中なかに、俺おれは目めを戻もどす。

ぴかぴかの髪かみも、おろしたてみたいに見みえる帽ぼう子しも服ふくも、すくなくとも今日きょうだけは、俺おれに見みせるためのものだったのかもしれない。そう考かんがえると胸むねが詰つまった。急きゅうに酸さん素そが薄うすくなったみたいに、息いきが苦くるしくなる。海かい面めんに必ひつ死しに手てを伸のばすみたいにして、俺おれはなんとか言こと葉ばを探さがす。

「あの、先せん輩ぱい」

奥おく寺でら先せん輩ぱいは振ふり向むかない。

「……ええと、腹はらへりませんか？　どこかで晩ばん飯めしとか
」

「今日きょうは解かい散さんにしようか」

優やさしげな教きょう師しみたいな口く調ちょうでそう言いわれ、
「はい」

とっさに間ま抜ぬけな言こと葉ばを発はっしてしまった。やっと振ふり向むいた先せん輩ぱいの表ひょう情じょうは、夕ゆう陽ひに紛まぎれてよく見みえない。

「瀧たきくんって……違ちがってたらごめんね？」

「はい」

「君きみは昔むかし、私わたしのことがちょっと好すきだったでしょう」

「えええ！」バレてた!? なんで!?

「そして今いまは、他ほかに好すきな子こがいるでしょう？」

「えええええ！」

熱ねつ帯たい雨う林りんにワープさせられたみたいに、どっと汗あせが噴ふき出でてくる。

「い、いませんよ！」

「ほんと？」

「い、いないっす！ ゼンゼン違ちがいますっ！」

「ほんとかなあ？」

先せん輩ぱいが疑うたがい深ぶかげに俺おれの顔かおを覗のぞき込む。他ほかに好すきな子こ？ そんなのいないだろ、いないはずだ。一いつ瞬しゅんだけあいつの長ながい髪かみと胸むねの柔やわらかさが頭あたまをよぎったけれど、すぐに消えた。

「ま、いいや」

さっぱりと明あかるい口く調ちょうでそう言ひって、先せん輩ぱいの顔かおが遠とおざかる。

「え？」

「今日きょうはありがと。またバイトでね」

ひらりと手てを振ふって、それから先せん輩ぱいはあっさりと、俺おれを置おいて歩あるき出だす。俺おれはとっさに口くちを開ひらく。閉とじる。もう一いち度ど開ひらく。それでも言こと葉ばは出でてこなくて、そうしているうちに先せん輩ぱいの背せ中なかは歩ほ道どう橋きよ

うを降おり、駅えき前まえの人ひと波なみに消きえていった。

夏なつの端はじっこに一人ひとり取とり残のこされたような気き分ぶんで、俺おれは夕ゆう陽ひを眺ながめている。歩ほ道どう橋きょうの下したは車くるまがまったく途と切ぎれなくて、ずっと聞きいていると、なんだか川かわにかかった本ほん物ものの橋はしにいるような気きがしてくる。雑ざっ居きょビルの給きゅう水すい塔とうに、懐かい中ちゅう電でん灯とうのような弱よわ々よわしい夕ゆう陽ひが隠かくれていく。なにかを取とり戻もどすみたいな熱ねつ心しんさで、俺おれはその一いち部ぶ始し終じゅうをじっと見みつめる。

すべきことはもっと他ほかにあるような気きもするけれど、具ぐ体たい的てきにはなにも思おもいつかないのだ。ただ三みつ葉はの町まちに、早はやくまた行いきたかった。三みつ葉はになることは、三みつ葉はと話はなすことでもあった。俺おれたちは入いれ替かわりながら、同どう時じに特とく別べつにつながっていたのだ。体たい験けんを交こう換かんしていたのだ。ムスピついていたのだ。三みつ葉はにならば、今日きょうの出で来き事ごとだって話はなせると俺おれは思おもう。だから君きみはモテないのよとか、そもそもお前まえが勝かつ手てな約やく束そくをするから悪わるいんだとか、軽かる口くちを叩たたき合あいたかった。

スマフォのメモを開ひらく。三みつ葉はからのメモの続つづきがある。

デートが終おわるころには、ちょうど空そらには彗すい星せいが見みえるね。

きゃ～もうロマンチック、明日あしたが楽たのしみ

私わたしになっても瀧たきくんになっても、デートがんばろうね！

彗すい星せい？

空そらを見み上あげてみる。夕ゆう焼やけの名残なごりはすでにな

く、一等とう星せいがいくつかと、ジェット機きがかすかな音おとを立てて飛とんでいるだけだ。あたりまえだけれど、彗すい星せいなんてどこにもない。

「なに言ひってんだ、こいつ？」

俺おれは小ちいさく口くちに出だした。そもそも目めで見みえるような彗すい星せいが来きてているならば、結けつ構こうなニュースになっているはずだ。三みつ葉はのなにかの勘かん違ちがいかもしれない。

ふと、胸むねの裏うら側がわがざわりとうずく。

なにかが、頭あたまから出でたがっている。

スマフォを操そう作さし、三みつ葉はの携けい帯たい番ばん号ごうを表ひょう示じする。十一桁けたのその番ばん号ごうを、じっと見みる。入いれ替かわりが起おきはじめた頃ころ、何なん度どかけてもなぜか繋つながらなかつた番ばん号ごう。その番ばん号ごうに、指ゆびで触ふれる。発はつ信しん音おんが鳴なる。そして、スマフォから声こえが聞きこえる。

お客様やくさまのおかけになつた電でん話わ番ばん号ごうは、現げん在ざい使つかわれていないか、電でん源げんが入はつていなかつたため……。

スマフォを耳みみから離はなし、終しゅう了りょうアイコンを俺おれは押おす。

やはり電でん話わは通つうじないので。まあいい。散さん々ざんだつた今日きょうの結けつ果かは、次つぎに入いれ替かわつた時ときには伝つたえればいい。彗すい星せいのことも訊きいてみよう。明日あしたか明後日あさつてにはどうせまた入いれ替かわるのだ。俺おれはそう考かんがえながら、ようやく歩ほ道どう橋きょうを降おりた。頭ず上じょうにはのっペリと薄うすい半はん月げつが、誰だれかの忘わすれ物もののようにぽつんと置おかれていた。

でもこの日ひ以い降こうもう二に度どと、俺おれと三みつ葉はとの入
いれ替かわりは起おきなかった。

第四章

探訪

鉛えん筆ぴつを、ひたすらに動うごかす。

炭たん素そ粒りゅう子しが、紙かみの織せん維いに吸きゅう着ちゃくしていく。描びょう線せんが重かさなり、白しろかったスケッチブックが次し第だいに黒くろくなっていく。それなのに、記き憶おくの中なかの風ふう景けいは未いまだ捉とらえきれない。

通つう勤きんラッシュの中なか、毎まい朝あさ電でん車しゃに乗のって学がっ校こうに行いく。退たい屈くつな授じゅ業ぎょうを聞きく。司つかさたちと弁べん当とうを食たべる。街まちを歩あるき、空そらを見み上あげる。いつの間まにか、空そらの青あおがすこし濃こくなっている。街がい路ろ樹じゅがすこしづつ色いろづきはじめている。

夜よるの部へ屋やで、俺おれは絵えを描かく。机つくえには図と書しょ館かんから借りてきた山さん岳がく図ず鑑かんが積つまれている。スマフォで飛ひ驒だの山やま並なみを検けん索さくする。記き憶おくの中なかの風ふう景けいとマッチする稜りょう線せんを探さがす。それを、なんとかして紙かみに写うつし取とろうと鉛えん筆ぴつを動うごかし続つづける。

アスファルトの匂においの雨あめが降ふる日ひ。羊ひつじ雲ぐもが輝かがやく快かい晴せいの日ひ。黄こう砂さ混まじりの強つよい風かぜが吹ふく日ひ。毎まい朝あさ、混こんだ電でん車しゃに乗のって学がっ校こうに行いく。バイトにも通かよう。奥おく寺でら先せん輩ぱいと同おなじシフトの日ひもある。俺おれはなるべく彼女かのじょをまっすぐに見みて、きちんと笑え顔がおを作つくり、普ふ通つうに話はなす。誰だれに対たいしてもフェアでありたいと、強つよく思おもう。

まだ真ま夏なつのように蒸むす夜よるもあれば、もう肌はだ寒ざむくてジャージを羽は織ある夜よるもある。どういう夜よるでも、絵えを描かいていると頭あたまが毛もう布ふでも巻まかれているみたいに熱あつくなってくる。汗あせが大おおきな音おとを立たててスケッチブックに落おちる。描びょう線せんを滲にじませる。三みつ葉はとして見みてき

たあの町まちの風ふう景けいが、それでもすこしずつ、像ぞうを結むすびはじめる。

学がっ校こう帰がえり、バイト帰がえりに、俺おれは電でん車しゃに乗のらずに長ながい距きよ離りを歩あるく。東とう京きょうの風ふう景けいは日ひに日ひに変かわっていく。新しん宿じゅくにも外がい苑えんにも四よつ谷やにも、弁べん慶けい橋ばしのたもとにも安あん鎮ちん坂ざかの途と中ちゅうにも、気きづけば巨きよ大だいなクレーンが並ならび、鉄てつ骨こつとガラスがすこしずつ空そらに伸のびていく。その先さきには、半はん分ぶんに欠かけたのっぺりした月つきがある。

そしてようやく、俺おれは湖みずうみの町まちの風ふう景けい画がを何なん枚まいか仕し上あげる。

この週しゅう末まつ、出でかけよう。

そう決きめて、俺おれは久ひさしぶりにこわばっていた体からだから力ちからが抜ぬけていくのを感じかんじる。立たち上あがるのもおっくうで、そのまま机つくえにうつぶせる。

眠ねむりに落おちる直ちよく前ぜん、今日きょうも強つよくつよく願ねがった。

それなのにまた、三みつ葉はにはなれなかつた。

* * *

とりあえず三みつ日か分ぶんの下した着ぎとスケッチブックを、リュックに詰つめた。向むこうはすこし寒さむいかもしないと、大おおきなフードのついた厚あつ手でのジャンパーを羽は織おる。いつものようにお守まもりのミサンガを手て首くびに巻まき、家いえを出でた。

普ふ段だんの通つう学がくよりも早はやい時じ間かんとあって、電でん車しゃは空すいていた。だが、東とう京きょう駅えきの構こう内ない

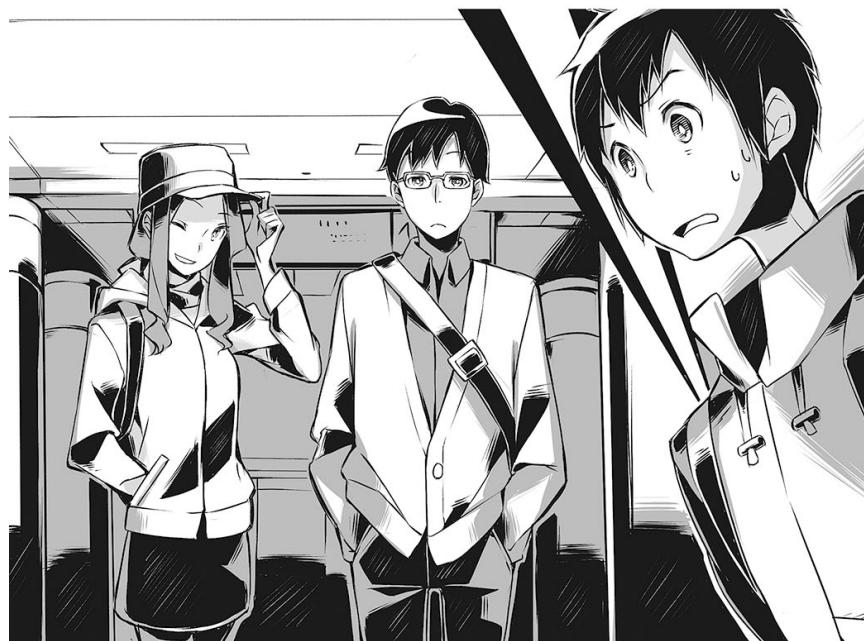
はやはり人ひとで溢あふれている。キャリーバッグを引ひいた外がい国こく人じんの後あとに並ならび、自じ動どう券けん売ばい機きでとりあえず名な古ご屋やまでの新しん幹かん線せんの切きつ符ふを買かい、東とう海かい道どう新しん幹かん線せんの改かい札さつに向むかう。

と、俺おれは思おもわず自じ分ぶんの目めを疑うたがった。

「な……なんでこんなところにいるんすか!?」

目めの前まえの柱はしらに、奥おく寺でら先せん輩ぱいと司つかさが並ならんで立たっている。先せん輩ぱいがにっと笑わらって言いう。

「えへへ。来きちゃった！」



.....来きちゃったってちょっと、あんた萌もえアニメのヒロインか！

俺おれは司つかさを睨にらみつける。なにか問もん題だいでも？　というような涼すずしい顔かおで、奴やつは俺おれを見み返かえす。

「司つかさてめえ、俺おれが頼たのんだのは親おやへのアリバイとバイトのシフトだろ!?」

声こえをひそめて、俺おれは隣となりの座ざ席せきの司つかさに訴うったえる。新しん幹かん線せんの自じ由ゆう席せきは、ほとんどがスーツ姿すがたのサラリーマンで埋うまっている。

「バイトは高たか木ぎに頼たのんだ」

さらりと答こたえ、司つかさはスマフォを俺おれの前まえにかかげる。まーかせとけ！　と爽さわやかに言いいながら、高たか木ぎが親おや指ゆびを立たてている。

「でも、メシおごれよ」とムービーの高たか木ぎが言いう。

「どいつもこいつも……」

俺おれは苦にが々にがしく咳つぶやく。司つかさに頼たのんだのが失しつ敗ぱいだった。俺おれは今日きょうだけ学がっ校こうをサボリ、金きん土ど日にちの三みっ日か間かん、飛ひ驒だに行いくつもりだった。どうしても知しり合あいに会あわなければいけない用よう事じが出で來きたから、なにも聞きかずに留る守す中ちゅうの言いい訳わけに使つかわせてくれ。そう言いつって俺おれは昨日きのう、司つかさに頭あたまを下さげたのだ。

「お前まえが心しん配ぱいで來きたんだよ」1ミリも悪わるびれた様よう子すもなく司つかさが言いう。

「放ほうっておけないだろ？　美つつ人局もたせとか出でてきたらどうすんだ？」

「ツツモタセ？」

なに言いつってんだ、こいつ？　眉まゆを寄よせた俺おれを、司つかさの奥おくに座すわっている奥おく寺でら先せん輩ぱいが覗のぞき込む。

「瀧たきくん、メル友ともに会あいに行いくんだって？」

「はあ？ いやメル友ともっていうか、それは方ほう便べんで……」昨さく夜や、誰だれに会あいに行いくんだとしつこく食くい下さがる司つかさに、SNSで知しりあった人ひとだと曖あい昧まいに答こたえたのだ。司つかさが先せん輩ぱいに深しん刻こくな口く調ちょうで言いう。

「ぶっちゃけ、出で会あい系けいかと」

俺おれはお茶ぢゃを吹ふき出だしそうになる。

「ちげえよ！」

「お前まえ、最さい近きんやけに危あぶなっかしいからな」と、ポッキーの箱はこをこちらに差さし出だしながら司つかさが心しん配ぱいそうな顔かおをする。

「離はなれて見みててやるから」

「俺おれは小しょう学がく生せいか！」

くってかかる俺おれを、奥おく寺でら先せん輩ぱいが「ははーん」という表ひょう情じょうで見みている。このヒトも絶ぜつ対たいに誤ご解かいしている。先さきが思おもいやられると、俺おれは暗くらい気き持ちで思おもう。まもなくー、なごやー。と、車しゃ内ない放ほう送そうがのんびりと言いう。

三みつ葉はとの入いれ替かわりは、ある日ひ突とつ然ぜんに起おき、突とつ然ぜんに終おわった。理り由ゆうはいくら考かんがえても分わからなかつた。そうやって何なん週しゅう間かんか経たつうちに、あれは単たんにリアルな夢ゆめに過すぎなかつたのではないかとの疑ぎ念ねんが、次し第だいに膨ふくらんできた。

だが、証しよう拠こはあるのだ。スマフォに残のこされた三みつ葉はの日につ記きは、到とう底てい俺おれ自じ身しんの中なかから出でてきた言こと葉ばとは思おもえなかつた。奥おく寺でら先せん輩ぱいとのデートだつて、俺おれが俺おれ自じ身しんだったならば起おき得えたはずはないのだ。三みつ葉はは、確たしかに実じつ在ざいする少しょう女じょなのだ。あいつの体たい温おんも鼓こ動どうも、息いきづかいも声

こえも、まぶたを透すかす鮮あざやかな赤あかも鼓こ膜まくに届とどく瑞みず々みずしい波は長ちょうも、俺おれは確たしかに感かんじていたのだ。あれで生いきていないのでしたら、なにも生いきていない。そう思おもえるくらいに、あれは命いのちだった。三みつ葉はは現げん実じつだった。

だから、その体たい験けんが唐とう突とつに途と切ぎれてしまったことが、俺おれは妙みょうに不ふ安あんだった。三みつ葉はになにかあつたのかもしれない。熱ねつを出だしたとか、ひょっとしたらなにかの事じ故ことか。それは考かんがえすぎだとしても、すくなくとも三みつ葉はもこの事じ態たいを不ふ安あんに思おもっていることは間ま違ちがいない。だから俺おれは、直ちよく接せつあいつに会あいに行くことにしたのだ。したのだが

「はあ？　詳くわしい場ば所しょは分わからない？」

特とっ急きゅう『ひだ』の四人にんがけボックス席せきで駅えき弁べんを頬ほお張ぱりながら、奥おく寺でら先せん輩ぱいが呆あきれたよう

に言いう。

「はあ……」

「手て掛がかりは町まちの風ふう景けいだけ？　その子ことの連れん絡らくも取とれない？　なんなのよソレ!？」

勝かっ手てについてきたくせに、なぜ俺おれが責せめられるのだ。お前まえなんとか言いえよ、という気き持もちで俺おれは司つかさを見みる。味噌みそカツを飲のみ込こみ、司つかさが言いう。

「まったく、呆あきれた幹かん事じだな」

「幹かん事じじゃねえ！」

思おもわず怒ど鳴なってしまう。こいつら完かん璧ぺきに遠えん足そく気き分ぶんじゅねえか。そんな俺おれを、先せん輩ぱいと司つかさはそろって「仕し方かたがない子こね」という顔かおで見みている。ついで上うえから目め線せんなんですか。

まあいいわ、と先せん輩ぱいが言いう。ふいに笑え顔がおになって、胸むねを張はる。

「安あん心しんしなさい瀧たきくん。私わたしたちが一いっ緒しょに探さがしてあげるわよ」

「きゃ～可愛かわいい～！　ねえ瀧たきくん、見みてみて～！」

昼ひるも過すぎてからようやく降おり立たったローカル線せんの駅えきで、地じ元もとのゆるキャラを前まえに先せん輩ぱいが黄き色いろい声こえをあげている。駅えき員いんの帽ぼう子しをかぶった飛び驛だ牛ぎゅうの着きぐるみで、小ちいさな駅えき舎しゃには司つかさのスマフォのシャッター音おんが響ひびきまくっている。

「邪じや魔まだなあ……」

俺おれは駅えき舎しゃに掲けい示じされた町まちマップを睨にらみつつ、こいつらは絶ぜつ対たいに役やくに立たたない、と確かく信しんを深ふかめた。一人ひとりでなんとか探さがし当てるのだ。

プランは、こうだ。

三みつ葉はの町まちの具ぐ体たい的てきな場ば所しょが分わかっていないわけではないから、記き憶おくにある風ふう景けいから「だいたいこのあたりなら遠とおくはないだろう」という場ば所しょまで電でん車しゃで行いく。そこからは、俺おれの描かいた風ふう景けいスケッチだけが手て掛がかりとなる。スケッチを地じ元もとの人ひとに見みてもらひ、見み覚おぼえがないか聞きいて回まわりつつ、ローカル線せんに沿そってすこしづつ北ほく上じょうしていくのだ。記き憶おくの中なかの風ふう景けいには踏ふみ切きりもあったから、鉄てつ道どう沿ぞいに探さがしていくのは有ゆう効こうなはずだ。計けい画かくとも言いえないような漠ばく然ぜんとしたやり方かただけれど、他ほかに方ほう法ほうも見みつからなかった。それに湖みずうみのほとりの町まちというのはそこまでありふれてはいないはずだ。夜よるまでにはなにかヒントくらいは掴つかめるのではないかと、根こん拠きよはないけれど自じ信しんはあった。俺おれは気き合あいを入いれて、まずは駅えき前まえに一台だいだけ停とまっているタクシーの運うん転てん手しゅさんに声こえをかけるべく、大おおきく一いっ歩ぽを踏ふみだした。

「……やっぱり無む理りか……」

バス停ていにぐったりと座すわり込こみ、俺おれは深ふかくうなだれている。

聞きき込こみを始はじめた時ときにはぱんぱんにみなぎっていたあの自じ信しんは、もうすっかりしぶんでいる。

最さい初しょのタクシーにすげなく「うーん、知しらん」と言いわれて以い降こう、交こう番ばん、コンビニ、土産みやげ物もの屋や、民みん宿しゅく、定てい食しょく屋や、農のう家かから小しょう学がく生せいにいたるまで、なりふり構かまわず声こえをかけたがことごとく成せい果かはなかった。ローカル列れっ車しゃも日にっ中ちゅうは二時じ間かんに一本ぽんというすくなさで移い動どうもままならず、ならばバスで聞きき込こみをと勇いさんで乗のり込こんだものの乗じょう客きゃくは俺おれたちだけで、もはや運うん転てん手しゅさんに訊きいてみる気きにもなれず、終しゅう点てんのバス停ていは見み渡わたす限かぎり人じん家かのない僻へき地ちだった。この間かんずっと、司つかさと奥おく寺でら先せん輩ぱいはしりとりとかトランプとかソシャゲとかグミチョコジャンケンとかおやつタイムとか、ひたすら楽たのしそうに遠えん足そくを満まん喫きつしており、しまいにはバスの中なかでは俺おれの両りょう肩かたに寄よりかかり気き持もちよさそうに寝ね息いきを立たてていた。

俺おれの溜ため息いきを耳みみにして、バス停ていの前まえでコーラなどをごくごく飲のんでいた先せん輩ぱいと司つかさが声こえをそろえた。

「ええ、もうあきらめるのかよ瀧たき!?」

「私わたしたちの努ど力りょくはどうなるのよ！」

どっはあるあー、と、俺おれは肺はいごとこぼれ落おちてしまいそうな深ふかい息いきをはく。先せん輩ぱいの妙みょうに気き合あいの入はいった本ほん格かくトレッキングファッショント、対たい照しよう的てきに近きん所じょに散さん歩ぽに来きただけのような司つかさのごく普ふ通つうのチノパン姿すがたが、今いまとなっては非ひ常じょうにムカつく。

「あんたたち、1ミリも役やくに立たってないじゃん……」

アラそうかしら？ というような無む垢くな表ひょう情じょうを二人ふたりはする。

私わたし、高たか山やまラーメンひとつと、

俺おれ、高たか山やまラーメンひとつ、

あ、じゃあ、俺おれも高たか山やまラーメンひとつ。

「はいよ。ラーメン三丁ちょう！」

おばちゃんの元げん気きな声こえが店みせに響ひびく。

異い様ように遠とおい隣となり駅えきまでの不ふ毛もうな道みちのりの途と中ちゅう、奇き跡せきのように営えい業ぎょうしているラーメン屋やを見みつけ、俺おれたちはとにもかくにも駆かけ込こんだ。いらっしゃいませ、という三さん角かく巾きんをかぶったおばちゃんの笑え顔がおが、遭そう難なん中ちゅうにようやく出で会あえた救きゅう援えん隊たいみたいに輝かがやいて見みえた。

ラーメンも美味うまかった。名な前まえに反はんしてごく普ふ通つうのラーメンだったけれど（飛び驛だ牛ぎゅう肉にくでも載のっているのかと思おもったらチャーシューだった）、麵めんも野や菜さいも食たべた端はしから体からだが充じゅう電でんされていくようで、俺おれはスープも最さい後ごまで飲のみ干ほしコップの水みずを二杯はい飲のんで、ようやく息いきをついた。

「今日きょう中じゅうに東とう京きょうに戻もどれるかな？」と俺おれは司つかさに訊きいてみる。

「ああ……どうかな、ぎりぎりかもな。調しらべてみるか」

意い外がいだなという顔かおを司つかさはしたが、それでもスマフォを取とり出だして帰き路ろの方ほう法ほうを調しらべ始はじめてくれる。サンキュ、と俺おれは言いう。

「……瀧たきくん、本ほん当とうにそれでいいの？」

まだ食たべ終おえていない先せん輩ぱいが、テーブルの向むかいから俺おれに問とう。どう答こたえるべきかとっさには分わからなくて、俺おれは窓まどの外そとを見みる。太たい陽ようはまだぎりぎり山やまの端はにひっかかるていて、県けん道どう沿ぞいの畠はたけをのどかに照

てらしている。

「……なんて言いうか、ぜんぜん見けん当とう違ちがいのことをしてるような気きがしてきて」

半なかば自じ分ぶん自じ身しんに向むけて、俺おれは呴つぶやく。東とう京きょうに戻もどって、もう一いち度ど作さく戦せんを立たて直なおした方ほうが良よいのかもしれない。写しゃ真しんならともかく、こんなスケッチから町まちを探さがし出だすなんてやはり無む理りがあつたのかもしれない。スケッチブックを手てにとて眺ながめながら、俺おれはそんなふうに思おもい始はじめる。丸まるい湖みずうみを中ちゅう心しんにして、ありふれた民みん家かが点てん在ざいするごく普ふ通つうの田舎いなか町まち。描かき終おえた時ときはあれほど手て応ごたえがあったのに、今いまは単たんなる匿とく名めい的てきで凡ぼん庸よくな風ふう景けいに見みえてくる。

「それ、昔むかしのイトモリやろ？」

え？ と振ふり返かえると、おばちゃんのエプロンが視し界かいに入はいった。空からになったコップに水みずを注ついでくれている。

「お兄にいちゃんが描かいたの？ な、ちょっと見みせてくれる？」

そう言ひて、おばちゃんは俺おれからスケッチブックを受うけ取とる。

「よく描かけとるわあ。なあ、ちょっと、あんた！」

厨ちゅう房ぼうに向むかい声こえを張はり上あげるおばちゃんを、俺おれたち三人にんは口くちを開あけて眺ながめている。

「ああ、ほんとに、以い前ぜんのイトモリやな。懐なつかしいな」

「うちの人ひと、イトモリ出しゅっ身しんなんやわ」

厨ちゅう房ぼうから出でてきたラーメン屋やのオヤジが、目めを細ほそめてスケッチに見み入いっている。

イトモリ……？

突とつ然ぜんに、俺おれは思おもい出だす。椅い子すから立たち上がる。

「イトモリ……、糸いと守もり町まち！ そうだ、なんで思おもい出だせなかつたんだろう、糸いと守もり町まちです！ そこ、この近ちかくですよね!?」

夫ふう婦ふが不ふ思し議ぎそな顔かおをする。怪け訝げんそうに、顔かおを見み合あわせる。オヤジが口くちを開ひらく。

「あんた……知しっとるやろ、糸いと守もり町まちってのは……」

司つかさがふいに声こえを上あげる。

「糸いと守もりって……瀧たき、お前まえまさか」

「え、それって、あの彗すい星せいの!?」

奥おく寺でら先せん輩ぱいまでがそう言ひて俺おれを見る。

「え……？」

わけがわからず、俺おれは皆みなを見み回まわす。全ぜん員いんが、不ふ審しんげな色いろで俺おれを見みている。頭あたまの中なかからずっと出でたがっていたなにかの影かげが、ざわざわと、不ふ吉きつな気け配はいを増ましていく。

ぞっとするくらい寂さみしげに、トンビの鳴なき声ごえが大たい気きにたなびく。

進しん入にゅう禁きん止しのバリケードがどこまでも並ならび、割われたアスファルトに長ながい影かげを落おとしている。

災さい害がい対たい策さく基き本ほん法ほうによりここから立たち入りり禁きん止し。KEEPキープ OUTアウト。復ふつ興こう庁ちよう。そんな字じ面づらが、薦つたの絡からまったく看かん板ばんに並ならんでいる。

そして俺おれの眼がん下かには、巨きよ大だいな力ちからでずたずたに引ひき裂さかれ、ほとんどが湖みずうみに飲のみ込こまれた糸いと守もり町まちの姿すがたがある。

「……ねえ、本ほん当とうにこの場ば所しょなの？」

後うしろから歩あるいてきた先せん輩ぱいが、震ふるえるような声こえで俺おれに訊きく。俺おれの返へん事じを待またず、司つかさのやけに明あかるい声こえが答こたえる。

「まさか！ だからさっきから言いつてるように、瀧たきの勘かん違ちがいですよ」

「……間ま違ちがいない」

俺おれは眼がん下かの廢はい墟きょから目めをはがし、自じ分ぶんの周しゅう囲いをぐるりと見み回まわしながら言いう。

「町まちだけじゃない。この校こう庭てい、周まわりの山やま、この高こう校こうだって、はっきりと覚おぼえてる！」

自じ身しんに言いい聞きかせるために、俺おれは大おお声ごえで叫さけばなければならない。俺おれたちの背はい後ごには、薄うす黒ぐろく煤すすけ、ところどころ窓まどガラスの割われた校こう舎しゃが建たっている。湖みずうみを一いち望ぼうできる糸いと守もり高こう校こうの校こう庭ていに、俺おれたちはいる。

「じゃあ、ここがお前まえが探さがしていた町まちだってことか？ お前まえのメル友ともが住すんでる町まちだって？」

乾かわいた笑わらいを声こえに貼はりつかせたまま、司つかさが大お声ごえを出だす。

「そんなわけねえだろ！ 三年ねん前まえに何なん百びゃく人にんも死しじだの災さい害がい、瀧たきだって覚おぼえてるだろ!?」

俺おれはその言こと葉ばに、ようやく司つかさの顔かおを見みる。

「……死しんだ？」

顔かおを見みたはずが、俺おれの視し線せんは司つかさをすり抜ぬけ、その後うしろの高こう校こうをすり抜ぬけ、どこかに吸すい込こまれてしまう。俺おれの目めはなにかを見みているはずなのに、なにも見みていない。

「……三年ねん前まえに 死しんだ？」

ふと、俺おれは思おもい出だす。

三年ねん前まえ、東とう京きょうの空そらに見みた彗すい星せい。西にしの空そらに落おちていく無む数すうの流れゆう星せい。夢ゆめの景色けしきのように美うつくしいと思おもった、あの時ときの昂たかぶり。

あの時ときに、死しんだ？

だめだ。

認みとめてはだめだ。

俺おれは言こと葉ばを探さがす。証しょう拠こを探さがす。

「まさか……だってほら、あいつの書かいた日につ記きだってちゃんと」

俺おれはポケットからスマフォを取とり出だす。もたもたするとバッテリーが永えい遠えんに切れてしまう、そんな意い味みのない妄もう想そうに駆かられながら焦あせって操そう作さして、三みつ葉はの日につ記きを呼よび出だす。日につ記きはちゃんとそこにある。

「……！」

俺おれは目めを強つよくこする。日につ記きの文も字じがぞわりと動うごいたような気きが、一いっ瞬しゅんしたのだ。

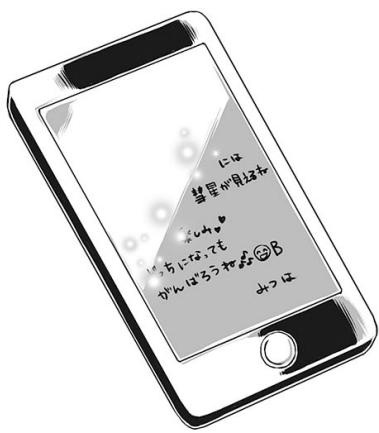
「……なっ」

一ひと文も字じ、また一ひと文も字じ。

三みつ葉はの書かいた文ぶん章しょうが、意い味みの分わからない文も字じに化ばけていく。やがてろうそくの炎ほのおみたいに一いっ瞬しゅんまたたいて、消きえる。そうやって、三みつ葉はの日につ記きが一つひとつ、エントリーごと消きえていく。まるで目めに見みえない誰だれかの手てが削さく除じょアイコンを押おし続つづけているみたいに。そして俺おれの見みている目めの前まえで、三みつ葉はの文ぶん章しょうはすべて消きえてしまう。

「どうして……」

小ちいさく口くちに出だす。トンビの一ひと鳴なきが、高たかく遠とおく、また響ひびく。



千二百年ねん周しゅう期きで太たい陽ようを公こう転てんするティアマト彗すい星せい、それが地ち球きゅうに最さい接せつ近きんしたのが三年ねん前まえの十月がつ、ちょうど今いま頃ごろの季き節せつだった。七十六年ねんごとに訪おとずれるハレー彗すい星せいとは比くらべものにならないほどの超ちょう長ちょう周しゅう期きで、軌き道どう長ちょう半はん径けいは百六十八億おくkm以い上じょうに及およぶという壯そう大だいなスケールを持もつ彗すい星せいの来らい訪ほう。しかも、予よ想そうされる近きん地ち点てんは約やく十二万まんkm、つまり月つきよりも近ちかくを通つう過かするという。千二百年ねんぶりに、青あおく輝かがやく彗すい星せいの尾おが夜よ空ぞらの半はん球きゅうにわたってたなびくというのだ。ティアマト彗すい星せいは、世世界かい的てきな祝しゅく祭さいムードの中なかで迎むかえられた。

そしてその核かくが地ち球きゅうの近きん傍ぼうで碎くだけるのを、その瞬しゅん間かんまで誰だれも予よ想そうできなかった。しかも氷こおりで覆おおわれたその内ない部ぶには、直ちょっ徑けい約やく四十メートルの岩がん塊かいがひそんでいたのだ。彗すい星せいの片かた割われは隕いん石せきとなり、秒びょう速そく三十km以い上じょうの破は壊かい的てきなスピードで地ち表ひょうに落らっ下かした。落らっ下か地ち点てんは日に本ほん　そこは不ふ幸こうなこと人にん間げんの居きょ住じゅう地ち、糸いと守もり町まちだった。

町まちは、その日ひがちょうど秋あき祭まつりだった。落らっ下か時じ刻こくは二十時じ四十二分ふん。衝しよう突とつ地ち点てんは、祭まつりの屋や台たいで賑にぎわっていたであろう宮みや水みず神じん社じや付ふ近きん。

隕いん石せき落らっ下かにより、神じん社じやを中ちゅう心しんとした広こう範はん囲いが瞬しゅん時じに壊かい滅めつした。家か屋おくや森しん林りんの破は壊かいに留とどまらず、衝しよう撃げきにより地ち表ひょうごと大おおきくえぐられ、直ちょっ徑けいほぼ一kmにも及およぶクレーターが形けい成せいされた。さらに五km離はなれた地ち点てん

1.2

でも一秒びょう後ごにはマグニチュード

の搖ゆれが

伝つたわり、十五秒びょう後ごには爆ばく風ふうが吹ふき抜ぬけ、町まちの広こう範はん囲いが甚じん大だいな被ひ害がいに見み舞まわれた。最さい終しゅう的てきな犠ぎ牲せい者しゃは五百人にん以い上じょうにのぼり、それは町まちの人じん口こうの1 / 3 にあたる。糸いと守もり町まちは、人じん類るい史し上じょう最さい悪あくの隕いん石せき災さい害がいの舞ぶ台たいとなつたのだ。

クレーターはもともとあつた糸いと守もり湖こに隣りん接せつして形けい成せいされたため、内ない部ぶに水みずが流ながれ込こみ、最さい終しゅう的てきには一つのひょうたん型がたの湖みずうみ、新しん糸いと守もり湖ことなつた。

町まちの南みなみ側がわは比ひ較かく的てき被ひ害がいがすくなかつたが、被ひ害がいを免まぬがれた千人にんほどの住じゅう民みんについても、その後ごは町まちからの転てん出しゅつ者しゃが相あい次ついだ。一年ねんを待またずして自じ治ち体たいとしての維い持じが困こん難なんとなり、隕いん石せき落らつ下かから十四ヶ月げつ後ご、糸いと守もり町まちは名めい実じつともに消しょう滅めつした。

これはすでに教きょう科か書しょ的てき事じ実じつだから、俺おれだってだいたいのことはもちろん知しっていた。三年ねん前まえ、俺おれは中ちゅう学がく生せいだった。近きん所じょの高たか台だいからティアマト彗すい星せいを実じっ際さいに眺ながめたことも覚おぼえている。

だが、おかしい。

つじつまが合あわない。

俺おれはつい先せん月げつまで何なん回かいも、三みつ葉はとして糸いと守もり町まちで暮くらしてきたのだ。

だから俺おれが見みたのは、三みつ葉はの住すまいは、糸いと守もり町まちではない。

彗すい星せいと三みつ葉はとの入いれ替かわりは、無む闇かん係けいだ。

そう考かんがえるのが自し然ぜんだった。そう考かんがえたかった。

だが、糸いと守もり町まち近きん隣りんにあるこの市し立りつ図と書しょ館かんで本ほんをめくりながら、俺おれはどうしようもなく混こん乱らんしている。さっきから頭あたまの芯しんで、お前まえが過すごした場ば所しょはここなのだと誰だれかが囁ささやき続づけている。

『消きえた糸いと守もり町まち・全ぜん書き録ろく』

『一いち夜やにして水みず沈しずんだ郷さと・糸いと守もり町まち』

『ティアマト彗すい星せいの悲ひ劇げき』

そんなタイトルのついた分ぶ厚あつい本ほんを、俺おれは片かた端はしからめくる。これらの本ほんに載のっている在ありし日ひの糸いと守もり町まちの写しゃ真しんは、どう見みても、俺おれが過すごした場ば所しょなのだ。この小しょう学がっ校こうは、四よつ葉はの通かよう建たて物もの。宮みや水みず神じん社じやは、婆ばあちゃんが神かん主ぬしをしているあの神じん社じやだ。このだだっ広びろい駐ちゅう車しゃ場じょうも、二軒けん並ならんだスナックも、納な屋やみたいなコンビニも、山やま道みちの小ちいさな踏ふみ切りも、もちろん糸いと守もり高こう校こうも、今いまとなってはすべてにくっきりと見み覚おぼえがある。あの廃はい墟きよの町まち並なみをこの目めで見みてからは、かえって記き憶おくが鮮せん明めいになっている。

息いきが苦くるしい。不ふ規き則そくに暴あばれている心しん臓ぞうが、いつまでも収おさまらない。

鮮あざやかな写しゃ真しんの数かず々かずには、現げん実じつ感かんと空くう気きが無む音おんのまま吸すい込こまれていくような気きがする。

「糸いと守もり高こう校こう・最さい後ごの体たい育いく祭さい」

そう題だいされた写しゃ真しんがある。二に人にん三さん脚きゃくをしている高こう校こう生せいたち。その端はじっここの二人ふたりに、俺おれは見み覚おぼえがあるような気きがする。一人ひとりは前まえ髪がみぱつつのお下さげ髪がみ。もう一人ひとりは、オレンジ色いろの紐ひもで髪かみを結ゆった少しょう女じょ。

空くう気きがさらに薄うすくなる。

首くびの後うしろにどろりと熱あつい血ちが垂たれた気きがして、手てでぬぐうと透とう明めいな汗あせだった。

「 瀧たき 」

顔かおを上あげると、司つかさと奥おく寺でら先せん輩ぱいが立たつていた。二人ふたりは俺おれに一冊さつの本ほんを手て渡わたす。分ぶ厚あつい表ひょう紙しに、箔はく押おしの重おも々おもししい書しょ体たいで

『糸いと守もり町まち彗すい星せい災さい害がい 犠ぎ牲せい者しゃ名めい簿ぼ目もく録ろく類るい』

と書かいてある。俺おれはページをめくる。犠ぎ牲せい者しゃの名な前まえと住じゅう所しょが、地ち区くごとに掲けい載さいされている。指ゆびで辿たどる。ページをめくっていく。やがて見み覚おぼえのある名な前まで、指ゆびが止とまる。

勅て使し河原がわら 克かつ彦ひこ (17)

名な取とり 早さ耶や香か (17)

「 テシガワラと、サヤちん…… 」

俺おれの咳つぶやきに、司つかさと先せん輩ぱいの息いきを呑のむ気け配はいがする。

そして俺おれは、決けっ定てい的てきな名な前まえを見みつけてしまう。

宮みや水みず 一ひと葉は (82)

宮みや水みず 三みつ葉は (17)

宮みや水みず 四よつ葉は (9)

二人ふたりが、俺おれの後うしろから名めい簿ぼを覗のぞき込こむ。

「この子こなの……？ 絶ぜつ対たいなにかの間ま違ちがいだよ！
だってこの人ひと」

奥おく寺でら先せん輩ぱいが、なんだか泣なき出だしそうな声こえで
言いう。

「三年ねん前まえに、亡なくなってるのよ」

俺おれはその言こと葉ばを押おし返かえすために、大おお声ごえで叫
さけぶ。

「つい二、三週しゅう間かんか前まえに！」

息いきが苦くるしい。必ひっ死しに吸すって、続つづける。今こん度
どは囁ささやきになる。

「彗すい星せいが見みえるねって、こいつは俺おれに言いったんで
す……」

目めを、なんとか『三みつ葉は』の文も字じから引ひき剥はがしながら
俺おれは言いう。

「だから……！」

顔かおを上あげると、目めの前まえの暗くらい窓まどに俺おれの顔か
おが映うつっている。お前まえは誰だれだと、とっさに思おもう。頭あ
たまの奥おくのずっと遠とおくから、しわがれた声こえが聞きこえる。
おや、あんた

あんた今いま、夢ゆめを見みとるな？

夢ゆめ？ 俺おれは激はげしく混こん乱らんする。

俺おれは、

いったい、
なにをしている？

* * *

隣となりの部へ屋やから、宴えん会かいの音おとが聞きこえている。

誰だれかがなにかを言ひて、どっと笑わらい声ごえがあがり、どしゃ降ぶりのような拍はく手しゅが響ひびく。さっきから、それが繰くり返かえされている。なんの集あつまりなのだろうと、耳みみをすまししてみる。しかしどんなに聴きいても、単たん語ごがひとつも拾ひろえない。分わかるのは日に本ほん語ごだということだけだ。

ゴン！ と大おおきな音おとがして、気きづけば俺おれは机つくえにうつぶせていた。額ひたいを打うったのか、鈍にぶい痛いたみが遅おくれてやってくる。もう、くたくたなのだ。

当とう時じの新しん聞ぶんの縮しゅく刷さつ版ばんや、週しゅう刊かん誌しのバックナンバー。いくら読よんでももう文ぶん章しょうが頭あたまに入はいってこなくなってしまった。スマフォも何なん度ども確たしかめてみたが、あいつの日にっ記きはやはり一つもなかった。痕こん跡せきは消きえてしまった。

うつぶせたままで、目めを開ひらく。数すうミリ先さきにある机つくえを睨にらみつけながら、この数すう時じ間かんの結けつ論ろんを口くちに出だしてみる。

「全ぜん部ぶ、ただの夢ゆめで……」

俺おれはそれを信しんじたいのか、信しんじたくないのか。

「景色けしきに見み覚おぼえがあったのは、三年ねん前まえのニュースを無む意い識しきに覚おぼえていたから。……それから、あいつの存そん在ざいは……」

あいつの存そん在ざいは、なんだ？

「……幽ゆう霊れい？　いや……全ぜん部ぶ……」

全ぜん部ぶ、俺おれの、

「……妄もう想そう？」

ハツとして、顔かおを上あげる。

なにかが、消きえている。

あいつの、

「……あいつの名な前まえ、なんだっけ……？」

コンコン。

突とつ然ぜんノックが響ひびいて、薄うすい木きのドアが開ひらいた。

「司つかさくん、お風ふ呂ろ行いってくるって」

そう言いながら、旅りょ館かんの浴衣ゆかたを着きた先せん輩ぱいが入はいってくる。よそよそしかった部へ屋やが、急きゅうに柔やわらかな空くう気きになる。俺おれはやけにホッとする。

「あの、先せん輩ぱい」

椅い子すから立たち、リュックの前まえにしゃがみ込こんでいる先せん輩ぱいに声こえをかける。

「俺おれ、なんかおかしなことばかり言ひってて……。今日きょう一日にち、すみません」

なにかを丁てい寧ねいに封ふう印いんするみたいにリュックのファスナーを閉しめて、先せん輩ぱいが立たち上あがる。それがどこかスローモーションのように、俺おれには見みえる。

「……ううん」

そう言ひって、かすかな笑えみで先せん輩ぱいは首くびを振ふる。

「一ひと部へ屋やしか取とれなくて、すみません」

「下したで司つかさくんにも同おなじこと言いわれたわよ」

そう言ひって、先せん輩ぱいはおかしそうに笑わらった。俺おれたち
は窓まど際ぎわの小ちいさなテーブルに、向むかい合あって座すわって
いる。

「私わたしはぜんぜん平へい気き。今こん夜やはたまたま団だん体たい
さんが入はいっちゃって、部へ屋やが空あいてないんだってね。教きょう
員いん組くみ合あいの懇こん親しん会かいだって、宿やどのおじさん
が言ひってたよ」

それから、お風ふ呂ろ上あがりに休きゅう憩けい室しつで梨なしをご
馳ち走そうになってきちゃったと、楽たのしそうに先せん輩ぱいは言ひ
う。この人ひとには誰だれだって、なにかを差さし出だしたくなるの
だ。旅りょ館かんのシャンプーの匂においが、遠とおい外がい国こくの
特とく別べつな香こう水すいのように俺おれに届とどく。

「へえ。糸いと守もり町まちって組くみ紐ひもの産さん地ちでもあった
のね。きれい」

先せん輩ぱいは、糸いと守もり町まちの郷きょう土ど資し料りょう本
ぽんをめくりながら呴つぶやく。俺おれが図と書しょ館かんから借り
てきたうちの一冊さつ。

「私わたしのお母かあさん時とき々どき着き物ものを着きるから、うち
にも何なん本ぽんかあるのよ。……あ、ねえ」

俺おれは湯ゆ飲のみを持もった手てを止とめた。先せん輩ぱいが、俺
おれの右みぎ手て首くびを見みている。

「瀧たきくんのそれも、もしかして組くみ紐ひも？」

「ああ、これは……」

湯ゆ飲のみをテーブルに置おき、自じ分ぶんの手て首くびを俺おれも
見みる。いつものお守まもり。糸いとというよりはもっと太ふとい、オ
レンジ色いろの鮮あざやかな紐ひもが手て首くびに巻まき付つけてあ
る。

……あれ？

これは、たしか

「たしか、ずっと前まえに、人ひとからもらって……お守まもり代がわりに、時とき々どきつけてて……」

頭あたまの芯しんが、ふたたびうずく。

「誰だれに……？」

と俺おれは呟つぶやく。思おもい出だせない。

でも、この紐ひもを辿たどればなにかがある、そんな気きがする。

「……ねえ、瀧たきくんも」

優やさしげな声こえに顔かおを上あげると、先せん輩ぱいの心しん配ぱいそうな顔かおがある。「お風ふ呂ろ、入はいってたら？」

「お風ふ呂ろ……はい……」

でも、俺おれはすぐに先せん輩ぱいから目めを離はなす。ふたたび組くみ紐ひもを見みつめる。ここで手てを離はなせば永えい遠えんに届とどかない。そんな気き持もちで、俺おれは必ひつ死しに書き憶おくを探さぐる。いつの間にか宴えん会かいは終おわっている。秋あきの虫むしの音ねが、ひっそりと部へ屋やに満みちている。

「……俺おれ、組くみ紐ひもを作つくる人ひとに聞きいたことがあるんです」

あれは、誰だれの声こえだ？ 優やさしくてしわがれていて穏おだやかな。昔むかし話ばなしみたいな。

「紐ひもは、時じ間かんの流ながれそのものだつて。捻ねじれたり絡からまつたり、戾もどつたりつながつたり。それが時じ間かんなんだつて。それが……」

秋あきの山やま。沢さわの音おと。水みずの匂におい。甘あまい麦むぎ茶ぢやの味あじ。

「それが、ムスピ　　」

弾はじかれたように、頭あたまの中なかに風ふう景けいが広ひろがつた。

山やまの上うえのご神しん体たい。そこに奉ほう納のうした、あの酒さけ。

「……あの場ば所しょなら……！」

俺おれは積つまれた本ほんの下したから地ち図ずを引ひきずり出だし、広ひろげる。個こ人じん商しょう店てんで埃ほこりをかぶっていた、三年ねん前まえの糸いと守もり町まちの地ち図ず。まだ湖みずうみが一つだった頃ころの地ち形けい。酒さけを奉ほう納のうしたあの場ば所しょは、隕いん石せきの被ひ害がい範はん囲いのずっと外そとだったはずだ。

あの場ば所しょまで行いけば。あの場ば所しょに、あの酒さけがあれば。

俺おれは鉛えん筆ぴつを手てにとって、それらしい地ち形けいを探さがす。あれは神じん社じやよりずっと北きた側がわで、カルデラ状じょうの地ち形けいだった。それらしい場ば所しょがないか、必ひっ死しで探さがす。

遠とおくで先せん輩ぱいの声こえが聞きこえたような気きがしたけれど、俺おれはもう、地ち図ずから目めを離はなすことが出で来きなかつた。

……くん。……たきくん。

誰だれかに、名なを呼よばれている。女おんなの声こえだ。

「たきくん、瀧たきくん」

泣なき出だしそうに切せつ実じつな声こえ。遠とおい星ほしの瞬またきのような、寂さみしげに震ふるえる声こえ。

「覚おぼえて、ない？」

そこで、目めが覚さめた。

……そうだ、ここは旅りょ館かんだ。俺おれは窓まど際ぎわのテープルにうつぶせて眠ねむっていたのだ。引ひき戸どの向むこうから、布ふ団とんで眠ねむっている司つかさと先せん輩ぱいの気け配はいがする。部へ屋やは異い様ように静しずかだ。虫むしの音ねも車くるまの音おともしない。風かぜも吹ふいていない。

俺おれは体からだを起おこす。衣きぬ擦ずれの音おとが、ドキッとするほど大おおきく響ひびいた。窓まどの外そとは、かすかに白しらみはじめている。

俺おれは手て首くびの組くみ紐ひもを見みる。さっきの少しょう女じょの声こえ、その残ざん響きょうが、まだうっすらと鼓こ膜まくに残のこっている。

お前まえは、誰だれだ。

名なも知しらぬ少しょう女じょに問といかけてみる。当とう然ぜん、返へん事じはない。

でも、まあ、いい。

奥おく寺でら先せん輩ぱい・司つかさへ どうしても行いってみたい場ば所しょがあります。

先さきに東とう京きょうに帰かえっていてください。勝かつ手てですみません。後あとから必かならず帰かえります。

ありがとう 瀧たき

とメモに書かいて、すこし考かんがえて財さい布ふから五千円えん札さつを出だし、メモと一いつ緒しょに湯ゆ飲のみの下したに置おいた。

まだ会あったことのない君きみを、これから俺おれは探さがしに行く。

*

*

*

無む口くちでそっけないけど、とても親しん切せつな人ひとだ。俺おれは隣となりでハンドルを握にぎる筋すじ張ばった手てを見みながら、そう思おもう。

昨日きのう、俺おれたちを糸いと守もり高こう校こうまで連つれていってくれたのも、市し立りつ図と書しょ館かんまで送おくり届とどけてくれたのも、このラーメン屋やのオヤジだった。今朝けさも早そう朝ちょうの電でん話わにもかかわらず、頼たのみを聞きいて車くるまを出だしてくれた。駄だ目めならヒッチハイクをしてみるつもりだったけれど、誰だれも住すんでいない廃はい墟きよの町まちまで乗のせていいってくれる車くるまがあるとは、今いまとなつてはとても思おもえなかつた。飛び驛だでこの人ひとと出で会あえたのは、本ほん当とうに運うんが良よかったです。

助じょ手しゅ席せきの窓まどからは、新しん糸いと守もり湖この縁ふちが見み下おろせた。半はん壊かいした民みん家かや途と切ぎれたアスファルトが水みずには浸つかっている。湖みずうみのかなり沖おき合あいにも、電でん柱ちゅうや鉄てつ骨こつが突つき出でているのが見みえる。異い常じょうな風ふう景けいのはずなのに、テレビや写しゃ真しんで見み慣なれているせいか、ここは最さい初しょからこういう場ば所しょだったという気きがしてくる。だから眼がん前ぜんにあるこの風ふう景けいになにを思おもえばいいのか　怒おこればいいのか、悲かなしみばいいのか、怖こわがればいいのか、あるいは自じ分ぶんの無む力りよくを嘆なげけばいいのか、よく分わからなくなってくる。一つの町まちが失うしなわれるというのは、たぶん普ふ通つうの人にん間げんの理り解かいを超こえた現げん象しようなのだ。俺おれは風ふう景けいに意い味みを探さがすのをあきらめ、空そらを見みる。灰はい色いろの雲くもが、神かみさまが置おいた巨きよ大だいな蓋ふたのように頭ず上じょうにかかっている。

湖みずうみに沿そうように北ほく上じょうし、もう車くるまではこれい上じょう登のぼれないといふところまで来きて、オヤジはサイドブレーキを上あげた。

「ひと雨あめ来くるかもしけんな」

フロントガラスを見み上あげ、ぼそりと言いう。

「ここはそう険けわしい山やまやないが、無む理りはしちゃいかん。なんかあつたら必かならず電でん話わしろ」

「はい」

「それから、これ」

そう言ひって、大おおきな弁べん当とう箱ばこを突つきつけるように差さし出だしてくる。「上うえで喰くえ」

思おもわず両りょう手てで受うけ取とると、ずっしりと重おもい。

「あ、ありがとうございます……」

なにからなにまで。どうして俺おれなんかにこれほど親しん切せつに。あ、そうだラーメンすげえ美味うまかったです。どの言こと葉ばも思おもうように口くちから出でてこなくて、スミマセン、と小ちいさく言いえただけだった。オヤジはすこしだけ目めを細ほそめ、煙草たばこを取とり出だし、火ひを点つけた。

「あんたの事じ情じょうは知しらんが」そう言ひって煙けむりを吐はき出だす。

「あんたの描かいた糸いと守もり。あらあ良よかった」

ふいに胸むねが詰つまる。遠えん雷らいが、小ちいさく鳴なった。

獣けもの道みちのような頼たよりない参さん道どうを、俺おれは歩あるいている。

時とき折おり立たち止どまり、地ち図ずに書かき込こんだ目もく的てき地ちと、スマフォのG P Sを突つき合あわせる。大だい丈じょう夫ぶ、ちゃんと近ちかづいている。周しゅう囲いの風ふう景けいもどこか見み覚おぼえがあるような気きがするけれど、夢ゆめの中なかで一度ど登のぼっただけの山やまだ。そこまでの確かく証しようはなかった。だからとにかく、地ち図ずに沿そうしかない。

車くるまから降おりた後あと、オヤジが視し界かいから消きえるまで、俺おれは深ふかく頭あたまを下さげ続つづけた。そうしていると、司つかさと奥おく寺でら先せん輩ぱいの顔かおも思おもい浮うかんだ。結けっ局きょくのところオヤジもあの二人ふたりも、俺おれが心しん配ぱいでこんなところまで付つき合あってくれたのだ。俺おれはきっと、よほどひどい顔かおをしていたのだ。たぶんずっと、泣なき出だしそうな顔かおをしていたのだ。放ほうっておきたくてもそれが出で来きないくらい、きっと押おしつけがましく弱よわっていたのだ。

いつまでも、そんな顔かおをしているわけにはいかない。誰だれかの差し出だす手てに甘あまえ続つづけてはいられない。

木き々ぎの隙すき間まに見みえはじめた新しん糸いと守もり湖こを眺ながめながら、俺おれは強つよくそう思おもう。ふいに、大おおきな雨あま粒つぶが顔かおに当あたった。ぱら・ぱら・ぱらと、周しゅう囲いの葉はが音おとを立たてはじめる。俺おれはフードをかぶって駆かけ出だす。

どしゃ降ぶりの雨あめが、土つちを削けずり取とるような勢いきおいで降ぶり続つづいている。

気き温おんが、雨あめに吸すい取とられてみるみる下さがっていくのが、肌はだで分わかる。

俺おれは小ちいさな洞どう窟くつで、弁べん当とうを食たべながら雨あめが弱よわまるのを待まっている。拳こぶしほどもある大おおきなサイズの握にぎり飯めしが三つと、たっぷりのおかず。厚あつ切ぎりのチャーシューやごま油あぶらで炒いためたモヤシが、いかにもラーメン屋やさんの弁べん当とうという感かんじでおかしかった。寒さむさに震ふるえていた体からだが、弁べん当とうを食たべたぶんだけ熱ねつを取り戻もどしていく。飯めし粒つぶを噛かんで飲のみ込こむと、食しょく道どうと胃いの場ば所しょがくっきりと分わかる。

ムスピだ、と俺おれは思おもう。

水みずでも、米こめでも、酒さけでも、なにかを体からだに入いれる行あこないもまた、ムスピという。体からだに入はいったものは、魂たましいとムスピつくから。

あの日ひ俺おれは、このことを目めが覚さめても覚おぼえていようと
思おもったのだ。口くちに出だしてみる。

「……捻ねじれて絡からまって、時ときには戾もどり、またつながつて。それがムスピ、それが時じ間かん」

手て首くびの紐ひもを見みる。

まだ、途と切ぎれていない。まだ、つながれるはず。

いつの間にか樹じゅ木もくの姿すがたは消きえ、周しゅう囲いは苔こけだらけの岩いわ場ばとなっている。眼がん下かには、分ぶ厚あつい雲くもの隙すき間にひょうたん型がたの湖みずうみが切きれぎれに見みえている。山さん頂ちょうに、ついに来きたのだ。

「……あつた！」

果はたしてその先さきには、カルデラ型がたの窪くぼ地ちと、ご神しん体たいの巨きよ木ぼくの姿すがた。

「……本ほん当とうに、あつた！ ……夢ゆめじや、なかつた……！」

小こ降ぶりになった雨あめが、涙なみだのように頬ほおを垂たれる。俺おれは袖そでで乱らん暴ぼうに顔かおをぬぐって、カルデラの斜しゃ面めんを降おり始はじめる。

記き憶おくでは小お川がわだったはずの流ながれが、ちょっとした池いけほどの大おおきさで目めの前まえに横よこたわっている。この雨あめで増ぞう水すいしたのか、あるいは、地ち形けいが変わるほどの時じ間かんがあの夢ゆめから経たったのか。いずれにせよ、巨きよ木ぼくは池いけを挟はさんだ数すう十じゅうメートル先さきだ。

ここから先さきは、あの世よ。



確たしか、誰だれかがそう言ひっていた。では、これは三さん途ずの

川かわか。

水みずに足あしを踏ふみ込こむ。ジャバン！ とまるで湯ゆ船ぶねに足あしをつけたように水みず音おとが大おおきく反はん響きょうして、この窪くぼ地ちが異い様ようなまでに静しずかだったことに今いまさら気きづく。膝ひざ上うえまでの重おもい水みずの中なかを歩あるくと、一いっ歩ば毎ごとに大おおきな水みず音おとが響ひびく。俺おれは無む垢くで真まっ白しろだったなにかを土ど足そくで汚よごしているような気き持もちになってくる。俺おれがやってくるまでは、この場ば所しょは完かん璧ぺきな沈ちん黙もくの中なかにあったのだ。俺おれは歓かん迎げいされていない。直ちょつ感かん的てきにそう思おもう。体たい温おんが、ふたたび冷つめたい水みず吸すい出だされていく。やがて俺おれは胸むな元もとまで水みず浸つかり、それでも、なんとか池いけを渡わたりきる。

その巨きよ木ぼくは、大おおきな一いち枚まい岩いわに根ねを絡からませて立たっていた。

樹きがご神しん体たいなのか、岩いわがご神しん体たいなのか、それとも両りょう者しゃが絡からまつたこの姿すがたが信しん仰こうの対たい象しようなのか、俺おれにはよく分わからない。根ねと岩いわの隙すき間に小ちいさな階かい段だんがあり、そこを降おりると、四畳じょう程てい度どの空くう間かんがぱっかりと口くちを開けている。

外そとよりも、そこは一いっ層そうに沈ちん黙もくが深ふかかった。

俺おれは凍こごえる手てで胸むねのファスナーを開あけ、スマフォを取り出だした。濡ぬれていることを確かく認にんする。電でん源げんを入れる。その動どう作さ一つひとつが、暗くら闇やみで暴ぼう力りょく的てきなほど大おおきな音おとを立たてる。 Fon、という場ば違ちがいな電でん子し音おんを響ひびかせ、懐かい中ちゅう電でん灯とう代がわりにスマフォのライトを点つけた。

そしてそこには、色いろと温おん度どというものがなかった。

ライトに照てらされて浮うかび上あがった小ちいさな社やしろは、完かん璧ぺきなグレイだった。石いし造づくりの小ちいさな祭さい壇だんに、十センチ程てい度どの瓶へい子しが二つ、並ならんでいた。

「俺おれたちが、運はこんできた酒さけだ……」

俺おれはその表ひょう面めんにそっと手てを触ふれる。いつの間まにかもう、寒さむくはなかった。

「こっちが妹いもうとで」

形かたちを確たしかめ、左ひだり側がわの瓶へい子しを掴つかむ。持ち上あげる時ときには、かすかな抵てい抗こうと、ベリ、という乾かわいた音おとがする。苔こけが根ねを張はっていたのだ。

「こっちが、俺おれが持もってきたもの」

俺おれはその場ばに座すわり込こみ、目めに近ちかづけて、ライトで照てらす。ぴかぴかだったはずの陶とう器きの表ひょう面めんが、びっしりと苔こけで覆おおわれている。ずいぶん時じ間かんが経たっているように見える。ずっと胸むねの中なかにあった考かんがえを、俺おれは口くちに出だしてみる。

「……三年ねん前まえのあいつと、俺おれは入いれ替かわってたってことか？」

蓋ふたを封ふう印いんしている組くみ紐ひもをほどく。蓋ふたの下したには、さらにコルク栓せんがしてある。

「三年ねん、時じ間かんがずれていた？ 入いれ替かわりが途と切ぎれたのは、三年ねん前まえに隕いん石せきが落おちて、あいつが死しんだから？」

コルク栓せんを抜ぬく。かすかなアルコールの匂においが立たつ。蓋ふたに、酒さけを注ついでみる。

「あいつの、半はん分ぶん……」

ライトを近ちかづけてみる。口くち噛かみ酒ざけは透すきとおってい、ところどころに小ちいさな粒りゅう子しが浮ういている。ライトを反はん射しゃして、液えき体たいの中なかでキラキラと瞬またいている。

「ムスピ。捻ねじれて絡からまって、時ときには戾もどって、またつながって」

酒さけを注ついだ蓋ふたを、口くちに近ちかづける。

「……本ほん当とうに時じ間かんが戻もどるのなら。もう一いち度どだけ」

あいつの体からだに！ そう願ねがいながら、一ひと口くちで飲のみ干ほした。喉のどが鳴なる音おとが、驚おどろくくらいに大おおきく響ひびく。体からだの中なかを熱あつい塊かたまりが通とおり抜ぬけていく。それは胃いの底そこで、弾はじけるように身体からだ中じゅうに拡かく散さんする。

「……」

でも、なにも起おきない。

俺おれは、しばらくじっとしてみる。

慣なれない酒さけに、すこし体たい温おんが上あがったような気きがする。頭あたまにすこしだけ、ぼんやりとした浮ふ遊ゆう感かんがある。でも、それだけだ。

……駄だ目めなのか。

俺おれは膝ひざを立たて、立たち上あがる。と、ふいに足あしがもつれた。視し界かいが回まわる。転ころぶ、と俺おれは思おもう。

おかしい。

俺おれは仰あお向むけに転ころんだはずなのに、背せ中なかがいつまで経たっても地じ面めんにぶつからない。視し界かいはゆっくりと回かい転てんし、やがて天てん井じょうが目めに入はいる。俺おれの左ひだり手てはスマフォを持もったままだ。ライトが、天てん井じょうを照てらす。

「……彗すい星せい……！」

思おもわず声こえに出だした。

そこには、巨きょ大だいな彗すい星せいが描えがかれていた。

岩いわに刻きざまれた、とても古ふるい絵えだ。天てんに長ながく尾おを引ひく巨きょ大だいなほうき星ぼし。赤あかや青あおの顔がん料

りょうが、ライトを受うけてちらちらと光ひかっている。そしてゆっくりと、その絵えは天てん井じょうから浮うき上あがりはじめる。

目めを見み張はった。

その絵えが、描えがかれた彗すい星せいが、俺おれに向むかって落おちてくる。

ゆっくりと、それは目もく前ぜんまで迫せまる。大たい気きとの摩ま擦さつ熱ねつで燃もえ上あがり、岩がん塊かいがガラス質しつとなり、宝ほう石せきのよう輝かがやいている。そんなディテイルまで、くつきりと俺おれには見みえる。

仰あお向むけに倒たおれた俺おれの頭あたまが石いしに打うちつけられるのと、彗すい星せいが俺おれの体からだにぶつかったのは、同どう時じだった。

第五章

記憶

どこまでも落おちていく。

あるいは、昇のぼっていく。

そんな判はん然ぜんとしない浮ふ遊ゆう感かんの中なか、夜よ空ぞらには彗すい星せいが輝かがやいている。

彗すい星せいはふいに割われ、片かた割われが落おちてくる。

その隕いん石せきは、山やま間あいの集しゅう落らくに落おちる。人ひとがたくさん死しぬ。湖みずうみが出で来き、集しゅう落らくは滅ぼろびる。

時ときが経たち、湖みずうみの周しゅう囲いにはやがてまた集しゅう落らくが出で来きる。湖みずうみは魚さかなをもたらし、隕いん鉄てつは富とみをもたらす。集しゅう落らくは栄さかえる。それから永ながい時ときが経たち、また彗すい星せいがやってくる。ふたたび星ほしが落おち、ふたたび人ひとが死しぬ。

この列れっ島とうに人ひとが棲すみついてから二度ど、それは繰くり返かえされた。

人ひとはそれを記き憶おくに留とどめようとする。なんとか後のちの世よに伝つたえようとする。文も字じよりも長ながく残のこる方ほう法ほうで。彗すい星せいを龍りゅうとして。彗すい星せいを紐ひもとして。割われる彗すい星せいを、舞まいのしぐさに。

また、永ながい時ときが経たつ。

赤あかん坊ぼうの泣なき声ごえが聞きこえてくる。

「あなたの名な前まえは、三みつ葉は」

優やさしげな母ははの声こえ。

そして残ざん酷こくな手て応ごたえとともに、へその緒おが断たち切きられる。

最さい初しょは二人ふたりで一つだったのに、つながっていたのに、人ひとはこうやって、糸いとから切り離はなされて現げん世せに落あ

ちる。

「二人ふたりは、父とうさんの宝たから物ものだ」「あなた、お姉ねえちゃんになったんやよ」

若わかかった夫ふう婦ふの会かい話わ。やがて三みつ葉はには妹いもうとが生うまれる。しあわせと引ひき換かえのように、母ははが病やまいに倒たおれる。

「お母かあさん、いつ病びょう院いんから帰かえってくるん？」

妹いもうとが無む邪じや気きに問とうが、姉あねはもう、母ははは戻もどらないと知しっている。人ひとは必かならず死しぬ。でもそれを受け入いれることは容よう易いではない。

「救すくえなかつた……！」

父ちちは深ふかく嘆なげく。父ちちにとって、妻つまほど愛あいした存そん在ざいはかつてなく、この先さきもいなかつた。長ちょうずるにつれ妻つまに似てていく娘むすめの姿すがたは、祝しゅく福ふくであり呪のろいだった。

「神じん社じやなど続づけたところで」「婿むこ養よう子しがなにを言いう！」

父ちちと祖そ母ぼのいさかいが日ひに日ひに増ます。

「僕ぼくが愛あいしたのは二ふた葉ばです。宮みや水みず神じん社じやじゃない」「出でていけ！」

父ちちも祖そ母ぼも、大たい切せつなものの順じゅん序じょを入れ替かえるにはすでに歳としを取とり過すぎていた。父ちちは耐たえきれず、家いえを出でる。

「三みつ葉は、四よつ葉は。今日きょうからずっと、祖母ばあちゃんと一緒に緒しょやでな」

重おもり玉だまの音おとが響ひびく家いえで、女おんな三人にんの生せい活かつが始はじまつた。

それなりに穏おだやかな日ひ々び。それでも、父ちちに捨てられた、という感かん情じょうは三みつ葉はの中なかに消きえない染しみとなる。

これは、

三みつ葉はの記き憶おく？

俺おれはなすすべもなく濁だく流れゅうに流ながされるように、三みつ葉はの時じ間かんにさらされている。

そして俺おれも知しっている、入いれ替かわりの日ひ々び。

三みつ葉はの目めで見る東とう京きょうは、知しらない外がい国こくのように輝かがやいている。俺おれたちは同おなじ器き官かんを持って生いきているのに、まるで違ちがう世せ界かいを見みている。

「いいなあ……」

三みつ葉はの呟つぶやきが聞きこえる。

「今いま頃ごろ二人ふたりは一いっ緒しょかあ」

俺おれと奥おく寺でら先せん輩ぱいの、デートの日ひだ。

「私わたし、ちょっと東とう京きょうに行いってくるわ」と妹いもうとに言いう。

東とう京きょう？

その夜よる、三みつ葉はは祖そ母ぼの部へ屋やの襖ふすまを開あける。

「お祖母ばあちゃん、お願ねがいがあるんやけど……」

三みつ葉はの長ながい髪かみが、ぱっさりと断たち切きられる。この三みつ葉はを、俺おれは知しらない。

「今日きょうが、いちばん明あかるく見みえるんやっけ」

彗すい星せいを見みにいこう、とテシガワラたちに誘さそわれている。

駄だ目めだ、三みつ葉は！

俺おれは叫さけぶ。

鏡かがみの後うしろから。風ふう鈴りんの音ね色いろとして。髪かみをそよがす風かぜとして。

三みつ葉は、そこにいちや駄だ目めだ！

彗すい星せいが落おちる前まえに、町まちから逃にげるんだ！



でも俺おれの声こえは、三みつ葉はには届とどかない。気きづかれな

い。

祭まつりの日ひ、三みつ葉はは友ともだちと、月つきよりも近ちかづいた彗すい星せいを見み上あげる。

彗すい星せいがふいに割われ、かけらが無む数すうの流りゅう星せいとなって輝かがやく。大おおきな岩がん塊かいがひとつ、隕いん石せきとなって落らっ下かをはじめる。

その眺ながめさえも、ただ美うつくしいと思おもって見みつめてい
る。

三みつ葉は、逃にげろ！

俺おれは声こえを限かぎりに叫さけぶ。

三みつ葉は、逃にげろ、逃にげてくれ！　三みつ葉は、三みつ葉は、
三みつ葉は！

そして、星ほしが落おちる。

第六章

再演

目めを覚さました。

その瞬しゅん間かんに、確かに信しんがあった。

俺おれは上じょう半はん身しんを跳はね上あげて、自じ分ぶんの体からだを見みる。細ほそい指ゆび。見み慣なれたパジャマ。胸むねのふくらみ。

「三みつ葉はだ……」

声こえが漏もれる。この声こえも。細ほそい喉のども。血ちも肉にくも骨ほねも皮ひ膚ふも。三みつ葉はの全ぜん部ぶが温おん度どを持もつて、ここにある。

「……生いきてる……！」

両りょう手てで自じ分ぶんの腕うでを抱だく。涙なみだが溢あふれてくる。蛇じゃ口ぐちが壊こわれたみたいに、三みつ葉はの目めが大おお粒つぶの涙なみだをこぼし続つづける。その熱あつさが嬉うれしくて、俺おれはますます泣なく。肋ろっ骨こつの中なかで心しん臓ぞうが喜よろこんで跳はねている。俺おれは膝ひざを曲まげる。つるりとした膝ひざに頬ほおを押おしあてる。三みつ葉はの体からだの全ぜん部ぶを包つつみ込こみたくて、ぎゅーっと体からだを丸まるめていく。

三みつ葉は。

みつは、みつは。

それは、もしかしたら永えい遠えんに出で逢あうことのなかったかもしれない、あらゆる可か能のう性せいをくぐり抜ぬけて今いまここにある、奇き跡せきだった。

「……お姉ねえちゃん、なにしとるの？」

声こえに顔かおを上あげると、襖ふすまを開あけて四よつ葉はが立たっていた。

「あ……妹いもうとだ……」

俺おれは涙なみだ声ごえで呴つぶやく。四よつ葉はも、ちゃんとまだ

生いきている。涙なみだと鼻はな水みずでぐじやぐじやになりながら胸むねを触さわっている姉あねの姿すがたを、呆ぼう然ぜんと見みつめている。

「四よつ葉はああああ！」

抱だきしめてやりたくて、俺おれは四よつ葉はに駆かけ寄よる。
ひつ、と四よつ葉はは息いきを呑のんで、俺おれの鼻はな先さきでぴしゃりと襷ふすまを閉しめた。

「ちょっとちょっと、お祖母ばあちゃん！」

叫さけびながら階かい段だんを駆かけ下おりる足あし音おと。

「お姉ねえちゃん、いよいよヤバイわ！　あの人ひと、完かん璧ぺき壊こわれてまったく！」

婆ばあちゃんに泣なきつく声こえが、階かい下から響ひびく。

……失しつれいな幼よう女じょだな。はるばると時じ空くうを超こえて、俺おれが町まちを救すくいに来きてやったというのに！

NHKのお姉ねえさんがにこやかに喋しゃべっている。俺おれは制せい服ふくに着き替がえて、階かい下かに降おりてきたところだ。スカートをはいた下か半はん身しんのたよりなさは久ひさしぶりで、その感かん覚かくを振ふり払はらうように仁に王おう立だちでテレビを睨にらみつけている。

『一週しゅう間かんほど前まえから肉にく眼がんでも見みえはじめたティアマト彗すい星せいは、今こん夜や七時じ四十分ぶん頃ごろに地ち球きゅうに最さい接せつ近きんし、最もっとも明あかるく輝かがやくとみられています。遂ついにピークを迎むかえた千二百年ねんに一度どの天てん体たいショー、各かく地ちでは様さま々ざまな盛もり上あがりが……』

「……今こん夜や！　まだ間に合あう……！」

そう呴つぶやく。武む者しゃ震ぶるいがする。

「おはよう三みつ葉は。四よつ葉は、今日きょうは先さきに出でてまっ

たよ」

振ふり向むくと、婆ばあちゃんが立たっている。

「婆ばあちゃん！ 元げん気きそう！」俺おれは思おもわず駆かけ寄よる。盆ぼんに急きゅう須すをのせて、婆ばあちゃんは居い間までお茶ぢやでも飲のむつもりだったのだろう。

「ああ？ ……おや、あんた」

老ろう眼がん鏡きょうを下さげて、俺おれの顔かおをじっと見みる。じわり、と目めを細ほそめる。

「……あんた、三みつ葉はやないんか？」

「なっ……」なんで!? 絶ぜつ対たいバレないと思おもっていた悪あく事じが露ろ呈ていしてしまったような、後うしろめたい気き持もちに俺おれはなる。いや、でもこれは好こう都つ合ごうでは。

「婆ばあちゃん……知しってたの？」

婆ばあちゃんは特とくに表ひょう情じょうも変かえず、座ざ椅い子すに腰こしを下おろしながら言いう。

「いいやあ。でもこんところのお前まえを見みとったら、思おもい出だしたわ。ワシも少しょう女じょの頃ころ、不ふ思し議ぎな夢ゆめを見みとった覚おぼえがある」

なんと！ こりゃ話はなし가早はやくていい。さすが日につ本ぼん昔むかし話ばなし一いつ家か。俺おれもテーブルに腰こしを下おろす。婆ばあちゃんが、俺おれのぶんのお茶ぢやも淹い入れてくれる。ずずず、とお茶ぢやをすすり、婆ばあちゃんは話はなしを続つづける。

「あれは、たいそうおかしな夢ゆめやった。いいや、夢ゆめというよりは、あれは別べつの人じん生せいやった。ワシはまるで知しらない町まちで、知しらない男おとこになつとった」

俺おれはごくりとつばを飲のみ込こむ。俺おれたちと、完かん全ぜんに同おなじだ。

「でも、それはある時とき、突とつ然ぜんに終おわってまたんやさ。今いまではもう、覚おぼえとるのは不ふ思し議ぎな夢ゆめがあつたとい

うことだけ。その夢ゆめでワシが誰だれになっておったのか、記き憶おくはすっかり消きえてまた……」

「消きえる……」

宿しゅく命めい的てきな病びょう名めいを告つげられたかのように、俺おれはどきりとする。そうだ。俺おれもいっとき、三みつ葉はの名なを忘わすれていた。すべて自じ分ぶんの妄もう想そうだと思おもい込こもうとしていた。婆ばあちゃんのしわだらけの顔かおが、どこか寂さびしそうな色いろを帯おびる。

「だから、今いまのあんたを、見みているものを、あんたは大だい事じにしないよ。どんなに特とく別べつでも、夢ゆめは夢ゆめ。目め覚ざめればいつか必かならず消きえてまう。ワシの母かあちゃんにも、ワシにも、あんたらの母かあちゃんにも、そんな時じ期きがあったんやで」

「それって、もしかしたら……！」

俺おれはふと思おもう。これは、宮みや水みず家けに受うけ継つがれてきた役やく割わりなのかもしれない。千二百年ねんごとに訪おとずれる厄やく災さい。それを回かい避ひするために、数すう年ねん先さきを生いきる人にん間げんと夢ゆめを通つうじて交こう信しんする能のう力りょく。巫女みこの役やく割わり。宮みや水みずの血ち筋すじにいつしか備そなわった、世世代だいを超こえて受うけ継つがれた警けい告こくシステム。

「もしかしたら、宮みや水みずの人ひとたちのその夢ゆめは、ぜんぶ今日きょうのためにあったのかもしれない！」

俺おれは婆ばあちゃんの顔かおをまっすぐに見みて、強つよい口く調ちょうで、言いう。

「ねえ婆ばあちゃん、聞きいて」

婆ばあちゃんは顔かおを上あげる。俺おれの言こと葉ばをどう受うけ止とめたのか、その表ひょう情じょうはいまいち読よめない。

「今こん夜や、糸いと守もり町まちに隕いん石せきが落おちて、みんな死しぬ」

婆ばあちゃんの顔かおが、こんどははっきりと、怪け訝げんそうに眉

まゆをひそめた。

そんなこと誰だれも信しんじないって、意い外がいに普ふ通つうことのことを言いう婆ばあちゃんだな。

高こう校こうまでの道みちを駆かけ下おりながら、俺おれはぶつぶつとそう思おもう。

入いれ替かわりの夢ゆめは信しんじるクセに隕いん石せき落らっ下かは疑うたがうって、どういうバランス感かん覚かくなんだあの婆ばあちゃん。

完かん璧ぺきに遅ち刻こくの時じ間かんで、周しゅう囲いに人ひと影かげはほとんどない。ピーちくぱーちくと山やま鳥どりの声こえがこだまする、いつもの町まちの穏おだやかな朝あさだ。俺おれたちでやるしかない、と俺おれは思おもう。

「絶ぜつ対たいに、誰だれも死しなせるもんか！」

自じ身しんに言いい聞きかせるように、俺おれは強つよく口くちに出だす。走はしる速そく度どを上あげる。隕いん石せき落らっ下かまで、あと半はん日にちもないのだ。

「三みつ葉は、お、お前まえ、その髪かみ……！」

「あんた、その髪かみいittai……！」

テシガワラとサヤちんが、教きょう室しつに入はいってきたばかりの俺みつはの顔かおを呆ぼう然ぜんと見みている。

「あ～この髪かみ？ 前まえのほうが良よかったですよね？」

肩かた上うえのボブカットの襟えり足あしを、俺おれは片かた手てで払はらいながら言いう。そういうえば、三みつ葉ははいつの間まにか長ながかった髪かみをぱっさりと切きっていた。俺おれの好このみは黒くろ髪かみロングだから、どうも気きに入いらぬ。いや今いまはそんなことよりも！

「そんなことより！」

がーん、という音おとが聞きこえそうなくらい大おおきく口くちを開あけたままのテシガワラと、探さぐるような目めつきのサヤちゃんの顔かおを、交こう互ごに見みながら俺おれは言いう。

「このままだと今こん夜や、みんな死しぬ！」

ぴたりと、教きょう室しつのざわめきが止やむ。クラスメイト全ぜん員いんの目めが俺おれに注そそがれる。

「ちょ、ちょっと三みつ葉は、なに言いっとるの!?」

サヤちゃんが慌あわてて立たち上あがり、テシガワラが強ごう引いんに俺おれの腕うでを引ひっぱる。二人ふたりに引ひきずられるように教きょう室しつから連れ出だされながら、まあ信しんじてもらえないのは当とう然ぜんかも、とうやく俺おれはすこし冷れい静せいになる。婆ばあちゃんの言いうとおり、いきなりこんな話はなしを信しんじろというのが無む理りな話はなしか。久ひさしぶりに入いれ替かわられた興こう奮ふんで、このままなんとなく上手うまくいくような気き持ちになっていた。

うーん、しかし、これは案あん外がいにやっかいいか？

かと思おもったが、テシガワラに關かんしては、それは杞き憂ゆうだった。

「……三みつ葉は、それ、マジで言いっとんのか？」

「だから、マジだってば！ 今こん夜や、ティアマト彗すい星せいが割われて隕いん石せきになる。それが高たかい確かく率りつで、この町まちに落おちる。情じょう報ほうソースは言いえないけれど、確たしかなスジからの話はなしだよ」

「そりや……一いち大だい事じや！」

「えええ、ちょっと、テッシーなに真しん剣けんな顔かおしとんのよ、あんたそこまでアホやったの？」

当とう然ぜん、サヤちゃんは取とりあってくれなかつた。

「だいたい情じょう報ほうソースってなんよ？ C I A ? N A S A ナサ？ 確たしかなスジ？ なにそれ、スパイごっこ？ ちょっと三みつ葉は、あんたどうしてまったくのよ!?」

どこまでも常じょう識しき人じんのサヤちんに、俺おれはヤケクソで三みつ葉はの財さい布ふからありったけの金かねを取とり出だす。

「サヤちんお願ねがい、私わたしがおごるから、これでなんでも好すきなものを買かって！ そして話はなしだけでも聞きいて！」

真しん剣けんな顔かおで言ひって、頭あたまを下さげる。サヤちんは驚おどろいたように俺おれの顔かおをじっと見みる。

「お金かねにうるさいあんたがそこまで言いうなんて……」

え、 そうなの？ そのくせ俺おれの金かねはばかばか無む駄だ遣づかいしてやがったのかあの女おんな！ サヤちんはあきらめたように溜ため息いきをひとつ吐はき、言ひう。

「……しょうがないなあ……わけわからんけど、まあ聞きくだけやからね。 テッシー、自じ転てん車しゃの鍵かぎ貸かして」

こんな額がくじや駄だ菓が子しくらいしか買かえないやんとぶつぶつ言ひいつつ、サヤちんは昇しよう降こう口ぐちに向むかって歩あるき始はじめる。良よかったです。額がくは足たりなかったみたいだけれど、誠せい意いは伝つたわるもんだ。

「コンビニ行ひってくる。 テッシー、あんたはちゃんと三みつ葉はを見み張はっときないよ。 その子こ、ちょっと普ふ通つうじゃないんやから」

そんなわけで、俺おれとテシガワラは今いまは使つかわれていない部ぶ室しつ棟とうの一いっ室しつに忍しのび込こみ、さっきから町まちの遊び難なん計けい画かくを練ねっている。

ゴールは、被ひ害がい範はん囲い内ないの百八十八世せ帯たい約やく五百人にんを、墮いん石せき落らっ下か時じ刻こくまでに範はん囲い外がいに移い動どうさせること。 真まっ先さきに思おもいつくのは放ほう送そうによる遊び難なん指し示じだ。

首しゅ相しよう官かん邸てい乗のっ取とり、国こっ会かい議ぎ事じ堂どう乗のっ取とり、ＮＨＫ渋しぶ谷や放ほう送そうセンター乗のっ取とり、いや別べつにＮＨＫ岐ぎ阜ふ・高たか山やま支し局きょく乗のっ取とりでいいんじゃね？ 的てきなお約やく束そくバカ話ばなしを一ひと通とおりした後あとで、そもそも町ちょう民みん全ぜん員いんが家いえでテレビやラジオを点つけているわけじゃないし、今こん夜やは秋あき祭まつりでなおさら外がい出しゅつしている人ひとが多おおい、という話はなしになり、うーんと俺おれたちは考かんがえ込こむ。

「……防ぼう災さい無む線せんや！」

テシガワラが突とつ然ぜんに大おお声ごえを出だす。

「防ぼう災さい無む線せん？」

「は？ お前まえ、知しらんとか言いうなよ。町まち中じゅうにスピー
カーがあるやろ？」

「あー……、あの、朝あさ晩ばん急きゅうに喋しゃべりだすヤツ？ 誰だれが産うまれたとか誰だれの葬そう式しきだとか」

「ああ。家いえの中なかでも外そとでも、あれなら町まち中じゅうで必
かならず聞きこえる。あれで指し示じを流ながせば！」

「え、でも、どうやって？ あれって町まち役やく場ばから流ながして
んだよね。お願ねがいしたら喋しゃべらせてくれんの？」

「んなわけねえやろ」

「じゃあどうすんの？ 役やく場ば乗のっ取とり？ まあＮＨＫ乗のっ
取とりよりはだいぶ現げん実じつ味みはあるかもだけど」

ひっひっひ、と不ぶ気き味みな笑えみを浮うかべて、テシガワラがスマフォになにかを入れにゅう力りょくしている。それにしてもコイツやけに嬉うれしそうだな。

「この手てがあるぜ！」

俺おれは差さし出だされたスマフォを覗のぞき込こむ。

重ちょう畳じょう周しゅう波は数すう。その解かい説せつ。

「……え……これマジ？」

テシガワラは鼻はなの穴あなを広ひろげ、誇ほこらしげにうなずく。

「ていうかテッシー、なんでこんなこと知しってるの？」

「そりやお前まえ、いつも寝ねる前まえに妄もう想そうしとるしな。町まちの破は壊かいとか学がっ校こうの転てん覆ふくとか。みんなそんなもんやん？」

「え……」俺おれは若じやつ干かん引ひく。いやしかしこれは。

「いやでも、すごいじゃんテッシー！　いけるかも！」

俺おれは言ひて、思おもわずがっつりとテシガワラの肩かたに手てを回まわす。

「あ、お前まえ、あんまりくっつくなや！」

「え？」

げ。こいつ耳みみまで赤あかくしてゐる。

「なに～？　テッシー照てれてんの？」

俺おれは下したからテシガワラの顔かおを見み上あげ、にやにやと言ひう。三みつ葉は、お前まえもなかなか捨すてたもんじゃないみたいだぞ。ほらほら～と、俺おれはさらに体からだを押おしつけてみる。サービスだサービス！　俺おれたちは古ふるいソファーの上うえに並ならんで座すわっていて、テシガワラは壁かべ際ぎわにいるからもはや逃にげ場ばはない。

「ちょ、三みつ葉は、やめろって！」

でかい体からだをくねくねとねじらせて抵てい抗こうするテシガワラ。こいつも男だん子しだなあ。まあ俺おれも男だん子しだけど。と、テシガワラは飛とび上あがるようにして突とつ然ぜんソファーの背せに登のぼり、声こゑを張はり上あげた。

「やめろって言ひっとるやろ！　嫁よめ入いり前まえの娘むすめがはしたない！」

「は……」

見みると、坊ぼう主ず頭あたままで赤あかく染そめ、だらだらと汗あせを垂たらしつつ、ほとんど涙なみだ目めになっている。

「は、ははは！ テッシー、あんたって……！」

俺おれは思おもわず笑わらい出だしてしまう。

こいつは絶ぜっ対たいに、信しん頼らいできるいい奴やつだ。

今い今までだって、友ともだちだと思おもっていた。でもそろそろ実じっ際さいに会あって、男だん子しとして、こいつらと話はなしがしたい。俺おれと、三みつ葉はと、テシガワラと、サヤちゃんと。司つかさや高たか木ぎや奥おく寺でら先せん輩ぱいも一いっ緒しょだったりしたら、それも絶ぜっ対たいに楽たのしい。

「ごめんねテッシー。信しんじてもらえたから、嬉うれしくて、つい」

俺おれは笑わらいをこらえながら、ふてくされた顔かおのテシガワラを見み上あげて言いう。

「避け難なん計けい画かくの続つづき、一いっ緒しょに考かんがえてもらえる？」

俺おれが笑え顔がおでそう言いうと、テシガワラは赤あかい顔かおのまま、それでも真しん剣けんにうなずいた。

これが終おわったら、こいつにも会あいに来こよう。なんだか眩まぶしいような心こころ持もちで、俺おれはそう思おもう。

「ば、ば、ば……爆ばく弾だん!?」

透とう明めいプラケースに入はいったミニショートケーキを食たべながら、サヤちゃんが声こえを上あげた。

「正せい確かくには、含がん水すい爆ばく薬やく。まあダイナマイトみたいなもんやな」

ポテトチップスをぱりぱりと噛かみながら、テシガワラが得とく意い

げに言いう。俺おれはマーブルチョコレートをぱりぱりと食たべている。机つくえにはサヤちゃんが買かっててくれた大たい量りょうのコンビニフードがいちめんに広ひろげられていて、なんだかパーティめいた雰ふん囲い気きである。そんな中なかで、俺おれとテシガワラは地ち図ずを前まえに、練ねりに練ねった避け難なん計けい画かくをサヤちゃんに披ひ露ろうしている。テンションの上あがるBGMでもかけたい気き分ぶんだ。パーカッシヴでちょっとマッドな、作さく戦せん会かい議ぎふうの。



500mlパックのコーヒー牛ぎゅう乳にゅうをごくりと飲のんで、テ

シガワラが續つづける。

「爆ばく薬やくは、オヤジの会かい社しゃの保ほ管かん庫こに土ど木ぼく用ようのがたっぷりある。後あとでバレる心しん配ぱいをしんくていいんなら、いくらでも持もち出だせるぜっ」

「それから次つぎは」俺おれはメロンパンの袋ふくろを開あけつつ言う。なんだかやけに腹はらが減へっていて、そして三みつ葉はの体からだで食たべるものは、なんだかやけに美味うまい。

「で、で、で……電でん波ぱジャック!?」

サヤちんがまたうわざった声こえを上あげる。カレーパンをかじりながら、テシガワラが解かい説せつする。

「こんな田舎いなかの防ぼう災さい無む線せんは、伝でん送そう周しゅう波は数すうと起き動どう用ようの重ちょう畳じょう周しゅう波は数すうさえ分わかりやあ簡かん単たんに乗のっ取とれるでな。音おん声せいに特とく定ていの周しゅう波は数すうが重かさねられとるだけで、スピーカーが作さ動どうする仕し組くみやから」

メロンパンを片かた手てに、俺おれは言こと葉ばを引ひき継つぐ。

「だから、学がっ校こうの放ほう送そう室しつからでも、町まち中じゅうに避け難なん指し示じを流ながせる」

俺おれは糸いと守もり町まちの地ち図ずを指ゆびます。宮みや水みず

1.2

神じん社じやを中ちゅう心しんに直ちょっ径けい
ほどの円えんが書かき込こんであり、俺おれはそれをぐるぐると指ゆび
でなぞる。km

「これが隕いん石せきの予よ想そう被ひ害がい範はん囲い。糸いと守もり高こう校こうは、ほら、この外そと側がわにある」高こう校こうの場ば所しょをトントンと叩たたく。

「だから、町ちょう民みんの避ひ難なん場ば所しょもここの校こう庭ていにすればいい！」

「それって……」

おそるおそる、というふうにサヤちんが口くちを開ひらく。

「か、かんべき犯はん罪ざいやに！」

そう言いいいつも最さい後ごまで残のこしていた莓いちごをぱくりと口くちに運はこぶサヤちんに、「犯はん罪ざいでもしないとこの範はん囲いの人人にん間げんは動うごかせないよ」とクールに言いって、俺おれは地ち図ずの上うえに散ちらばったマーブルチョコレートを手てでざつとどかしてみせる。そう、犯はん罪ざいでもなんでもいいから、要ようはこの円えんの中なかの人ひとたちを外そとに出だせばいいだけなのだ。

「なんか三みつ葉は、別べつ人じんみたいやな……」

俺おれはにっと笑わらって、メロンパンを大おおきくかじる。この体からだに入はいっていると言こと葉ば遣づかいはなんとなく女おんなっぽくなってしまうのだけれど、でも俺おれはもう、三みつ葉はとしてふるまうことなんてとっくに放ほう棄きしている。全ぜん部ぶ終おわって、こいつらが無ぶ事じでいてくれたら後あとのことはどうでもいい。生いきてさえいれば、どうとでもなる。

「で、放ほう送そうはサヤちん担たん当とうね」と、にこやかに俺おれは告つげる。

「なんですよ！」

「だって、放ほう送そう部ぶでしょ？」

「しかもお前まえの姉ねえちゃん、役やく場ばの放ほう送そう担たん当とうやし。無む線せんの周しゅう波は数すうも適てき当とうに聞きき出だしといてくれよ」とテシガワラ。

「えええ？ そんな勝かつ手てに……」

サヤちんの抗こう議ぎを無む視しし、テシガワラは嬉うれしそうに自己分ぶんを指ゆびさす。

「で、俺おれが爆ばく薬やく担たん当とう！」

「そして私わたしは、町ちょう長ちょうに会あいに行く」自じ分ぶんを指ゆびさしながら俺おれも言いう。

え！ と絶ぜつ句くするサヤちんに、テシガワラが説せつ明めいを続づける。

「さっき言いった手て順じゅんで、避ひ難なんのきっかけはたぶん俺おれで作つくれる。でも、最さい後ごは役やく場ばや消しょう防ぼうに出でてきてもらわんと、百八十八世せ帯たいの全ぜん員いんはさすがに動うごかし切きれんやろ？」

「だから、町ちょう長ちょうの説せつ得とくが必ひつ要ようなんだよ」と俺おれは言いう。

「娘むすめの私わたしからちゃんと話はなせば、きっと分わかってもらえると思おもう」

テシガワラは腕うで組ぐみをし、「完かん璧ぺきな作さく戦せんや……！」と自じ画が自じ贊さんしつつうむうむとうなずいている。俺おれも同おなじ気き持もちだ。確たしかにちょっと荒あらっぽいやり方かたではあるけれど、他ほかに手てはない、と思おもう。

「はああー……」

感かん心しんしてくれているのか呆あきれているのか、サヤちんが口くちを開あけて俺おれたちを見みる。

「まあ、良よくそこまで考かんがえとるなとは思おもうけどなあ……どうせもしもの話はなしやろ？」

「え？」

ここに至いたっての思おもいがけない問といかけに、言こと葉ばに詰つまる。

「いや……、もしもっていうか……」

サヤちんが乗のってくれないと、この計けい画かくは機き能のうしない。なんと言ひえばいいのか、俺おれは言こと葉ばを探さがす。

「そうとも限かぎらんぞ！」

と、突とつ然ぜんにテシガワラが大おお声ごえで、スマフォの画が面めんを突つきだした。

「糸いと守もり湖こがどうやって出で来きたか、知しっとるか？」

俺おれとサヤちゃんは寄より目めになって画が面めんを見みる。町まちのHホームPページらしきサイトに『糸いと守もり湖この由ゆ来らい』との大おお見み出だし。さらに『千二百年ねん前まえの隕いん石せき湖こ』『日に本ほんでは極きわめてまれ』の文も字じ。

「隕いん石せき湖こや！　すくなくとも一度どは、この場ば所しょには隕いん石せきが落おちたんや！」

テシガワラのどや顔がおとその言こと葉ばが、カチリ、と俺おれの頭あたまの中なかになにかをはめる。それがなにか分わからぬまま、俺おれは声こえを出だしている。

「そうだ、そうだよ……だから！」

だから、あの場ば所しょに彗すい星せいの絵えがあったんだ。俺おれは思おもい至いたる。千二百年ねん周しゅう期きのティアマト彗すい星せい。そして、糸いと守もり湖こは千二百年ねん前まえの隕いん石せき湖こ。隕いん石せきも、彗すい星せい来らい訪ほうとともに千二百年ねんごとにもたらされるのだ。予よ期きされた厄やく災さい。だからこそ、避さけることも出で来くるはずの災さい害がい。あの絵えも、メッセージであり警けい告こくなんだ。

思おもいがけない味み方かたを得えたような気き持もちになる。じつとしていられなくなる。全ぜん部ぶ、千年ねんも前まえから準じゅん備びされていたことなんだ！

「いいねテッシー！」

思おもわず拳こぶしを突つき出だすと、テシガワラも「おお！」と拳こぶしを合あわせてくれる。

いける。これはいける！

「やろうぜっ、俺おれたちでっ！」

俺おれたちはサヤちゃんに向むかって、つばを飛とばす勢いきついで声こえをそろえた。

「……なにを言いつてるんだ？ お前まえは？」

分ぶ厚あつい段だんボールにハサミを入れるようなざらついた重おもい声こえ。

俺おれはますます焦あせる。押おし切きられないように、声こえを張はる。

「だからっ！ 念ねんのために町ちょう民みんを避ひ難なんさせないと」

「すこし黙だまれ」

それはすこしも大おお声ごえではないのに、ぴしりと俺おれの声こえをせき止とめてしまう。

三みつ葉はの父ちち親おやである宮みや水みず町ちょう長ちょうは大たい儀ぎそうに目めをつむり、町ちょう長ちょう室しつの革かわ張ぱりの椅い子すに背せを預あずける。ぎぎぎ、と厚あつい革かわが音おとを立たてて軋きしむ。それからゆっくりと息いきを吐はき、窓まどの外そとに目めを移うつす。午ご後ごのうららかな日ひ差ざしに、葉はの陰かげが揺ゆれている。

「……彗すい星せいが二つに割われてこの町まちに落おちる？ 五百人にん以い上じょうが死しぬかもしれないだと？」

指ゆび先さきでトントンと机つくえを叩たたきながら、たっぷりと間まをあけ、ようやく俺おれを見みる。俺おれは膝ひざの裏うらにじわりと汗あせをかいている。緊きん張ちょうすると三みつ葉ははここに汗あせをかくのだと、俺おれは初はじめて知しる。

「信しんじられない話はなしだっていうのは分わかるよ。でも、ちゃんと根こん拠きよだって……」

「よくもそんな戯ざれ言ごとを俺おれの前まえで！」

突とつ然ぜん怒ど鳴なりつけられる。町ちょう長ちょうは眉み間けん

のしわを深ふかくし、「妾もう言げんは宮みや水みずの血ち筋すじか」とひとり言ごとのように小ちいさく呴つぶやき、射いるような目めで俺おれをまっすぐに見みて、おい三みつ葉は、と低ひくく言いう。

「本ほん気きで言いっているなら、お前まえは病びょう気きだ」

「……なつ」

俺おれは言こと葉ばが継つげない。つい三十分ぶん前まえの部ぶ室しつでの自じ信しんが、もうどこにも残のこっていないことに気きづく。ぜんぜん見けん当とう違ちがいのことをしている、そんな不ふ安あんがみるみるつのる。いや、違ちがう。これは妾もう想そうでもないし、俺おれは病びょう気きでもない。俺おれは

「車くるまを出だしてやるから」ふいに心しん配ぱいそうな口く調ちようになり、町ちょう長ちょうが受じゅ話わ器きを持もち上あげる。ダイヤルボタンを押おして、どこかに電でん話わをかけながら俺おれに言う。

「市し内ないの病びょう院いんで医い者しゃに診みてもらえ。その後あとでなら、もう一いち度ど話はなしを聞きいてやる」

その言こと葉ばが、俺おれの体からだを不ふ快かいに揺ゆさぶる。こいつは、俺おれを、自じ分ぶんの娘むすめを、本ほん気きで病びょう人にん扱あつかいしている。そう判わかったとたん全ぜん身しんが凍こおったように冷つめたくなって、頭あたまの芯しんだけが発はっ火かしたみたいに熱あつくなった。

怒いかりだった。

「　バカにしやがって！」

そう叫さけんでいた。目めの前まえに見み開ひらいた町ちょう長ちょうの両りょう目めがあって、気きづけば、俺おれは町ちょう長ちょうのネクタイをねじり上あげていた。受じゅ話わ器きが机つくえの横よこに落おちて、ツーツーツー……という不ふ通つう音おんを小ちいさく上あげている。



「.....はつ」

手てを、ゆるめた。ゆっくりと、町ちょう長ちょうの顔かおが離はなれていく。驚おどろきか困こん惑わくか、宮みや水みず町ちょう長ちようはかすかに震ふるえる口くちを開あけたままで、俺おれたちは互たがいの目めから視し線せんを外はずせない。俺おれの全ぜん身しんの毛け穴あなが、嫌いやな汗あせで開ひらいていく。

「……三みつ葉は」

空くう気きを絞しぼり出だすように、町ちょう長ちょうが口くちを開ひらいた。

「……いや……お前まえは、誰だれだ？」

震ふるえて発はっせられたその言こと葉ばは、風かぜに乗のって入はいってしまった羽は虫むしのように、いつまでも嫌いやな感かん覚かくとともに耳みみの中なかに残のこった。

金かな槌づちを打うつ音おとが、どこからかかすかに聞きこえる。

真ま昼ひると夕ゆう方がたのはざまの時じ間かん、この町まちは静しずかすぎて、ずっと遠とおくの音おとまでが風かぜに乗のって耳みみに届とどく。カンカン、カンカン。町まち役やく場ばを出で、湖みずうみを見みおろす坂さか道みちをとぼとぼと歩あるきながら、音おとに合あわせて堅かたい木きに突つき刺ささっていく釘くぎの姿すがたを俺おれは想そう像ぞうする。暗くらく狭せまい木きに押おし込こまれ、やがて錆さびついていく鉄てつの釘くぎ。たぶん、神じん社じやで秋あき祭まつりの準備じゅん備びをしているんだ。道みち沿ぞいに並ならべられた木き造づくりの灯とうろうを眺ながめ、俺おれはぼんやりとそう思おもう。

じゃ、あとでなー、と子こどもの声こえが上うえから聞きこえ、俺おれは顔かおを上あげた。

坂さかの上うえで、ランドセルの子こどもたちが手てを振ふり合あっている。

「うん、じゃああとでお祭まつりでな」

「神じん社じやの下したで待まち合あわせな」

そう言ひて友ともだちと別わかれ、男おとこの子こと女おんなの子
こが俺おれのほうに駆かけ下おりてくる。小しょう学がっ校こう半なか
ばくらい、四よつ葉はと同おなじくらいの年とし回まわりだ。

落らっ下か地ち点てんは、神じん社じや。

「行いっちゃだめだ！」

俺おれの横よこを駆かけ抜ぬけようとした男おとこの子この肩かた
を、思おもわず俺おれは掴つかんでいる。

「町まちから逃にげて！ 友ともだちにも伝つたえて！」

俺おれの腕うでの間あいだで、知しらない子こどもの顔かおがさつと
恐きょう怖ふの色いろに変かわる。

「な、なんや、あんた！」

思おもいきり手てを払はらいのけられる。俺おれは我われに返かえ
る。

「お姉ねえちゃんー！」

声こえの方ほう向こうを見みると、ランドセル姿すがたの四よつ葉は
が心しん配ぱい顔がおで駆かけ下おりてくる。二人ふたりの子こどもは
逃にげるよう走はしり去さっていく。 こんなんじや駄だ目めだ。
これじゃ不ふ審しん者しゃだ。

「ちょっとお姉ねえちゃん、あの子こらになにしたん!?」飛とびつくよ
うにして俺おれの両りょう腕うでを掴つかみ、顔かおを見み上あげて四
よつ葉はが言いう。

でも、これから俺おれは、どうすればいい？

四よつ葉はの顔かおを見みる。不ふ安あんそうに俺おれの言こと葉ば
を待まっている。三みつ葉はなら、と、俺おれは思おもったままを呴つ
ぶやく。

「三みつ葉はなら……説せっ得とくできたのか？ 俺おれじゃだめなの
か？」

戸と惑まどう四よつ葉はに、俺おれはかまわず重かさねる。

「四よつ葉は、夕ゆう方がたまでに婆ばあちゃんを連つれて、町まちから出でて」

「え？」

「ここにいちゃ死しんじゃうんだよ！」

「えええ、ちょっとお姉ねえちゃんなに言いつとるの!?」

大だい事じな話はなしなんだよ、という俺あれの言こと葉ばを押おしへもどすように、四よつ葉はが必ひっ死しな声こえを上あげる。

「お姉ねえちゃん、ちょっとしっかりしてよ！」

目めが潤うるんでいる。怖こわがっている。俺あれの目めを覗のぞき込こむように、ぐっと背せ伸のびして四よつ葉はは言いう。

「昨日きのうは急きゅうに東とう京きょうに行いってまうし、お姉ねえちゃん、このところずっと変へんやよ！」

「え……」

違い和わ感かんを、俺あれは覚おぼえる。……東とう京きょう？

「四よつ葉は、いま東とう京きょうって」

「おーい、三みつ葉はあ！」

サヤちんの声こえ。顔かおを上あげると、テシガワラの漕こぐ自じ転てん車しゃの後うしろで、サヤちんが大おおきく手てを振ふっている。ざっとアスファルトをこする音おとで、自じ転てん車しゃが止とまる。

「オヤジさんとの話はなし、どうやった!?」

前まえのめりにテシガワラが訊きく。俺あれは返へん事じが出で来きない。混こん乱らんしている。なにから考かんがえれば良いいのか、分わからなくなっている。俺あれの話はなしを、町ちょう長ちょうはまったく取とりあってくれなかった。それどころか「お前まえは誰だれだ」と、父ちち親おやが娘むすめに訊きいたのだ。俺あれがそう訊きかせたのだ。俺あれが三みつ葉はに入はいっているからだめなのか？ では、三みつ葉はは今いまどこにいる？ 三みつ葉はは昨日きのう、東とう京

きょうに行いったのだと四よつ葉はは言いう。なぜ？ 昨日きのうとは、いったいいつだ？

おい三みつ葉は？ と訝いぶかしげなテシガワラの声こえが聞きこえる。お姉ねえちゃん、どうしたん？ とサヤちんが四よつ葉はに訊きいている。

三みつ葉はは、どこにいる？ 僕おれは、今いま、どこにいる？

もしかして。

僕おれは視し線せんを上あげる。民みん家かの向むこうにこんもりとした山やまの輪りん郭かくが重かさなり、そのさらに向むこうに、青あおに霞かすむ山やまの稜りょう線せんがある。僕おれが登のぼった山やま。山やまの上うえのご神しん体たい。口くち噛かみ酒ざけを飲のんだ場ば所しょ。湖みずうみからふわりと冷つめたい風かぜが吹ふき、短みじかくなった三みつ葉はの毛け先さきをゆらし、まるで誰だれかの指ゆび先さきのように、髪かみが頬ほおをそっと撫なでる。

「そこに……いるのか？」僕おれは呟つぶやく。

「え、なになに、あっちになんかあるん？」

四よつ葉はとサヤちんとテシガワラも、そろって僕おれの視し線せんを追おう。三みつ葉は、お前まえがそこにいるのなら

「テッシー、ちょっと自じ転てん車しゃ貸かして！」

言いいながら、僕おれは奪うばうようにハンドルを掴つかむ。サドルにまたがり、地じ面めんを蹴ける。

「え、おい、ちょっと三みつ葉は！」

サドルがやけに高たかい。僕おれは立たち漕こぎで、坂さか道みちを登のぼり出だす。

「三みつ葉は、作さく戦せんはあ!?」

遠とおざかる僕おれに、なんだか泣なきそうな声こえでテシガワラが叫さけぶ。

「計けい画かく通どおり、準じゅん備びしておいてくれ！ 頼たの

む！」

しんとした町まちに、俺おれの大おお声こえがこだまする。体からだから切きり離はなされた三みつ葉はの声こえが、山やまと湖みずうみに反はん射しゃしてひととき大たい気きに満みちる。俺おれはその声こえを追おいかけるようにして、全ぜん力りょくでペダルを漕こぐ。

* * *

頬ほおを、誰だれかが叩たたいている。

とても微び妙みょうな力ちからで、たぶん中なか指ゆびの先さきだけで、私わたしが痛いたがらないようにそっと叩たたいている。そしてその指ゆび先さきは、とても冷つめたい。ついさっきまで氷こおりを握にぎっていたみたいに、ひんやりとしている。そんなふうに私わたしを起おこすのは、いったい誰だれなんだろう。

私わたしは目めを開ひらく。

あれ？

そこはとても暗くらい。まだ夜よるなのかな。

また頬ほおを叩たたかれる。違ちがう。これは水みずだ。水すい滴てきが、さっきから私わたしの頬ほおに落おちているのだ。上じょう半はん身しんを起おこして、私わたしはようやく気きづく。

「……私わたし、瀧たきくんになっとる！」と、思おもわず声こえができる。

狭せまい石いし段だんを登のぼると、まっすぐに夕ゆう陽ひが目めを刺さした。

ずいぶん長ながい間あいだ暗くら闇やみにいたのか、瀧たきくんの目めにはひりひりと涙なみだが滲にじむ。登のぼりきったそこは、もしかしたらと思おもっていた通とおり、ご神しん体たいの山やまの上うえだった。

どうして、瀧たきくんがこんなところに？

なんだかよく分わからないまま、私わたしは巨きよ木ぼくの下したを出でて、窪くぼ地ちを歩あるき始はじめる。瀧たきくんは、アウトドアな厚あつめのパーカーを着き込こんでいる。分ぶ厚あついゴム底ぞこのトレッキングシューズを履はいている。地じ面めんは柔やわらかく濡ぬれてい、さっきまで雨あめが降ふっていたのか、背せの低ひくい草くさにはびっしりと水すい滴てきがついている。でも、見み上あげた空そらはすっきりと晴はれている。ちぎれた薄うす雲ぐもが、金きん色いろに輝かがやきながら風かぜに流ながされている。

そして私わたし自じ身しんの記き憶おくは、なんだかぼんやりしている。

なにも思おもい出だせないまま、私わたしはやがて窪くぼ地ちの端はし、斜しゃ面めんの下したまで辿たどりつく。斜しゃ面めんを見み上あげる。ここはカルデラ状じょうの地ち形けいで、この斜しゃ面めんを登のぼり切きると、そこが山やまの頂ちょう上じょうだ。私わたしは登のぼり始はじめる。登のぼりながら、記き憶おくを探さぐる。ここに来くる前まえになにをしていたのか、なんとか思おもい出だそうとする。するとやがて、その端はじっこに指ゆびが触ふれる。

祭まつりばやし。浴衣ゆかた。鏡かがみに映うつった、髪かみを短みじかくした自じ分ぶんの顔かお。

そうだ。

昨日きのうは秋あき祭まつりで、私わたしはテッサーたちに誘さそわれて浴衣ゆかたを着きて出でかけたのだ。彗すい星せいが一いち番ばん明あかるく見みえる日ひだから、三人にんで見みにいこうって。そう

だった。なんだかずいぶん遠とおい記き憶おくのような気きがするけれど、あれは確たしかに、昨日きのうだ。

テッサーとサヤさんは、私わたしの新あたらしい髪かみ型がたにずいぶん驚おどろいていた。テッサーなんて、ガーンと音おとがするくらい大おおきな口くちをあけていた。なんだか気きの毒どくなくらい二人ふたりは動どう搖ようしてしまっていて、高たか台だいまで歩あるく間あいだ中じゅうずっと、「なあなあやっぱ失しつ恋れんかなあ」とか、「なんよその発はっ想そうは昭しよう和わのオヤジ?」とか、私わたしの背せ中なかでこそそと言いい合あっていた。

一車しゃ線せんの細ほそい道みちを登のぼりきり、カーブミラーを曲まがると、視し線せんのまっすぐ先さきの夜よ空ぞらに唐とう突とつに、巨きょ大だいな彗すい星せいがあった。長ながくたなびく尾おはエメラルドグリーンに輝かがやいていて、その先せん端たんは月つきよりも明あかるかった。目めを凝こらすと、細こまかな塵ぢりのような粒つぶがその周しゅう囲いにきらきらと舞まっていた。私わたしたちは喋しゃべることも忘わすれ、ばかみたいに口くちを開ひらいて、長ながい時じ間かんそれに見みとれた。

そしていつのまにか、彗すい星せいの先せん端たんが二つに分わかかれていることに、私わたしは気きづいた。大おおきくて明あかるい二つの先せん端たん、その一つが、ぐんぐんと近ちかづいてくるように見みえた。やがてその周まわりに、細ほそい流ながれ星ぼしが幾いく筋すじも輝かがやきはじめる。星ぼしが降ふってくるようだった。いや、それは実じっ際さいに星ぼしが降ふる夜よるだった。まるで夢ゆめの景色けしきのように、それは嘘うそみたいに綺き麗れいな夜よ空ぞらだった。



私わたしは、ようやく斜しや面めんを登のぼり切きる。吹ふきつける風かぜが冷つめたい。眼がん下かには、輝かがやく絨じゅう毯たんみみたいな雲くもがいちめんに広ひろがっている。そしてその下したには、うっすらと青あおい影かげ色いろに染そまりつつある糸いと守もり湖こがある。

あれ？ と私わたしは思おもう。

おかしい。

私わたしはさっきから、氷こおりづけにされたみたいにがちがちと震ふるえている。

いつのまにか、怖こわくてたまらない。

怖こわくて怖こわくて、不ふ安あんで悲かなしくて心こころ細ほそくて、頭あたまがどうにかなってしまいそうだ。冷つめたい汗あせが、栓せんが壊こわれたみたいに吹ふき出だし続つづけている。

もしかしたら。

私わたしは狂くるってしまったのかもしれない。自じ分ぶんでも気きづかぬうちに、壊こわれてしまったのかもしれない。

怖こわい。怖こわい。今いますぐに叫さけび出だしたいのに、喉のどからは粘ねばついた息いきしか出でてこない。自じ分ぶんの意い志しとは無む関かん係けいに、まぶたが大おおきく開ひらいていく。からからに乾かわいた眼がん球きゅうの表ひょう面めんが、じっと湖みずうみを見みつめ続つづけている。私わたしは知しっている。私わたしは気きづいている。

糸いと守もり町まちが、ない。

糸いと守もり湖こに覆あおい被かぶさるようにして、もっと大おおきな丸まるい湖みずうみが出て来きている。

そんなのあたりまえだよ、と私わたしの中なかのどこかが思おもう。

あんなものが落おちてきたんだから。

あんなに熱あつくて重おもい塊かたまりが、頭あたまの上うえに落おちてきたんだから。

そうだ。

あの時とき、私わたしは。

関かん節せつが無む音おんのまま壊こわれたみたいに、私わたしは突然ぜんに、その場ばに膝ひざをつく。

私わたしは、あの時とき。

かろうじて、喉のどから漏もれた空くう気きが声こえになる。

「……私わたし、あの時とき……」

そして洪こう水ずいみたいに流ながれ込こんでくる、瀧たきくんの記き憶おく。一つの町まちを滅ほろぼした彗すい星せい災さい害がい。本ほん当とうは三年ねん未み来らいの東とう京きょうに暮くらしていた、瀧たきくん。その時とき、私わたしはもういなかつたこと。星ほしが降ふった夜よる。あの時とき、私わたしは

「死しんだの……？」

* * *

人ひとの記き憶おくは、どこに宿やどるのだろう。

脳のうのシナプスの配はい線せんパターンそのものか。眼がん球きゅうや指ゆび先さきにも記き憶おくはあるのか。あるいは、霧きりのように不ふ定てい型けいで不ふ可か視しな精せい神しんの塊かたまりがどこかにあって、それが記き憶おくを宿やどすのか。心こころとか、精せい神しんとか、魂たましいとか呼よばれるようなもの。OSの入はいったメモリーカードみたいに、それは抜ぬき差さし出で来きるのか。

すこし前まえにアスファルトは途と切ぎれ、俺おれは未み舗ほ装そう

の山やま道みちをひたすらに自じ転てん車しゃのペダルを漕こいでいる。低ひくい太たい陽ようが、木き々ぎの間あいだにチラチラと瞬またいている。三みつ葉はの体からだは絶たえ間まなく汗あせを流ながし、前まえ髪がみが額ひたいに貼はりついている。俺おれは漕こぎながら、汗あせと一いっ緒しょに、髪かみをぬぐう。

三みつ葉はの魂たましい。それはきっと今いま、俺おれの体からだの中なかにいるはずだ。俺おれの心こころがここに、三みつ葉はの体からだの中なかにあるのだから。でも　　と、さっきから俺おれは思おもっている。

俺おれたちは今いまも、一いっ緒しょにいる。

三みつ葉はは、すくなくとも三みつ葉はの心こころのかけらは、今いまもここにある。たとえば、三みつ葉はの指ゆび先さきは制せい服ふくの形かたちを覚おぼえている。俺おれが制せい服ふくを着くるとき、ファスナーの長ながさも襟えりの固かたさも、俺おれは自し然ぜんに知しっている。たとえば三みつ葉はの目めは、友ともだちを見みるとほっとする。嬉うれしくなる。三みつ葉はが誰だれが好すきで誰だれが苦にが手てか、訊きかなくても俺おれには分わかる。婆ばあちゃんを目めにすると、俺おれが知しらないはずの思おもい出でまでがフォーカスの壊こわれた映えい写しゃ機きみたいに、ぼんやりと頭あたまに浮うかぶ。体からだと記き憶おくと感かん情じょうは、分わかちがたくムスピついでいる。

たきくん。

三みつ葉はの声こえが体からだの内うち側がわから、さっきから聞きたえている。

たきくん、瀧たきくん。

泣なき出だしそうに切せつ実じつな声こえだ。遠とおい星ほしの瞬またきのような、寂さみしげに震ふるえる声こえ。

ぼやけていたフォーカスが、結むすばれていく。瀧たきくん、と三みつ葉はが呼よんでいる。

「覚おぼえて、ない？」

あの日ひの三みつ葉はの記き憶おくを、そして俺おれは思おもい出だ

す。

* * *

その日ひ、三みつ葉はは学がっ校こうには行いかずに、電でん車しゃに乗のった。

東とう京きょうへの新しん幹かん線せんが接せつ続ぞくする、大おおきなターミナル駅えき。そこに向むかうためのローカル線せんは、通つう学がくの時じ間かんにもかかわらず空すいていた。沿えん線せんに学がっ校こうはないし、このあたりの勤つとめ人にんはみんな車くるまを使つかう。

「私わたしちょっと、東とう京きょうに行いってくるわ」

朝あさ家いえを出でて、学がっ校こうに向むかう途と中ちゅうで唐とう突とつに、三みつ葉はは妹いもうとにそう告つげたのだ。

「ええ、今いまから？　なんで!?」四よつ葉はは驚おどろいて姉あねに訊きく。

「ええと……デート？」

「え！　お姉ねえちゃん、東とう京きょうに彼かれ氏しあったの!?」

「うーんと……私わたしのデートやなくて……」

説せつ明めいに困こまり、三みつ葉はは駆かけ出だす。走はしりながら付つけ加くわえる。

「夜よるには帰かえるで、心しん配ぱいしんといて！」

新しん幹かん線せんの窓まどをびゅんびゅんと飛とび去さる景色けしきを眺ながめながら、三みつ葉はは考かんがえている。

奥おく寺でら先せん輩ぱいと瀧たきくんのデートの場ばに行いって、

私わたしはどうしたいんだろう。さすがに三人にんで遊あそぶってわけにはいかないよね。そもそも初はじめて行いく東とう京きょうで、私わたしはちゃんと瀧たきくんに会あえるんだろうか。もし会あえたとして急きゅうに訪たずねたら、迷めい惑わくかな。驚おどろくかな。瀧たきくんは、いやがるかな。

拍ひょう子し抜ぬけするくらいあっさりと簡かん単たんに、新しん幹かん線せんは東とう京きょうに着ついてしまう。あまりの人ひと混ごみに息いきを詰つまらせながら、三みつ葉はは俺おれに電でん話わをかけてみる。電でん波ばの届とどかない場ば所しょにいるか、電でん源げんが入はいっていないため……。電でん話わを切きる。やはり、通つうじないのだ。

会あえっこない、と三みつ葉はは思おもう。

でも、駅えきの案あん内ない板ばんを試し験けん問もん題だいみたいに凝ぎょう視しして、三みつ葉はは曖あい昧まいな記き憶おくをよすがにして街まちに出でてみる。

でも、もし会あえたら……。

山やま手のて線せんに乗のり、都とバスに乗のり、歩あるき、また電でん車しゃに乗のり、また歩あるく。

どうしよう、やっぱり迷めい惑わくかな。気きまずいかな。それとも

街がい頭とうテレビには、『ティアマト彗すい星せい・明あ日す最さい接せつ近きん』の文も字じ。

それとも、もし会あえたら、もしかしたら、すこし

歩あるき疲れか、歩ほ道どう橋きょうからきらきら光ひかるビルを眺ながめながら、三みつ葉はは祈いのるように、思おもう。

もし会あえたら、瀧たきくんは、すこしは、喜よろこぶかな。

ふたたび三みつ葉はは歩あるき出だす。そして考かんがえる。

こんなふうにやみくもに探さがしほまわったって、会あえっこない。会あえっこないけれど、でも、確たしかなことが、ひとつだけある。私わたしたちは、会あえばぜったい、すぐに分わかる。私わたしに入は

いっていたのは、君きみなんだって。君きみに入はいっていたのは、私わたしなんだって。

100パーセント、誰だれだってぜつたいに間ま違ちがえようのない足たし算ざんの問もん題だいみたいに、そのことだけは、三みつ葉はは確かく信しんしている。

駅えきのホームの屋や根ねの隙すき間に、懐かい中ちゅう電でん灯とうみたいな夕ゆう陽ひが沈しずんでいく。

歩あるき続づけて痛いたむ足あし先さきを投なげ出だして、三みつ葉はは駅えきのベンチに座すわり込こんでいる。糸いと守もり町まちのそれに比べたらずいぶんと頼たよりない淡あわい夕ゆう陽ひを、ぼんやりと目めに映うつしている。音おん楽がくのようなチャイムが鳴なって、まもなく・四番ばん線せんに・各かく駅えき停てい車しゃ千ち葉ば行ゆきが……とアナウンスが流ながれはじめる。黄き色いろい電でん車しゃがホームに滑すべり込こんでくる。車しゃ体たいの巻まき起おこすぬるい風かぜが、髪かみをゆらす。見みるともなく、三みつ葉はは電でん車しゃの窓まどを眺ながめている。

ふと、息いきを呑のんだ。

弾はじかれるように、立たち上あがった。

今いま、目めの前まえを通とおり過すぎた窓まどに、彼かれがいた。

三みつ葉はは走はしり出だす。電でん車しゃは停てい車しゃし、その窓まどにはすぐに追おいつく。でも夕ゆう方がたの電でん車しゃは混こんでいて、外そとからは彼かれの姿すがたはなかなか見みつからない。巨きょ人じんが息いきを吐はくような音おとで、ドアが開ひらく。びっしりとこぼれ落おちそうな車しゃ内ないの人ひと混ごみに、三みつ葉ははおののく。でも、すみません、と咳つぶやきながら、膝ひざの後うしろに汗あせをかきながら、人ひとの間あいだに体からだを押おし込こんでいく。ふたたび巨きょ人じんの息いきが漏もれ、ドアが閉しまる。電でん車しゃが動うごき出だす。すみませんを繰くり返かえして、三みつ葉ははすこしづつ進すすむ。そして一人ひとりの少しょう年ねんの前まえで、立たち止どまる。周しゅう囲いの音おとがふいに消きえていく、そんな気きが、三みつ葉ははする。

目めの前まえには、三年ねん前まえの、まだ中ちゅう学がく生せいだった俺おれが立たっている。

* * *

自じ転てん車しゃでは、もうこれ以い上じょうは登のぼれない。

そう考かんがえたとたん、前ぜん輪りんが木きの根ねにとられてするりと滑すべった。

俺おれは反はん射しゃ的てきに近ちかくの幹みきを掴つかむ。体からだから離はなれた自じ転てん車しゃが斜しや面めんを落らっ下かし、三メートルほど下したの地じ面めんにぶつかって派は手でな音おとを立てる。ホイールがぐにゃりと曲まがっている。ごめん、テシガワラ。小ちいさく呟つぶやいて、俺おれは狭せまい山やま道みちを走はしり出だす。

どうして忘わすれていたんだろう。どうして今いままで思おもい出だせなかつたんだろう。

走はしりながら、内うち側がわから湧わき出でてくる記き憶おくに目めを凝こらす。

三みつ葉は。三年ねん前まえ、お前まえはあの日ひ、俺おれに　　。

* * *

たきくん。たきくん、瀧たきくん。

三みつ葉ははさっきから、口くちの中なかだけで俺おれの名な前まえをころがしている。目めの前まえにいるくせに一いっ向こうに気きづかないでいる俺おれに、どんな声こえで呼よびかければいいのか、どんな表ひょう情じょうをすればいいのか、泣なき出だしそうな真しん剣けんさで考かんがえ続つづけている。そして思おもい切きって、笑え顔があ

を作つくって、声こえに出だす。

「瀧たきくん」

中ちゅう学がく生せいの俺おれは、突とつ然ぜん名なを呼よばれたことに驚おどろいて顔かおを上あげる。俺おれたちの身しん長ちょうはまだ同おなじくらいだ。目めの前まえに、なんだか潤うるんで見みえる大おおきな瞳ひとみがある。

「え」

「あの、私わたし」

必ひっ死しの笑え顔がおでそう言ひって、三みつ葉はは自じ分ぶんを指ゆびさしてみせる。俺おれは戸と惑まどう。

「え？」

「……覚おぼえて、ない？」おずおずと、上うわ目め遣づかいになって、知しらない女おんなが俺おれにそう問とう。

「……誰だれ？　お前まえ」

三みつ葉はは小ちいさく悲ひ鳴めいのような息いきをあげる。みるみる赤あかくなっていく。目めを伏ふせ、消きえ入りりそうな声こえで言いう。

「あ……すみません……」

電でん車しゃが大おおきく揺ゆれる。乗じょう客きゃくはそれぞれにバランスをとるが、三みつ葉はだけが大おおきく揺ゆられて俺おれにぶつかる。鼻はな先さきに髪かみが触ふれ、シャンプーの匂においがかすかにする。すみません、とまた三みつ葉はは呟つぶやく。ヘンな女おんな、と中ちゅう学がく生せいの俺おれは思おもう。三みつ葉はは混こん乱らんした頭あたまで必ひっ死しに思おもう。でも、あなたは瀧たきくんなのに、どうして、と。どちらにとっても、気きまずい時じ間かんが流ながれる。

次つぎは・四よツ谷や。そうアナウンスが言いい、三みつ葉ははすこしホッとして、同どう時じにたまらなく悲かなしくなる。でも、もうこの場ば所しょにはいられない。ドアが開ひらき、何なん人にんかの降こう車しゃ客きゃくについて、三みつ葉はも歩あるき出だす。遠とおざか

り始はじめた背せ中なかを見みて、俺おれはふいに思おもう。このおかしな女おんなの子こは、もしかしたら、俺おれが知しるべき人ひとなのかもしれない。そんな説せつ明めいのつかない、でも強きょう烈れつな衝しよう動どうに突つき動うごかされ、あのさあ！ と俺おれは声こえを上あげている。

「あんたの名な前まえは……」

三みつ葉はは振ふり向むく。でも、降こう車しゃの人ひと波なみに押おされて離はなれていく。三みつ葉ははふいに、後うしろ髪がみを結ゆった組くみ紐ひもをほどく。そして俺おれに向むかって差さし出だし、叫さけぶ。

「みつは！」

俺おれは思おもわず手てを伸のばす。薄うす暗ぐらい電でん車しゃに細ほそく差さし込こんだ夕ゆう日ひみたいな、鮮あざやかなオレンジ色いろ。人ひと混ごみに体からだを突つっこんで、俺おれはその色いろを強つよく掴つかむ。

「名な前まえは、三みつ葉は！」

* * *

三年ねん前まえのあの日ひ。お前まえは俺おれに、会あいに来きたんだ。

俺おれはようやくそれを知しる。

電でん車しゃで知しらない女おんなに声こえをかけられただけの、俺おれにとってはすっかり忘わすれていた出で来き事ごとだった。でも、三みつ葉ははあれだけの想おもいを背せ負おって東とう京きょうに来きて、そして決けつ定てい的てきに傷きずつき、町まちに戻もどり、髪かみを切きったのだ。

胸むねが詰つまる。でももうどうしようもなくて、俺おれはただがむしゃらに走はしる。三お葉れの顔かおも体からだも、汗あせと土つちでどろどろに汚よごれている。いつの間にか樹じゅ木もくは途と切ぎ

れ、眼がん下かには金きん色いろの絨じゅう毯たんのような雲くもがひろがり、周しゅう囲いは苔こけだらけの岩いわ場ばだ。

頂ちょう上じょうに、ついに来きたのだ。

冷つめたい空くう気きを、俺おれは思おもいきり吸すう。そして、ぜんぶの想おもいを吐はき出だすように、ありったけの声こえで叫さけぶ。

「三みつ葉はぁー！」

声こえが、聞きこえた。

私わたしは顔かおを上あげる。立たち上あがって、あたりを見み回まわす。

ご神しん体たいの盆ぼん地ちをぐるりと取とり囲かこむ岩いわ場ばに、私わたしはいる。沈しずみかけの夕ゆう陽ひに、すべてのものの影かげが長ながく引ひき伸のばされている。世世界かいは光ひかりと影かげの二つにくっきりと塗ぬり分わけられている。でもその中なかに、人ひと影かげはどこにもない。

「……瀧たきくん？」

私わたしは呟つぶやいてみる。冷つめたい空くう気きを、大おおきく吸すい込こむ。そして瀧たきくんの喉のどで、叫さけぶ。

「瀧たきくーん！」

聞きこえた。

いる。三みつ葉ははここにいる。

俺おれは駆かけ出だす。斜しゃ面めんを登のぼり、盆ぼん地ちの縁ふちに駆かけ上あがる。

360度ど、ぐるりと見み渡わたすが人ひと影かげはない。でも、いるはずだ。強つよく感かんじる。俺おれは叫さけぶ。

「三みつ葉はぁ！　いるんだろう？　俺おれの体からだの中なかに！」

瀧たきくんだ！

私わたしは確かに信しんする。姿すがたの見みえない空そらに、大おお声ごえで問とう。

「瀧たきくん！　ねえ、どこ!?　声こえは聞きこえるのに！」

盆ぼん地ちの縁ふちを、私わたしは駆かけ出だす。

声こえが、声こえだけが聞きこえる。

この声こえが　俺おれの声こえが、三みつ葉はの声こえが、現げん実じつの空くう気きを震ふるわせているのか、それとも魂たましいのような部ぶ分ぶんにだけ響ひびいているのか、俺おれにはよく分わからぬ。俺おれたちは同おなじ場ば所しょにいても、三年ねんずれているはずだから。

「三みつ葉は、どこだ!?」

でも俺おれは叫さけぶ。叫さけばずにはいられない。盆ぼん地ちの縁ふちを全ぜん力りょくで走はしる。そうすれば

そうすれば瀧たきくんに追おい付ける。そんな妄もう想そうめいた気き持もちで、私わたしは走はしる。

あ！

思おもわず声こえに出だして、私わたしは立たち止どまる。

立たち止どまり、俺おれは慌あわてて振ふり返かえる。

いま、確たしかに、すれ違ちがった。

あたたかな気け配はいが目めの前まえにある。胸むねの中なかで心しん臓ぞうが跳はねている。

姿すがたは見みえないけれど、きっと瀧たきくんが、ここに、すぐそこに、いる。

どきどきと、心しん臓ぞうが高たか鳴なっている。

ここにいる。私わたしは手てを伸のばす。

ここにいる。俺おれは手てを伸のばす。

でも、指ゆび先さきはどこにも触ふれない。

「……三みつ葉は？」

返へん事じを待まつ。でも、誰だれも答こたえない。

やはり、だめなのか。会あえないのか。もう一いち度ど、俺おれは周しゅう囲いを見み渡わたす。山やまの上うえに一人ひとりだけで、俺おれは立たちつくしている。

俺おれは目めを伏ふせ途と方ほうに暮くれて、細ほそく長ながく、息いきを漏もらす。

そよ、と風かぜが吹ふき、髪かみがふわりと持もち上あがる。汗あせはすっかり乾かわいている。温おん度どが急きゅうに下さがった気きがして、俺おれは夕ゆう陽ひに目めをやる。太たい陽ようはいつの間まにか雲くもの後うしろに沈しずんでいる。直ちょく射しゃから解かい放ほうされて、光ひかりも影かげも溶とけ合あって、世世界かいの輪りん郭かくがぼんやりと柔やわらかくなっている。空そらはまだ輝かがやいていて、しかし地ち上じょうは淡あわい影かげにすっぽりと包つつまれている。ピンク色いろの間かん接せつ光こうが、周しゅう囲いに満みちている。

そうだ。こういう時じ間かん帯たいの、呼よび名ながあった。黄昏たそがれ。誰たそ彼かれ。彼かは誰たれ。人ひとの輪りん郭かくがぼやけて、この世よならざるものに出で逢あう時じ間かん。その古ふるい呼よ

び名な。俺おれは咳つぶやく。

カタワレ時どきだ。

声こえが、重かさなった。

まさか。

雲くもからゆっくりと目めを外はずして、俺おれは正しょう面めんを見みる。

そこには、三みつ葉はがいた。

まんまるに見み開ひらいた瞳ひとみで、ぽかんと口くちを開あけて、俺おれを見みている。

驚おどろきよりも、その間ま抜ぬけな表ひょう情じょうが愛いとおしくておかしくて、俺おれはゆっくりと笑え顔がおになる。

「三みつ葉は」

そう呼よびかけると、三みつ葉はの両りょう目めにみるみる涙なみだが盛もり上あがる。

「……瀧たきくん？ 瀧たきくん？ 瀧たきくん？ 瀧たきくん？」

ばかみたいに繰くり返かえしながら、三みつ葉はの両りょう手てが、俺おれの両りょう腕うでに触ふれる。ぎゅっと、その指ゆびに力ちからが入はいる。



「.....瀧たきくんがある.....！」

絞しばり出だすみたいにそう言ひて、ぼろぼろと大おお粒つぶの涙なみだをこぼす。

やっと逢あえた。本ほん当とうに逢あえた。三みつ葉はは三みつ葉はとして、俺おれは俺おれとして、自じ分ぶんの体からだで、俺おれたちには向むきあっている。俺おれは本ほん当とうにホッとする。言こと葉ばの通つうじない国くにに長ながくいて、今いまようやく故郷きょうに戻もどれたように、心しん底そこから安あん心しんする。穏おだやかな喜よろこびが体からだに満みちてくる。ただ泣なきじゃくる三みつ葉はに、俺おれは言いう。

「お前まえに、会あいに来きたんだ」

それにしても、こいつの涙なみだは小ちいさなビー玉だまみたいに透すきとあってころころしている。俺おれは笑わらって綴つづける。

「ホント、大たい変へんだったよ！　お前まえすげえ遠とおくにいるから」

そう、本ほん当とうに遠とおくに。場ば所しょも時じ間かんも違ちがうところに。

目めをぱちくりさせて、三みつ葉はは俺おれを見みる。

「え……でも、どうやって？　私わたし、あの時とき……」

「三みつ葉はの口くち噛かみ酒ざけを、飲のんだんだ」

ここまで苦く労ろうを思おもいながら俺おれがそう言いうと、三みつ葉はの涙なみだがぴたりと止とまる。

「え……」

絶ぜっ句くしている。まあそうだよな、それは感かん激げきしちゃうよな、うん。

「あ……あ……」

そろりそろりと、俺おれから離はなれていく三みつ葉は。ん？

「あ……、あれを飲のんだあ!?」

「え？」

「ばか！ ヘンタイ！」

「え、ええ!?」

顔かおを真まっ赤かにして、どうやら三みつ葉はは怒おこっている。いや、これって怒おこる流ながれか!?

「そうだ！ それにあんた、私わたしの胸むねさわったやろ!?」

「おま！」俺おれは思おもいきり動どう搖ようする。「ど、どうしてそれを……」

「四よつ葉はが見みとったんやからね！」両りょう手てを腰こしにやって、子こどもを叱しかりつけるように三みつ葉はが言いう。

「あああ、すまん、つい……」ちっ、あの幼よう女じょよけいなことを。手てのひらに汗あせがにじんでくる。なにか、なにか言いい訳わけしなければ。俺おれはとっさに言いう。

「一回かい、一回かいだけだって！」

言いい訳わけになってないじゃーん！ 俺おれのばか！

「……一回かいだけえ？ うーん……」

あれ？ 三みつ葉ははなにやら考かんがえ込こんでいる。一回かいだけなら許きょ容よう範はん囲いってこと？ 意い外がいにも乗のりきれそうだ。しかし三みつ葉はは訂てい正せいするように眉まゆをつり上あげる。

「……いや、何なん回かいでも同おなじや！ あほ！」

やっぱだめか。俺おれは觀かん念ねんし、ぱちんと両りょう手てを合あわせて「すまん！」と頭あたまを下さげる。本ほん当とうは毎まい回かい触さわっていたなんて、とても言いえない。

「あ、それ……」

ころりと表ひょう情じょうを変かえ、三みつ葉はが驚おどろいたように俺おれの右みぎ手てを指ゆびさす。俺おれは手て首くびを見みる。

「ああ、これ」

組くみ紐ひもだ。三年ねん前まえ、三みつ葉はから受うけ取とったもの。俺おれは紐ひもを留とめていた小ちいさな金かな具ぐを外はずし、くるくると手て首くびから巻まき取とりながら三みつ葉はに言いう。

「お前まえさあ、知しりあう前まえに会あいに来くるなよ……分わかるわけねえだろ」

外はずした紐ひもを、ほら、と三みつ葉はに手て渡わたす。あの時ときの電でん車しゃでの三みつ葉はの気き持もちを思おもい起おこし、優やさしい気き持もちになって俺おれは言いう。

「三年ねん、俺おれが持もってた。今こん度どは、三みつ葉はが持もつてて」

両りょう手てに持もった組くみ紐ひもから顔かおをあげ、

「うん！」と嬉うれしそうな笑え顔がおになって三みつ葉はが応こたえる。三みつ葉はが笑わらうと　今いまになって、俺おれは気きづく。世世界かいまでが、一いっ緒しょになって喜よろこんでるみたいだ。

三みつ葉はは自じ分ぶんの頭あたまにくるりと組くみ紐ひもを回まわす。カチューシャのように縦たてに巻まいて、左ひだり耳みみの上うえでちょうどちょ結むすびにする。

「どうかな？」頬ほおを染そめて、上うわ目め遣づかいで俺おれに訊きく。組くみ紐ひもがリボンのように、ボブの横よこで跳はねている。

「あー……」

あんま似に合あってねえな、と俺おれは思おもう。なんかちょっとガキっぽいっていうか。だいたい、そもそもこんなにばっさり髪かみを切ることなかつたんだ。勝かつ手てに来きて勝かつ手てにショックを受けやがって。俺おれは黒くろ髪かみロングが好すきだつーの。

ということを、俺おれは一いっ瞬しゅん考かんがえる。いやしかしこういう場ば合あいはとりあえず褒ほめるのが正せい解かいだと、さすがに俺おれも知しっている。三みつ葉はから送おくられてきた『人じん生せいで1ミリもモテたことがない君きみのための会かい話わ術じゅつ』にも、女おんなはとにかく褒ほめればOKと書かいてあつたし。

「……まあ、悪わるくないな」

「……なっ！」三みつ葉はの表ひょう情じょうがさっと曇くもる。あれ？

「あんた、似に合あっとらんって思おもってるでしょ！」

「ええ！」なんでバレるんだ!?

「は、はは……すまん」

「もう……この男おとこは！」

心しん底そこ呆あきれたという顔かおで、ふいと横よこを向むいてしまう。なんだこれ。女じょ子しとの会かい話わって無む理りゲーじゃん……。

と、ふっと三みつ葉はは吹ふき出だす。お腹なかを抱かかえ、くすぐすと笑わらい出だす。なんなんだこいつは、泣ないたり怒おこったり笑わらったり。その姿すがたを見みているとしかし、俺おれの胸むねにもおかしさが込こみ上あげてくる。俺おれはうつむいて片かた手てを顔かおに当あて、くっくっと笑わらい出だす。三みつ葉はも笑わらっている。なんだか楽たのしくなってくる。俺おれたちはそろって大おおきな声こえで笑わらう。柔やわらかく輝かがやくカタワレ時どきの世世界かい、その端はじっこで、俺おれたちは小ちいさな子こどものように笑わらい続つづける。

すこしづつ、気き温おんが下さがっていく。すこしづつ、光ひかりが褪あせていく。

「なあ三みつ葉は」

放ほう課か後ごにさんざん遊あそんで、まだまだずっと一いっ緒しょにいたいのに、そろそろ家いえに帰かえらなければならない。子こどもの頃ころのそんな気き持もちをふと思おもい出だしながら、俺おれは三みつ葉はに言いう。

「まだ、やることがある。聞きいて」

テシガワラとサヤちゃんとの計けい画かくを、俺おれは説せつ明めいす

る。真しん剣けんにうなずきながら俺おれの話はなしを聞きく三みつ葉はを見みて、こいつは覚おぼえているんだと俺おれは悟さとる。星ほしが落おち、町まちが消きえたことを。その時ときに、自じ分ぶんが一いち度ど死しんだことを。三みつ葉はにとって、今こん夜やは再さい演えんの夜よるなのだ。

「来きた……」

三みつ葉はが空そらを見みて、かすかに震ふるえた声こえで呴つぶやく。視し線せんを追おうと、濃のう紺こんに染そまりつつある西にしの空そらに、長ながく尾おを引ひくティアマト彗すい星せいの姿すがたがうっすらと浮うかびはじめている。

「大だい丈じょう夫ぶ、まだ間まに合あう」俺おれは自じ分ぶんに言い聞きかせるように、強つよく言いう。

「うん、やってみる。……あ、カタワレ時どきが、もう……」

そう喋しゃべる三みつ葉はも、いつの間にか淡あわい影かげ色いろになっている。

「もう、終おわる」俺おれも言いう。空そらからは、夕ゆう陽ひの名残なごりがほとんど消えつつある。もうすぐ夜よるが来くる。ふいに湧わきあがってきた不ふ安あんを押おし込こむように、なあ三みつ葉は、と笑え顔がおを作つくって明あかるく言いう。

「目めが覚さめてもお互たがい忘わすれないようにさ」俺おれはポケットからサインペンを取とり出だす。三みつ葉はの右みぎ手てを掴つかみ、手てのひらにペンで文も字じを書かきつける。

「名な前まえ書かいておこうぜ。ほら」

そう言ひって、今こん度どは三みつ葉はの手てにペンを持もたせる。

「……うん！」

花はなが咲さくみたいに、三みつ葉はがぱっと笑え顔がおになる。俺おれの右みぎ手てを持もち、ペン先さきをつける。

かつん。

足あし元もとで、硬かたく小ちいさな音おとがした。

下したを見みると、ペンが地じ面めんに落おちている。

「え？」俺おれは顔かおを上あげる。

目めの前まえには、誰だれもいない。

「え……？」

周しゅう囲いを見み回まわす。

「三みつ葉は？　おい、三みつ葉は？」

俺おれは声こえを上あげる。返へん事じはない。慌あわてて周しゅう囲いを歩あるき回まわる。景色けしきは青あお黒ぐろい闇やみに沈しずんでいる。眼がん下かには暗くらいのっぺりした雲くもがあり、その下したの闇やみの中なかに、ひょうたん型がたの糸いと守もり湖こがぼんやりと見みえている。

三みつ葉はは消きえた。

夜よるが来きたのだ。

三年ねん後ごの自じ分ぶんの体からだに、俺おれは戻もどっている。

俺おれは右みぎ手てを見みる。手て首くびの組くみ紐ひもは、もうない。手てのひらには、書かきかけの細ほそい線せんが一本ぽんだけ短みじかく引ひかれている。その線せんに、そっと触ふれてみる。

「……言いおうと思おもったんだ」

俺おれはその線せんに向むかって、小ちいさく独ひとりごちる。

「お前まえが世せ界かいのどこにいても、俺おれが必かならず、もう一いち度ど逢あいに行いくって」

空そらを見み上あげる。彗すい星せいの姿すがたはどこにもなく、いくつか星ほしが瞬またたきはじめている。

「君きみの名な前まえは、三みつ葉は」

記き憶おくを確かく認にんするように、確たしかなものにするよう^に、俺おれは目めをつむる。

「……大だい丈じょう夫ぶ、覚おぼえてる！」

自じ信しんを深ふかめて、目めを開ひらく。白しろい半はん月げつが遠とおい空そらにある。

「三みつ葉は、三みつ葉は……。三みつ葉は、みつは、みつは。名な前まえはみつは！」

半はん月げつに彼女かのじょの名なを、俺おれは叫さけんでいる。

「君きみの名な前まえは……！」

ふいに、言いおうとした言こと葉ばの輪りん郭かくが、ぼやける。

俺おれは慌あわててペンを拾ひろう。名な前まえの最さい初しょの一ひと文も字じを、手てのひらに書かく。書かこうとする。

「……！」

でも線せん一本ぽんを引ひいたところで、俺おれの手ては止とまってしまう。ペン先さきが震ふるえはじめる。それを止とめたくて、俺おれは思おもいきり力ちからを込こめる。針はりのように突つき刺さして、消きえない名な前まえを刻きざもうとする。でも、ペン先さきはもう1ミリも動うごかない。そして俺おれの口くちが、言いう。

「……お前まえは、誰だれだ？」

俺おれの手てから、ペンが落おちる。

消きえていく。君きみの名な前まえが。君きみの記き憶おくが。

「……俺おれは、どうしてここに来きた？」

俺おれはそれをどうにか繋つなぎとめたくて、記き憶おくのかけらをなんとか書き集あつめたくて、声こえに出だす。

「あいつに……あいつに逢あうために来きた！ 助たすけるために来きた！ 生いきていて欲ほしかった！」

消きえていく。あんなにも大たい切せつだったものが、消きていく。

「誰だれだ？ 誰だれだ、誰だれだ、誰だれだ……？」

こぼれ落おちていく。あったはずの感かん情じょうまでが、なくなつていく。

「大だい事じな人ひと、忘わすれちゃだめな人ひと、忘わすれたくなかった人ひと！」

悲かなしさも愛いとおしさも、すべて等ひとしく消きえていく。なぜ自じ分ぶんが泣ないているのかも、俺おれはもう分わからない。砂すな城しろを崩くずすように、感かん情じょうがさらさらと消きえていく。

「誰だれだ、誰だれだ、誰だれだ……」

砂すなが崩くずれた後あとに、しかし一つだけ消きえない塊かたまりがある。これは寂さびしさだと、俺おれは知しる。その瞬しゅん間かんに俺おれには分わかる。この先さきの俺おれに残のこるのは、この感かん情じょうだけなのだと。誰だれかに無む理り矢や理り持もたされた荷に物もつのように、寂さびしさだけを俺おれは抱かかえるのだと。

いいだろう。ふと俺おれは、強つよくつよく思おもう。世世界かいがこれほどまでに酷ひどい場ば所しょならば、俺おれはこの寂さびしさだけを携たずさて、それでも全ぜん身しん全ぜん霊れいで生いき続つづけてみせる。この感かん情じょうだけでもがき続つづけてみせる。ばらばらでも、もう二に度どと逢あえなくても、俺おれはもがくのだ。納なつ得とくなんて一いっ生しょう絶ぜつ対たいにしてやるもんか神かみさまにけんかを売うるような気き持もちで、俺おれはひととき、強つよくつよくそう思おもう。自じ分ぶんが忘わすれたという現げん象しようそのものも、俺おれはもうすぐ忘わすれてしまう。だから、この感かん情じょう一つだけを足あし場ばにして、俺おれは最さい後ごにもう一いち度どだけ、大おお声ごえで夜よ空ぞらに叫さけぶ。

「君きみの、名な前まえは？」

その声こえは、こだまとなって夜よるの山やまに響ひびく。虚こ空くうに繰くり返かえし問といかけながら、すこしづつ小ちいさくなつていく。

やがて、無む音おんが降おりてくる。

第七章

うつくしく、もがく

私わたしは走はしる。

暗くらい獣けもの道みちを、彼かれの名な前まえを繰くり返かえしながら、ひたすらに走はしる。

瀧たきくん、瀧たきくん、瀧たきくん。

大だい丈じょう夫ぶ、覚おぼえてる。ぜったいに忘わすれない。

やがて木き々ぎの隙すき間に、糸いと守もり町まちの明あかりがちらちらと見みえはじめる。風かぜに乗のった祭まつりばやしが、かすかに切きれぎれに耳みみに届とどきはじめる。

瀧たきくん、瀧たきくん、瀧たきくん。

空そらを見み上あげると、長ながく尾おを引ひくティアマト彗すい星せいが月つきよりも明あかるく輝かがやいている。すぐみそうになる恐きょう怖ふを、私わたしは彼かれの名な前まえを叫さけんで、ぎゅっと押おし込こむ。

君きみの名な前まえは、瀧たきくん！

原げん付つきバイクの音おとに顔かおを上あげると、坂さかを登のぼってきたヘッドライトが目めを射うつた。

「テッシー！」私わたしは声こえを上あげて原げん付つきに駆かけ寄よる。

「三みつ葉は！　お前まえ、今までどこにおったんや!?」

叱しかりつけるような声こえ。とても説せつ明めいできない。学がくラン姿すがたで袖そでをまくり上あげ、まるで洞どう窟くつ探たん検けんみたいな大おおきなライト付つきヘルメットをかぶったテッシーに、私わたしは瀧たきくんからの言こと葉ばを伝つたえる。

「自じ転てん車しゃ壊こわしちゃって、ごめんやって」

「はあ？　誰だれが？」

「私わたしが！」

テッサーは眉まゆをひそめ、でも無む言ごんのまま原げん付つきのエンジンを切きりヘルメットのライトを点つけた。駆かけ出だしながら、「あとで全ぜん部ぶ説せつ明めいしてもらうでな！」と荒あららげた声こえを出だす。

糸いと守もり変へん電でん所しょ・社しゃ有ゆう地ちにつき立たち入りり禁きん止し。金かな網あみにはそう記しるされたプレートがかかけられていて、その向むこうには変へん圧あつ器きや鉄てつ塔とうが複ふく雑ざつなシルエットを形かたち作づくっている。無む人じんの施し設せつで、明あかりは機き械かいに取とり付つけられた赤あかいランプがぽつりぽつりと見みえるだけだ。

「落おちるんか？ あれが。マジで!?」

空そらを見み上あげて、テッサーが私わたしにそう訊きく。私わたしちは変へん電でん所しょの金かな網あみの前まえで、ぎらぎらと輝かがやく彗すい星せいを見みつめている。

「落おちる！ この目めで見みたの！」

私わたしはテッサーの目めをまっすぐに見みて言いう。落らっ下かまあと二時じ間かん。説せつ明めいしている時じ間かんなんてない。テッサーは一いっ瞬しゅんの怪け訝げんな表ひょう情じょうのあとで、「はっ！」と鋭するどく息いきをはき、ニヤリと笑わらった。なんだかヤケクソにふりしぶったような笑え顔がお。

「見みたってか！ じゃあ、やるしかないなあ！」

そう言いってテッサーが勢いきおいよくスポーツバッグを開あけると、茶ちゃ色いろい紙かみに包つつまれたリレーのバトンのような筒つつが、そこにはぎっしりと詰つまっていた。含がん水すい爆ばく薬やく。私わたしはごくりとつばを飲のむ。テッサーは大おおきなボルトカッターを取り出だし、変へん電でん所しょの入いり口ぐちにぐるぐると巻まかれた鎖くさりにカッターの刃はをあて、三みつ葉は、と言いう。

「これ以い上じょうやったら、いたずらじや通とおらんぞ」

「お願ねがい。責せき任にんはぜんぶ、私わたしにあるで」

「あほか！ そんなこと訊きいてんじゃねえわ」

怒おこったようにそう言ひて、テッシーはなぜかちょっと赤あかくなる。

「これで、二人ふたり仲なか良よく犯はん罪ざい者しゃや！」

暗くら闇やみを破やぶくみたいに、鎖くさりが切せつ断だんされる音おとが大おおきく響ひびく。

「町まちが停てい電でんしたら、学がっ校こうはすぐに非ひ常じょう用よう電でん源げんに切り替かわるはずやから！ そしたら放ほう送そう機き器きも使つかえるで！」

スマフォに向むかって、テッシーが叫さけんでいる。テッシーは原げん付つきを運うん転てんしていて、私わたしは後うしろからテッシーの口くちにスマフォを当あてている。すれ違ちがう車くるまはほとんどなく、夜よるの県けん道どう沿ぞいにはちらほらと民みん家かの明あかりが見みえはじめている。そして私わたしたちが向むかう先さきに、山やまの斜しゃ面めんを挟はさんで光ひかりが密みつ集しゅうした一いつ画かくがある。秋あき祭まつりの会かい場じょう、宮みや水みず神じん社じやだ。長ながく留る守すにしていた故ご郷きょうにようやく戻もどってきたような奇き妙みょうな懐なつかしさを、私わたしはふいに感かんじる。

「三みつ葉は、サヤちんが代かわってくれやと」

「もしもし、サヤちん！」私わたしはスマフォを自じ分ぶんの耳みみに当あてる。

「え～ん、三みつ葉はあ～！」

サヤちんは涙なみだ声ごえだ。

「ねえちょっと、私わたし、ほんとにやらないかんのぉ!?」

不ふ安あんげな声こえに、ずきんと胸むねが痛いたむ。私わたしだつて、サヤちんの立たち場ばだったら泣ないちゃっていると思おもう。夜よるの放ほう送そう室しつに一人ひとりで忍しのび込こんでくれただけ

でも、友ゆう情じょうがなければ絶ぜつ対たいに出て来きっこない。

「サヤちんごめん、でも、お願ねがいやから！」

今いまの私わたしには、これしか言いえない。

「一いっ生しょうのお願ねがいやから！ 私わたしたちがこれをしないと、たくさんの人ひとが死しぬんよ！ 放ほう送そうを始はじめたら、できるだけ長ながく繰くり返かえして！」

返へん事じがない。受じゅ話わ器きからくぐもって聞きこえるのは、鼻はなをすする小ちいさな音おとだけ。

「サヤちん？ ねえ、サヤちん！」

私わたしは不ふ安あんになる。ふいに、よしっ、という声こえが小ちいさく聞きこえる。

「ええい、もうヤケや！ テッシーに、あんたもおごれって言いつといで！」

「サヤちん、なんやって？」

私わたしはスマフォをスカートのポケットにしまいながら、原げん付つきのエンジン音おんに負まけないように、大おお声ごえでテッシーに答こたえる。

「あんたもおごれやって」

「おっしゃあ、やったれやあ！」

なにかを上うわ書がきするような勢いきおいでテッシーが叫さけんだ瞬しゅん間かん、花はな火びの大おお玉だまが破は裂れつしたような音おとが、背せ中なかで響ひびいた。

原げん付つきを停とめ、私わたしたちは振ふり返かえる。二つ、三つ。また一つ。破は裂れつ音おんが連れん続ぞくして響ひびき、さっきまで私わたしたちがいた山やまの中ちゅう腹ふくから、太ふと黒こく煙えんが立たちのぼりはじめる。巨きょ大だいな送そう電でん塔とうが、スローモーションみたいに傾かたむいていく。

「テッシー……！」

私わたしの声こえが、震ふるえている。

「ははっ！」

笑わらいに聞きこえるテッシーの息いきも、震ふるえている。

と、ひとりわ大おおきな爆ばく発はつ音おんがして、町まち中じゅうの明あかりが、ふいに消きえた。

おい、と、なんだかぼんやりした声こえでテッシーが言いう。停てい電でんやね、と、そのまんまを私わたしは返かえす。

やったのだ。私わたしたちが。

突とつ然ぜん、湧わきあがるようにしてサイレンが鳴なりはじめた。

ウウウウウウウウウウ……………！

町まち中じゅうのスピーカーから、耳みみをつんざく暴ぼう力りょく的てきな音おん量りょうでそれは響ひびく。巨きよ人じんの悲ひ鳴めいのようなその不ふ吉きつな音おとは、山やま々やまに反はん響きょうしてぐるぐると町まちを取とり囲かこんでいく。

サヤちんだ。防ぼう災さい無む線せんを、乗のっ取とったんだ。

私わたしたちは無む言ごんでうなずきあって、また原げん付つきにまたがる。神じん社じやに向むかって走はしり出だすと、まるで私わたしたちを後あと押おしするみたいにサヤちんの声こえがスピーカーから流ながれはじめる。作さく戦せん通どおりの文ぶん面めんを、さっきまでの涙なみだ声ごえが嘘うそみたいに、落おちついた調ちょう子しでゆっくりとサヤちんは喋しゃべる。

『こちらは、町まち役やく場ばです。糸いと守もり変へん電でん所しよで、爆ばく発はつ事じ故こが発はつ生せいしました。さらなる爆ばく発はつと、山やま火か事じの危き険けん性せいがあります』

テッシーの原げん付つきは県けん道どうを逸それ、細ほそい山やま道

みちを登のぼっていく。神じん社じやに続つづく女おんな坂ざかで、この道みちからならば参さん道どうの石いし階かい段だんを登のぼらなくとも原げん付つきで本ほん殿でんの裏うらまで辿たどりつける。がたがたと揺ゆれる座ざ席せきでテッシーの背せ中なかにしがみつきながら、町まち中じゅうに響ひびいているサヤちゃんの声こえを私わたしは聞きいている。お姉ねえちゃんの声こえにそっくりで、役やく場ばの放ほう送そうじゃないなんて疑うたがう人ひとはきっと誰だれもいないだろう。



『次つぎの地ち域いきの人ひとは、いますぐ、糸いと守もり高こう校こうまで避ひ難なんしてください。門かど入いり地ち区く、坂さか上上がり地ち区く、宮みや守もり地ち区く、親おや沢ざわ地ち区く……』

「いよいよや。いくぞ三みつ葉は！」

「うん！」私わたしたちは原げん付つきから飛とび降おりる。神じん社じやの裏うら山やま、その斜しや面めんに据すえ付つけられた木もく製せいの階かい段だんを駆かけ下おりていく。木き々ぎの間あいだからは、境けい内だいにずらりと並ならんだ屋や台たいの屋や根ね、その間あいだを右う往おう左さ往おうする人ひと々びとの姿すがたが、まるで暗くらい水すい槽そうに詰つめ込こみすぎた魚さかなみたいに見みえている。駆かけながら、私わたしたちはヘルメットを脱ぬぎ捨てる。

『繰くり返かえします。こちらは、糸いと守もり町まち役やく場ばです。糸いと守もり変へん電でん所しょで、爆ばく発はつ事じ故こが発はっ生せいしました。さらなる爆ばく発はつと、山やま火か事じの危き険けん性せいがあります……』

階かい段だんを下おりきると、そこは本ほん殿でんの裏うら手てだ。すぐそこには祭まつり会かい場じょうに集あつまた人ひと々びとのシリエット、不ふ安あんそうなざわめき。私わたしとテッシーは競きそうように、その中なかに駆かけ込こむ。走はしりながら叫さけぶ。

「逃にげろー！　山やま火か事じになっとる、ここは危き険けんやあ！」

テッシーの声こえは、まるでメガホンを通とおしたみたいにばかでかい。私わたしも負まけないように大おお声ごえを張はり上あげる。逃にげてください、山やま火か事じです、逃にげてください！　そして境けい内だいのどまんなかに私わたしたちは躍おどり出でる。

「ええ、ほんとに山やま火か事じやって！」「なあ逃にげようよ」「高こう校こうまで歩あるくの？」

もともと防ぼう災さい無む線せんで出で来きていた避ひ難なんの流ながれが、私わたしたちの大あお声ごえで後あと押おしされていく。浴衣ゆかた姿すがたの男だん女じょ、子こどもたち、孫まごと手てをつないだお年とし寄よりが、出で口ぐちの鳥とり居いに向むかってぞろぞろと歩あるいていく。私わたしはほっとする。これならば、きっと間まに合あう。あの人ひとのおかげで　　。……あの人ひと？

「三みつ葉は！」

鋭するどく名な前まえを呼よばれて、私わたしはテッシーを見み上あげる。

「こりゃヤベえぞ！」

テッシーの視し線せんを追おってあたりをよく見みると、屋や台たいの脇わきにのんびりと座すわり込こんでいる人ひとや立たち話ばなしをしている人ひとたちが、たくさんいる。煙草たばこを吸すったりお酒さけを飲のんだり、楽たのしそうに談だん笑しようすらしている。

「山やま火か事じがマジで迫せまりでもしんと、こいつら全ぜん員いんはとても動うごかせん！　消しょう防ぼうを出だしてもらって、避ひ難なん誘ゆう導どうせにや。お前まえ、役やく場ばに行いって今こん度どこそ町ちょう長ちょうを……」

テッシーの焦あせった声こえがすぐ頭あたまの上うえから、でも、やけに遠とおく聞きこえる。……あの人ひと？

「おい、三みつ葉は……どうした？」

「……テッシー、ねえ、どうしよう……？」

なにも考かんがえることができず、私わたしは気きづけばテッシーに訴うったえている。

「あの人ひとの名な前まえが……思おもい出だせんの！」

テッシーの顔かおが、心しん配ぱいげに歪ゆがむ。と、突とつ然ぜん、

「知しるか、あほう！」と怒ど鳴なりつけられた。

「周まわりを見みろや！　これはぜんぶ、お前まえが始はじめしたこと

や！」心しん底そこ腹はらが立たつ、という顔かおでテッシーが私わたしをにらんでいる。いますぐ、糸いと守もり高こう校こうまで避ひ難なんしてください　スピーカーからそう繰くり返かえすサヤちゃんの声こえが、泣なき出だしそうに震ふるえていることに今いまさら私わたしは気きづく。三みつ葉は、行いけよ！　と今こん度どは懇こん願がんするように、テッシーが悲ひ痛つうに叫さけぶ。「行ひって、オヤジさんを説せつ得とくしてこい！」

頬ほおを張はられたように、私わたしの背せ筋すじが伸のびる。

「……うん！」

精せい一いっ杯ぱいの強つよさで私わたしはうなずき、振ふり切くるように、駆かけ出だす。背せ中なかでテッシーの叫さけび声ごえがふたたび聞きこえる。「逃にげろってば、高こう校こうまで行いくんや！」町まち中じゅうにサヤちゃんの声こえがこだましている。「山やま火か事じの危き険けん性せいがあります。糸いと守もり高こう校こうまで避ひ難なんしてください」私わたしは人ひとの流ながれをかきわけて、鳥とり居いをくぐって参さん道どうの石いし段だんを駆かけ下おりる。

これはぜんぶお前まえが始はじめしたことや、テッシーはそう言いった。そうだ、これは私わたしが、私たちが始はじめしたことだ。私わたしは走はしりながら、頭ず上じょうの彗すい星せいを睨にらみつける。地ち上じょうの明あかりが消きえたぶん、彗すい星せいはますます明あかるい。雲くもの上うえに長ながく尾おをたなびかせて、巨きょ大だいな蛾がのように輝かがやく鱗りん粉ぷんをふりまいている。あんたの思おもい通どおりになんかなるもんか、と挑いどむように思おもう。大だい丈じょう夫ぶ、まだ間に合あう　誰だれかに強つよく言いわれたその言こと葉ばを、私わたしは口くちの中なかで繰くり返かえす。

* * *

それは秋あきのはじめで、俺おれはまだ、中ちゅう学がく生せいだった。

父とうさんと二人ふたりきりの生せい活かつにもやっと慣なれてきた頃ころで、二人ふたりで苦く労ろうして作つくったわりにはさほど美味

うまくもなかった夕ゆう食しょくを終おえ、父とうさんはビールを、俺おれはりんごを食たべながらお茶ちやを飲のんでいた。

その日ひのテレビは、彗すい星せいの最さい接せつ近きんのニュースで持もちきりだった。俺おれは星ほしにも宇う宙ちゅうにも特とく段だんの興きょう味みなんかなかったけれど、千二百年ねん周しゅう期きて太たい陽ようを回まわっているとか、軌き道どう長ちょう半はん径けいが百六十八億おくkm以い上じょうとか、そういう人にん間げんとはぜんぜん違ちがうスケールの現げん象しようが実じつはこの世せ界かいにはありふれているのだということは、なんだかすげえと思おもっていた。ばかみたいな感かん想そうだけれど、ぞくぞくするくらいにすごくて、同どう時じに心しん臓ぞうが震ふるえるくらいに怖こわいと、俺おれは思おもっていた。

『ご覧らんください！』

突とつ然ぜんに興こう奮ふんした声こえで、実じっ況きょう中ちゅうのアナウンサーが叫さけんだ。

『彗すい星せいが二つに分ぶん裂れつしたように見みえます。その周しゅう囲いには……無む数すうの流れゅう星せいが発はっ生せいしているようです』

カメラがズームすると、東とう京きょうの高こう層そうビルを背はい景けいに、たしかに彗すい星せいが二ふた股またに分わかれているように見みえた。流れゅう星せい群ぐんのような細ほそい筋すじが、彗すい星せいの先せん端たんに現あらわれては消きえている。それは作つくりものめいた精せい巧こうな美うつくしさで、俺おれは思おもわず目めを見み張はったのだった。

* * *

防ぼう災さい無む線せんの放ほう送そうに、突とつ然ぜん、ガチャリ、と扉とびらが開ひらく音おとが混まじった。

きやつ、とサヤちゃんの短みじかい悲ひ鳴めいが聞きこえ、続つづいて聞きき覚おぼえのある男だん性せい何なん人にんかの声こえがスピー

カーから流ながれた。

『お前まえ、なにしとるんや！』『早はやく切きりなさい！』

ガタガタと椅い子すが倒たおれるような音おとがあり、それからキイント短みじかいハウリングを残のこして、防ぼう災さい無む線せんはぶつりと途と切ぎれた。

「サヤちん……！」私わたしは立たち止どまり、思おもわず声こえを上げた。

先せん生せいに、見みつかったんだ。大おお粒つぶの汗あせが思おもい出だしたみたいに噴ふき出だして、ばたばたと音おとを立たてアスファルトに落おちる。ここは湖みずうみをぐるりと囲かこむ県けん道どうで、役やく場ばや高こう校こうに続つづく道みちだ。高こう校こうに避ひ難なんしようとしていた何なん人にんかの姿すがたから、戸と惑まどった声こえが聞きこえてくる。「なんや、どういうことや？」「え、なんかトラブル？」「避ひ難なん、どうすんの？」

まずい、と思おもったとたん、防ぼう災さい無む線せんからふたたび声こえが流ながれた。

『こちらは、糸いと守もり町まち役やく場ばです』

サヤちんでも、サヤちんお姉ねえさんでもない。これも時とき々どき聞きいたことのある、役やく場ばの放ほう送そう担たん当とうのおじさんだ。

『ただいま、事じ故こ状じょう況きょうを確かく認にんしています。町ちょう民みんの皆みなさまは、慌あわてず、その場ばで待たい機きして、指し示じをお待まちください』

弾はじかれるように、私わたしはまた駆かけ出だす。

無む線せんの発はっ信しん元もとがバレて、役やく場ばから学がっ校こうに連れん絡らくが行いったんだ。サヤちんが先せん生せいたちに問とい詰つめられちゃう。テッシーだって、これじゃピンチだ。

『繰くり返かえします。慌あわてず、その場ばで待たい機きして、指し示じをお待まちください』

待たい機きじゃだめだよ！ こんな放ほう送そう、やめさせなく

ちゃ！

私わたしは県けん道どうから逸それて、アスファルトの隙すき間まからやぶの茂しげった斜しや面めんに突つっこんでいく。役やく場ばへの近ちか道みち。茂しげみの棘とげが生なま足あしをこすって、ずきずきと痛いたみが走はしる。蜘蛛の巣すが顔かおに貼はりつき、得え体たいの知しれない羽は虫むしが口くちに入はいる。

ようやく斜しや面めんを下くだりきり、私わたしはふたたびアスファルトに駆かけ出でる。周しゅう囲いには誰だれの姿すがたも見みあたらず、防ぼう災さい無む線せんの声こえだけがその場ばでの待たい機きを伝つたえ続つづけている。私わたしは走はしりながら口くちに溜たまつたつばを吐はき、汗あせと涙なみだと蜘蛛の糸いとでベタつく顔かおを袖そでできゅっとぬぐう。もう脚あしに力ちからが入はいらず、私わたしはふらついている。それでも走はしる。下くだり坂ざかで、スピードは落おちない。緩ゆるいカーブで、体からだがガードレールに近ちかづいていく。その下したは湖みずうみにつながる斜しや面めんだ。

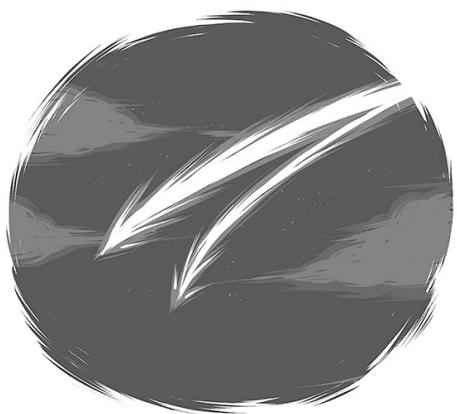
「……え!?」

違い和わ感かんにふと目めを向むける。湖みずうみが、淡あわく光ひかっている。私わたしは走はしったまま目めを凝こらす。

違ちがう、水みずが光ひかってるんじゃなくて、邱ないだ水すい面めんが空そらを映うつしてるんだ。まるで鏡かがみのように、湖みずうみには二本ほんの光ひかる尾おが映うつり込こんでいる。……二本ほん？ 私わたしは空そらを見み上あげる。

ああ、とうとう彗すい星せいが、

「……割われとる！」



*

*

*

俺おれはテレビのチャンネルを次つぎ々つぎと切り替かえる。どの局きょくでも、突とつ如じよ発はっ生せいした予よ想そう外がいの天てん体たいショーを、興こう奮ふんした口くちぶりで伝つたえている。

『たしかに、彗すい星せいが二つに分ぶん裂れつしています』

『これは事じ前ぜんの予よ想そうにはありませんでしたね』

『しかし、これは非ひ常じょうに幻げん想そう的てきな眺ながめです……』

『彗すい星せいの核かくが割われた、と断だん定ていして良よいのでしょうか』

『潮ちょう汐せき力りょく、ロシュ限げん界かいは超こえていないはずですから、考かんがえられるのは彗すい星せい内ない部ぶでなんらかの異い変へんが発はっ生せいし』

『まだ国こく立りつ天てん文もん台だいからの発はっ表ぴょうはありますかが……』

『似にたような事じ例れいでは一九九四年ねんのシーメーカー・レビ彗すい星せいが木もく星せいに落らっ下か、その際さいにはすくなくとも二十一個この破は片へんに分ぶん裂れつしたことが……』

『危き険けん性せいはないんでしょうか？』

『彗すい星せいは氷こおりの塊かたまりですから、おそらく地ち表ひょうに到とう達たつする前まえに融ゆう解かいしてしまうと思おもわれます。また仮かりにこれが隕いん石せきとなつた場ば合あいでも、確かく率りつ的てきには人にん間げんの居きよ住じゅう地ち域いきに落らっ下かする可か能のう性せいは非ひ常じょうに低ひくく……』

『リアルタイムでの破は片へんの軌き道どう予よ測そくは困こん難なんですか』

『これほど壯そう麗れいな天てん体たい現げん象しようを目もく撃げき

していること、また、日に本ほんがちょうど夜よるの時じ間かん帯たいであることは、この時じ代だいに生いきる私わたしたちにとってまさに千年ねんに一度どの幸こう運うんと言ひえるのではないでしょか

』

「俺おれ、ちょっと見みてくる！」

思おもわず椅い子すから立たち上あがり、父とうさんにそう言ひってマンションの階かい段だんを駆かけ下おりた。

近きん所じょの高たか台だいで、夜よ空ぞらを見み上あげた。

無む数すうのきらめく光ひかりが　まるで空そらにもうひとつの東とう京きょうが覆おおい被かぶさったように、そこにはあった。それは夢ゆめの景色けしきのように、ただひたすらに、美うつくしい眺ながめだった。

*

*

*

二つに割われた彗すい星せいが、停てい電でんの町まちを迷まい子ごのように一人ひとりで走はしっている私わたしの寂さびしさを、くっつきと浮うかび上あがらせる。

誰だれ、誰だれ。あの人ひとは誰だれ？

彗すい星せいから目めを離はなせぬまま、落おち続つづけるように走はしり続つづけながら、私わたしは必ひつ死しに考かんがえる。

大だい事じな人ひと。忘わすれちゃだめな人ひと。忘わすれたくなかった人ひと。

町まち役やく場ばまでは、あとすこし。あの彗すい星せいが隕いん石

せきとなって落おちてくるまで、あとすこし。

誰だれ、誰だれ。きみは誰だれ？

最さい後ごの力ちからをふりしぶる。私わたしはスピードを上あげる。

君きみの、名な前まえは？

きやつ！ と、思おもわず声こえが出でた。

爪つま先さきがアスファルトのくぼみにはまり、転ころぶ、と思おもった瞬しゅん間かんには、もう地じ面めんが目めの先さきにあった。顔かおをぶたれる衝しよう撃げきがあり、体からだがぐにやりと回かい転てんし、突つき刺さすような痛いたみが広ひろがり、視し界かいが回まわり、そして意い識しきが、途と切ぎれた。

.....

.....

.....でも。

君きみの声こえは、耳みみに届とどく。

「目めが覚さめてもお互たがい忘わすれないようにさ」

あの時とき君きみはそう言いって、

「名な前まえ書かいておこうぜ」

私わたしの手てに書かいたんだ。

倒たおれたまま、私わたしは目めを開ひらく。

ずきんずきんとにじむ視し界かいに、私わたしの握にぎった右みぎ手てがある。指ゆびを開ひらく。開ひらこうとする。でも、硬かたくこわ

ばっている。それでもすこしずつ、私わたしは指ゆびを開ひらいていく。

なにか、文も字じがある。目めを凝こらす。

すきだ

息いきが、一いつ瞬しゅんとまる。私わたしは立たち上あがろうとする。力ちからがうまく入はいらなくて、長ながい時じ間かんがかかる。それでも私わたしの二本ほんの脚あしは、もう一いち度どアスファルトに立たつ。そしてもう一いち度ど、手てのひらを見みる。いつか見みたことのある懐なつかしい筆ひつ跡せきで、すきだ、とだけ書かかれている。

……これじゃあ、と私わたしは思おもう。涙なみだが溢あふれて、視し界かいがまたにじむ。涙なみだと一いつ緒しょにまるで湧わき水みずみたいに、あたたかな波なみのようなものが体からだ中じゅうに広ひろがっていく。私わたしは泣なきながら笑わらって、君きみに言いう。

これじゃあ、名な前まえ、分わかんないよ　。

そしてもう一いち度ど、全ぜん力りょくで、走はしり出だす。

もうなにも怖こわくない。もう誰だれも恐おそれない。もう私わたしは寂さびしくない。

やっとわかったから。

私わたしは恋こいをしている。私わたしたちは恋こいをしている。

だから私わたしたちは、ぜったいにまた出で逢あう。

だから生いきる。

私わたしは生いき抜ぬく。

たとえなにが起おきても、たとえ星ほしが落おちたって、私わたしは生いきる。

*

*

*

彗すい星せいの核かくが近きん地ち点てんで碎くだけることも、氷こおりで覆おおわれたその内ない部ぶに巨きよ大だいな岩がん塊かいがひそんでいたことも、事じ前ぜんには誰だれも予よ想そうできなかつた。

町まちは、その日ひがちょうど秋あき祭まつりだったそうだ。落らつ下か時じ刻こくは二十時じ四十二分ふん。衝しよう突とつ地ち点てんは、祭まつりの舞ぶ台たいでもあつた宮みや水みず神じん社じや付ふ近きん。

隕いん石せき落らつ下かにより、神じん社じやを中ちゅう心しんとした広こう範はん囲いが瞬しゅん時じに壊かい滅めつした。衝しよう撃げきにより形けい成せいされたクレーターの直ちよっ徑けいはほぼ一km。そこに隣りん接せつしていた湖みずうみの水みずが流ながれ込こみ、町まちの大たい半はんが湖みずうみに没ぼっしてしまつた。糸いと守もり町まちは、人じん類るい史し上じょう最さい悪あくの隕いん石せき災さい害がいの舞ぶ台たいとなつたのだ。

ひょうたん型がたの新しん糸いと守もり湖こを眼がん下かに見みながら、俺おれはそんなことを思おもい出だしていた。うっすらとした朝あさ霧ぎりの中なかで太たい陽ようを反はん射しゃするその姿すがたはどこまでも静せい謐ひつで、三年ねん前まえにそんな惨さん劇げきの舞ぶ台たいだったとはうまく想そう像ぞうできない。三年ねん前まえに東とう京きょうの空そらに見みた彗すい星せいがこれをもたらしたといふことも、なんだかうまく納なつ得とくできない。

岩いわだらけの山さん頂ちょうに一人ひとりきりで、俺おれは立たつてゐる。

目めが覚さめたら、ここにいたのだ。

ふと、俺おれは右みぎ手てを見みる。手てのひらに、書かきかけのような一本ぼんの線せんがある。

「なんだ、これ……？」

俺おれは小ちいさくつぶやく。

「俺おれ、こんな場ば所しょで、なにしてたんだ？」

第八章

君の名は。

知しらぬ間まに身みについてしまった癖くせがある。

たとえば、焦あせった時ときに首くびの後うしろ側がわを触さわること。顔かおを洗あらう時とき、鏡かがみに映うつった自じ分ぶんの目めを覗のぞき込こむこと。急いそいでいる朝あさでも、玄げん関かんから出でてひととき風ふう景けいを眺ながめること。

それから、手てのひらをいい味みもなく見みつめること。

次つぎは・代よ々よ木ぎ・よよぎー。

合ごう成せい音おん声せいがそう告つげて、俺おれはまた、自じ分ぶんがそうしていたことに気きづく。右みぎ手てから視し線せんをはずし、なにげなく窓まどの外そとを見みる。減げん速そくしつつある窓まどの外そとを、ホームに立たつたくさんの人ひとが流ながれていく。

突とつ然ぜん、全ぜん身しんが総そう毛け立だつた。

すこし遅おくれて、彼女かのじょだ、と思おもつた。

ホームに彼女かのじょが立たつていた。

停てい車しゃし、ドアが開ひらききるのももどかしく、俺おれは電でん車しゃから駆かけ出だす。体からだごと回まわすようにしてホーム中じゅうに視し線せんを走はしらせる。何なん人にんかの乗じょう客きやくが俺おれを不ふ審しんげに見みたまま通とおり過すぎていき、俺おれはようやく冷れい静せいになる。

別べつに探さがしている人ひとなんて誰だれもいないのだ。「彼女かのじょ」とは、誰だれでもない。

これも知しらぬ間まに身みについてしまった、たぶん、妙みょうな癖くせだ。

気きづけばふたたび、俺おれはホームに立たつままで手てのひらを見みつめている。そして、あとすこしだけと思おもう。

もうすこしだけでいい。あとすこしだけでいいから。

その先さきの望のぞみがわからぬまま、でも俺おれは、いつからかなにかを願ねがっている。

「御おん社しやを志し望ぼういたしました理り由ゆうは、私わたしが建たて物ものを　いえ、というか街まちの風ふう景けいを、人ひとの暮くらしている風ふう景けい全ぜん般ぱんを、好すきだからです」

目めの前まえの面めん接せつ官かん四人にんの顔かおが、かすかに曇くもった。いやいや気きのせいだ、と俺おれは思おもう。二次じ面めん接せつまでこぎ着つけたのは、この会かい社しやが最さい初しょだ。逃のがすわけにはいかねえぞ、と俺おれはあらためて気き合あいを入いれる。

「昔むかしから、そうでした。自じ分ぶんでも理り由ゆうはよくわからぬんですが、あの……とにかく好すきなんです。つまり建たて物ものを眺ながめたり、そこで暮くらしたり仕し事ごとをしたりしている人ひとたちを眺ながめたりすることが。だからカフェとかレストランとかにはよく通かよいました。バイトもさせてもらったり……」

「　なるほど」と、面めん接せつ官かんの一人ひとりが柔やわらかくせき止とめるように言いう。「では飲いん食しょく業ぎょう界かいではなく、なぜ建けん設せつ業ぎょう界かいを志し望ぼうなさったのかを聴きかせていただけませんか？」

そう訊きいてきたのは四人にんの中なかでも唯ゆい一いつ優やさしさに見みえた中ちゅう年ねん女じょ性せいで、俺おれは見けん当とう違ちがいの志し望ぼう動どう機きを喋しゃべっていたことによく気きづく。着き慣なれないスーツの中なかで汗あせが噴ふき出だす。

「それは……バイトの接せつ客きやくも楽たのしかったんですけど、もっと大おおきなものに關かかわりたいというか……」

もっと大おおきなもの？　これじゃ中ちゅう学がく生せいの回かい答とうだ。顔かおが赤あかくなっていくのが自じ分ぶんでも分わかる。

「つまり……、東とう京きょうだって、いつ消きえてしまうか分わからないと思おもうんです」

面めん接せつ官かんたちの表ひょう情じょうが今こん度どこそ、はつきりと曇くもる。首くびの後うしろを触さわっていたことに気きづき、慌あわてて両りょう手てを膝ひざの上うえに戻もどす。

「だからたとえ消きえてしまっても、いえ、消きえてしまうからこそ、記き憶おくの中なかでも人ひとをあたためてくれるような街まち作づくりを　　」

ああ、だめだ。自じ分ぶんて言ひついて意い味み不ふ明めいだ。こもまた落おちた。面めん接せつ官かんの後うしろにそびえる灰はい色いろの高こう層そうビルにちらりと目めをやりながら、俺おれは泣なき出だしたいような気き分ぶんで思おもった。

「で、面めん接せつ、今日きょうで何なん社しゃ目め？」と高たか木ぎに訊きかれ、

「数かぞえてねえよ」と、俺おれは憮ぶ然ぜんと答こたえる。

司つかさがやけに楽たのしそうに「受うかる気きがしないな」と言いい、「お前まえが言いうな！」と不ふ機き嫌げんに返かえす。

「スーツが似に合あわなすぎだからじゃね？」ニッと笑わらって高たか木ぎが言いう。

「お前まえらだって似にたようなモンじゃねえか！」と俺おれは気け色しきばむ。

「俺おれ、内ない定てい二社しゃ」と楽たのしそうに高たか木ぎが言いい、

「俺おれ、八社しゃ」と見み下くだしたように司つかさが言いう。

「くっ……！」

返かえす言こと葉ばがない。コーヒーカップが、屈くつ辱じょくに震ふるえる手ての先さきでカチカチと鳴なる。

ぴろりん。

テーブルに置おいたスマフォが音おとを立たてた。俺おれはメッセークジをチェックし、残のこったコーヒーを一ひと息いきで飲のみ干ほし、椅い子すを立たった。

そういえば高こう校こう時じ代だい、このカフェには三人にんでよく

來きたな。ふとそう思おもい出だしたのは、司つかさと高たか木ぎに手てを振ふって別わかれ、小こ走ばしりで駅えきに向むかい始はじめてからだった。あの頃ころは毎まい日にち気き楽らくなもんだったよな。将しよう来らいだの就しゅう職しょくだのを考かんがえる必ひつ要ようもなかつたし、それになんだか、毎まい日にちがばかみたいに楽たのしかった。特とくにあの夏なつは 高こう校こう二年ねん頃ごろだったか、あの夏なつは本ほん当とうに、とびきりに楽たのしかったような気きがする。目めに映うつるものすべてに、俺おれはわくわくと心こころを躍おどさせていたような気きがする。 なにがあったんだっけ、と俺おれは考かんがえ、いや別べつに特とく別べつなことなんてなにもなかつた、と結かつ論ろんを出だす。単たんに、箸はしが転ころんでもおかしいような年とし頃ごろだったってだけか。

.....いや、それは少しょう女じょに対たいしての慣かん用よう句くだったか。そんなことをぼんやりと考かんがえながら、俺おれは地ち下か鉄てつの階かい段だんを駆かけ下おりた。

「おっ。就しゅう活かつ中ちゅうだねえ」

スマフォから顔かおを上あげて俺おれのスーツ姿すがたを見み、奥おく寺でら先せん輩ぱいは笑わらって言いう。夕ゆう方がたの四よツつ谷や駅えき前まえは、一いち日にちの仕し事ごとや学がっ校こうから解かい放ほうされた人ひと々びとのどこかのんびりとしたざわめきに満みちている。

「はは。まあ、だいぶ手てこずってますけど」

俺おれの言こと葉ばを聞きいて、先せん輩ぱいは「うーん」と唸うなって俺おれに顔かおを近ちかづける。頭あたまの上うえから爪つま先さきまで、なにやら難むずかしい顔かおで検けん分ぶんしている。そして深しん刻こくそうに、先せん輩ぱいは言いう。

「スーツが似に合あってないからじゃない？」

「そつ……そんなに似に合あってないすか!?」

俺おれは思おもわず自じ分ぶんの体からだを見みおろす。

「やだなー、冗じょう談だんだよっ！」

ころりと切り替かわるように、満まん面めんの笑えみで先せん輩ぱいが言いう。

ちょっと歩あるこうよという先せん輩ぱいに付つき合あって、俺おれたちは新しん宿じゅく通どおりを大だい学がく生せいの波なみに逆さからって歩あるき出だした。紀き尾お井い町ちょうを横よこ切ぎり、弁べん慶けい橋ばしを渡わたった。街がい路ろ樹じゅが色いろづいていることに、俺おれは初はじめて気きづく。すれ違ちがう人ひと々びとは半はん分ぶんくらいが薄うす手でのコートを羽は織おっている。奥おく寺でら先せん輩ぱいも、アッシュグレイのゆったりとしたコートをまとっていた。

「今日きょうはどうしたんですか、急きゅうにメールなんて」

俺おれだけ季き節せつに乗のり遅おくれてるなと思おもいながら、隣となりを歩あるく先せん輩ぱいに訊きく。

「なによ」グロスの唇くちびるを先せん輩ぱいは尖とがらせる。「用ようがなくちゃ連れん絡らくしちゃいけないの？」

「いやいやいや！」俺おれは慌あわてて手てを振ふる。

「久ひさしぶりに私わたしに会あえて嬉うれしいでしょう？」

「あ、はい、嬉うれしいっす」

俺おれの返へん事じに満まん足ぞくそうな笑え顔がおを見みせて、先せん輩ぱいは言いう。

「仕し事ごとでこっちまで來きたから、ちょっと瀧たきくんの顔かおでも見みておこうと思おもってね」

大おお手てアパレルチェーンに勤つとめる先せん輩ぱいは、今いまは千ち葉ばにある支し店てんで働はたらいているそうだ。郊こう外がいの生せい活かつもなかなか楽たのしいけれど、やっぱり東とう京きょうはにぎやかで特とく別べつだねと、なんだか眩まぶしそうに周しゅう囲いを眺ながめながら先せん輩ぱいは話はなす。

ねえ見みて、とふいに言いわれ、俺おれは顔かおを上あげた。

歩ほ道どう橋きょうを渡わたる俺おれたちの目めの高たかさに、家か電でん量りょう販はん店てんの街がい頭とうビジョンがある。映うつし出だされているのは、ひょうたん型がたの糸いと守もり湖この空くう撮さつ映えい像ぞうと、「彗すい星せい災さい害がいから八年ねん」という大おおきな文も字じ。

「私わたしたち、いつか糸いと守もりまで行いったことあったよね？」

遠とおい記き憶おくを探さぐるように目めを細ほそめて、先せん輩ぱいが言いう。

「あれって、瀧たきくんがまだ高こう校こう生せいだったから……」

「五年ねん前まえ、かな」と俺おれは言こと葉ばを継つぐ。

「そんなに……」先せん輩ぱいは驚おどろいたように小ちいさく息いきをはく。「なんだか、いろいろと忘わすれちゃってるな」

うなんだよな、と俺おれも思おもう。歩ほ道どう橋きょうを降おり、赤あか坂さか御ご用よう地ちに沿そった外そと堀ぼり通どおりを歩あるきながら、俺おれは当とう時じの記き憶おくを辿たどろうとする。

高こう校こう二年ねんの夏なつ　いや、あれはちょうど今いま頃ごろの季き節せつ、秋あきのはじめだった。俺おれは司つかさと奥おく寺でら先せん輩ぱいと三人にんで、短みじかい旅りょ行こうをしたのだ。新しん幹かん線せんと特とつ急きゅうを乗のり継ついで岐ぎ阜ふまで行いき、ローカル線せん沿ぞいの土と地ちを目もく的てきもなく歩あるき回まわった。そうだ、県けん道どう沿ぞいにはつんと建たっていたラーメン屋やに入はいったんだ。それから……それからの記き憶おくが、まるで前ぜん世せの記き憶おくみたいに遠とおくぼやけている。けんかでもしたのだろうか、俺おれだけが、二人ふたりとは別べつ行こう動どうを取とったことはなんとなく覚おぼえている。一人ひとりでどこかの山やまに登のぼり、そこで夜よを明あかし、翌よく日じつ一人ひとりで東とう京きょうに戻もどったのだ。

そうだ　。あの時じ期き、俺おれは彗すい星せいをめぐって起おきたあの一いち連れんの出で来き事ごとに、ひどく関かん心しんを引ひかれていたのだ。

彗すい星せいの破は片へんが一つの町まちを破は壊かいした、人じん類るい史し上じょうまれに見みる自し然ぜん災さい害がい。それなのに

町まちの住じゅう民みんのほとんどが無ぶ事じだったという、奇き跡せきのような一いち夜や。彗すい星せい落らっ下かのその日ひ、糸いと守もり町まちでは偶ぐう然ぜんにも町まちを挙あげての避ひ難なん訓くん練れんがあり、町ちょう民みんの大たい半はんが被ひ害がい範はん囲いの外そとにいたというのだ。

あまりの偶ぐう然ぜんと幸こう運うんに、災さい害がい後ごは様さま々ざまな噂うわさが囁ささやかれたことを覚おぼえている。未み曾ぞ有うの天てん体たい現げん象しようと、並なみ外はずれた町ちょう民みんの幸こう運うんは、多あおくのメディアと人ひと々びとの想そう像ぞう力りょくを搔かき立たてるに十じゅう分ぶんだったのだ。糸いと守もり町まちの龍りゅう神じん伝でん説せつと彗すい星せい来らい訪ほうを関かん連れんづけた民みん俗ぞく学がくめいたものから、避ひ難なんを強きょう行こうしたという糸いと守もり町まち町ちょう長ちゆうの強きょう権けん発はつ動どうを賞しよう贊さんしたり疑ぎ問もん視ししたりする政せい治じ的てき言げん説せつ、さらには隕いん石せき落らっ下かは実じつは預よ言げんされたものだったとするオカルトめいたものまで、雑ざつ多たで無む責せき任にんな言こと葉ばが連れん日じつ乱みだれ飛とんでいた。そもそもが陸りくの孤こ島とうのような秘ひ境きょう然ぜんとした町まちだったことや、隕いん石せき落らっ下かの二時じ間かんほど前まえには全ぜん域いきが停てい電でんしていたらしいという奇き妙みょうな情じょう報ほうも、人ひと々びとの憶おく測そくに拍はく車しゃをかけていた。被ひ災さい者しゃの他た地ち域いきへの受うけ入いれプログラムが一いち段だん落らくするまで世せ間けんのその熱ねっ狂きょうは続つづき、しかし多あおくの事じ件けんと同どう様よう、やがて季き節せつが終おわるころには、糸いと守もり町まちの話わ題だいは巷こう間かんからゆっくりと消きえていった。

それにしても　　と俺おれはあらためて妙みょうに思おもう。糸いと守もり町まちのスケッチ画がまで、俺おれは何なん枚まいか描かいていたのだ。しかも俺おれのあの熱ねつ病びょうめいた興きょう味みは、彗すい星せい落らっ下かから何なん年ねんか経たってから突とつ然ぜん湧わきあがったのだ。まるで遅おくれてやって來きた彗すい星せいみたいに、突とつ如じょ俺おれを訪おとずれ、跡あと形かたもなく去さって行いったなにか。あれはいったい

まあ、今いまさらいいか。外そと堀ぼり通どおり沿ぞいの高たか台だいから、夕ゆう闇やみに沈しずみつつある四よつ谷やの街まちを眺ながめながら、俺おれは思おもう。今いまさらもう、どうでもいい。壁かべに書かきつけるようにそう思おもう。よく覚おぼえていない昔むかしの

出で来き事ごとより、俺おれが考かんがえるべきは来らい年ねんの就しゅう職しょくだ。

風かぜが出でてきたね、と囁ささやくように先せん輩ぱいが言いい、彼女かのじょのウェーブがかった長ながい髪かみがふわりと持もち上あがる。ずっと昔むかし、ずっと遠とおいどこかでかいだような甘あまやかな匂においが、かすかに俺おれに届とどく。その香かおりに、条じょう件けん反はん射しゃのように俺おれの胸むねは切せつなく湿しめる。

「今日きょうは付つきあってくれてありがとう。ここまででいいよ」

学がく生せい時じ代だいにバイトをしていたイタリアンレストランで二人ふたりで夕ゆう食しょくを食たべ、「瀧たきくん、そいえば高こう校こう卒そつ業ぎょうしたらおごってくれるって言いったよね？」という身みに覚おぼえのない謎なぞ約やく束そくにより俺おれが先せん輩ぱいにおごることになり、それでも俺おれはどこか誇ほこらしい気き持もちで支し払はらいをし、駄えきの改かい札さつまで見み送おくろうとしたところで、そう言いわれた。

「それにしても私わたしたちのバイト先さきて、あんなに美味おいしいお店みせだったんだね」

「バイトの時ときの賄まかない、給きゅう食しょくみたいなもんばっかでしたもんね」

「何なん年ねんも気きづかなかつたよね」

俺おれたちは笑わらう。先せん輩ぱいが気き持もちよさそうに息いきを深ふかく吸すい、じゃあまたね、と言いう。手てを振ふる先せん輩ぱいの薬くすり指ゆびに、細ほそい水すい滴てきのような指ゆび輪わが光ひかっている。



君きみもいつか、ちゃんと、しあわせになりなさい。

私わたし結けっ婚こんするの、とエスプレッソを飲のみながら告つげた先せん輩ぱいは、その後あとで俺おれにそう言いったのだ。うまく返へん答とうができずに、俺おれはもごもごとお祝いわいの言こと葉ばを口くちにしただけだった。

俺おれは別べつに、ふしあわせじゃない。歩ほ道どう橋きょうの階かい段だんを降おりていく先せん輩ぱいのシルエットを見みながら、俺おれはそう思おもう。でも、しあわせがなにかも、まだよく分わからな
い。

ふと、手てのひらを俺おれは見みる。不ふ在ざいだけが、そこには載のっている。

もうすこしだけ　　、と俺おれはまた思おもう。

気きづけば、また季き節せつが変かわっていた。

やけに台たい風ふうの多おおい秋あきが過すぎ、そこからなんの区く切ぎりもなく、冷つめたい雨あめばかりの冬ふゆが来きた。遠とおい日ひのおしゃべりの記き憶おくのように、今こん夜やも雨あめの音おとがずっとひそやかに鳴なっている。クリスマスのイルミネーションが、水すい滴てきて混こみ合あつた窓まどの向むこうでちかちかと瞬またたいている。

俺おれは雑ざつ念ねんを飲のみ込こむように紙かみコップのコーヒーを一ひと口くち飲のみ、あらためて手て帳ちょうに目めを落おとす。手て帳ちょうには、十二月がつになった今いまでも就しゅう活かつスケジュールがびっしりと書かき込こまれている。

O B 訪ほう問もん、説せつ明めい会かい、エントリー締しめ切きり、ペーパー日につ程てい、面めん接せつ予よ定てい。大おお手てゼネコンから設せつ計けい事じ務む所しょ、下した町まち工こう場ばまで、見み境さかいなしのラインナップに我われながらうんざりしつつ、スマフォのスケジューラーと手て帳ちょうの文も字じを見み比くらべる。明あ日すつい降こうの要よう点てんを整せい理りして、手て帳ちょうに書かきつけていく。

やっぱりもう一回かい、ブライダルフェア行いっときたいなあ。

雨あめの音おとと混まじると、知しらない人ひとの会かい話わまでがなんだか秘ひ密みつめいて聞きこえる。さっきから後うしろのカップルが結けっ婚こん式しきの相そう談だんをしていて、それは奥おく寺でら先せん輩ぱいを連れん想そうさせるけれど、声こえと雰ふん囲い気きがぜんぜん違ちがう。どこかのんびりとした地ち方ほうのなまりが混まじっていて、その男だん女じょの会かい話わには幼おさななじみめいた安あん心しんしきった空くう気きが漂ただよっている。二人ふたりの会かい話わに、俺おれはなんとなく耳みみをとられる。

「もう一回かい？」うんざりしたように、でも声こえににじむ親しん愛あいは隠かくしようもなく、男おとこが応こたえる。「ブライダルフェアなんて、もうさんざん行いったやろう。どこも似にたようなもんやつたやろ」

「いやなんかね、やっぱ神しん前ぜん式しきもいいかなって」

「お前まえ、チャペルが夢ゆめだって言いつとったに」

「だって一いっ生しょうに一度どのことやもん、そんな簡かん単たんに決きめられんもん」

でも決きめたって言いつとったよ、と男おとこが小ちいさく抗こう議ぎし、俺おれはくすりとする。女おんなはそれを無む視しし、んー……、と思し案あん声ごえを漏もらしている。

「それよりテッシーさあ、式しきまでにヒゲ剃そってよね」

コーヒーを飲のもうとした俺おれの手てが、ぴたりと止とまる。

自じ分ぶんでも理り由ゆうが分わからないま、鼓こ動どうが速はやくなっていく。

「私わたしも三キロ瘦やせてあげるでさ」

「お前まえ、ケーキ喰くいながらそれ言いうかあ？」

「明日あしたから本ほん気き出だすの！」

ゆっくりと、俺おれは後うしろを見みる。

二人ふたりはすでに席せきから立たち上あがり、コートに袖そでを通とおしているところだ。ひょろりと背せの高たかい男おとこが、坊ぼう

主ず頭あたまにニット帽ぼうをかぶる横よこ顔がおだけがちらりと目めに入はいる。女おんなは小こ柄がらで、おかっぱの髪かみ型がたがまるで学がく生せいのように幼おさなげな印いん象しようだ。そのまま二人ふたりは背せを向むけて、店みせを出でていく。俺おれはなぜか、二人ふたりの背せ中なかから目めをそらすことができない。「ありがとうございました」というカフェの店てん員いんの声こえが、雨あめと混まじって曖あい昧まいに耳みみに届とどく。

店みせを出でる頃ころには、雨あめは雪ゆきに変かわっていた。

大たい気きにたっぷりと満みちた湿しつ気けのおかげか、雪ゆきの舞まう街まちは妙みょうに暖あたたかく、俺おれは間ま違ちがった季き節せつに迷まよい込こんでしまったような不ふ安あんをふいに感かんじる。すれ違ちがう一人ひとりひとりに、なにか大たい切せつな秘ひ密みつが隠かくされているような気きがして、ついつい振ふり返かえって見みてしまう。

その足あしで、閉へい館かん間ま際ぎわの区く立りつ図と書しょ館かんに入はいった。吹ふき抜ぬけの広ひろ々びろとした空くう間かんにちらほらとしかいない閲えつ覧らん客きやくが、館かん内ないの空くう気きを外そとよりも寒さむ々ざむしく感かんじさせる。椅い子すに座すわり、棚たなから持もってきた本ほんを開ひらく。『消きえた糸いと守もり町まち・全ぜん記き録ろく』と題だいされた写しゃ真しん集しゅうだ。

古ふるい封ふう印いんをとくように、俺おれは一ページ一ページをゆっくりとめくっていく。

銀杏いちょうの木きと小しょう学がっ校こう。湖みずうみを見みおろす、神じん社じやの急きゅうな階かい段だん。塗ぬりの剥はげた鳥とり居い。田た畑はたに唐とう突とつに置おかれた積つみ木きみたいな、小ちいさな踏ふみ切きり。ただっ広ひろい駐ちゅう車しゃ場じょう、二軒けん並ならんだスナック、くすんだコンクリートの高こう校こう。古ふるびてひびの入はいったアスファルトの県けん道どう、くねくねと坂さか道みちに沿そうガードレール、空そらを反はん射しゃするビニールハウス。

それは日に本ほんのどこにでもある平へい凡ぼんな風ふう景けいで、だからそのすべてに見み覚おぼえがある。石いし垣がきの温おん度ども

風かぜの冷つめたさも、まるで住すんでいた場ば所しょのように思おもい浮うかべることができる。

なぜこんなにも、と俺おれは思おもう。思おもいながらページをめくる。

今いまはもう存そん在ざいしない町まちのあたりまえの風ふう景けいに、なぜこんなにも、俺おれの心こころは苦くるしくなるのだろう。

* * *

かつてとても強つよい気き持もちで、俺おれはなにかを決けっ心しんしたことがある。

帰かえり道みちに誰だれかの窓まど灯あかりを見み上あげながら、コンビニで弁べん当とうに手てを伸のばしながら、ほどけた靴くつの紐ひもを結むすびなおしながら、そんなことをふと思おもい出だす。

俺おれはかつて、なにかを決きめたのだ。誰だれかと出で逢あって、いや、誰だれかと出で逢あうために、なにかを決きめたのだ。

顔かおを洗あらって鏡かがみを見みつめながら、ゴミ出だし場ばにビニール袋ぶくろを置おきながら、ビルの隙すき間まの朝あさ日ひに目めを細ほそめながら、俺おれはそう考かんがえ、苦く笑しようする。

誰かとかなにかとか、結けっ局きょくなにも分わかつてねえじゃねえか。

面めん接せつ会かい場じょうの扉とびらを閉しめながら、でも、と俺おれは思おもう。

でも、俺おれは今いまもがいでいる。大おお袈げ裟さな言いい方かたをしてしまえば、人じん生せいにもがいでいる。かつて俺おれが決きめたことは、こういうことではなかったか。もがくこと。生いきること。息いきを吸すって歩あるくこと。走はすること。食たべること。結むすぶこと。あたりまえの町まちの風ふう景けいに涙なみだをこぼしてしまいうように、あたりまえに生いきること。

あとすこしだけでいい、と俺おれは思おもう。

あとすこしでいい。もうすこしだけでいい。

なにを求もとめているのかもわからず、でも、俺おれはなにかを願ねがい続つづけている。

あとすこしだけでいい。もうすこしだけでいい。

桜さくらが咲さいて散ぢり、長ながい雨あめが街まちを洗あらい、白しろい雲くもが高たかく湧わきあがり、葉はが色いろづき、凍こごえる風かぜが吹ふく。そしてまた桜さくらが咲さく。

日ひ々びは加か速そくしていく。

俺おれは大だい学がくを卒そつ業ぎょうし、なんとか手てにした就しゅう職しょく先さきで働はたらいてる。搖ゆれる車くるまから振ふり落おとされないような必ひつ死しさで、毎まい日にちを過すごしてい。ほんのすこしずつだけれど、望のぞんだ場ば所しょに近ちかづいているように思おもえる時ときもある。

朝あさ、目めを覚さまし、右みぎ手てをじっと見みる。人ひと差さし指ゆびに、小ちいさな水すい滴てきがのっている。ついさっきまでの夢ゆめも、目め尻じりを一いつ瞬しゅん湿しめらせた涙なみだも、気きづけばもう乾かわいでいる。

あとすこしだけでいいから　　、そう思おもいながら、俺おれはベッドから降おりる。

あとすこしだけでいいから。

私わたしはそう願ねがいながら、鏡かがみに向むかって髪かみ紐ひもを結ゆう。春はるの物もののスーツに袖そでを通とおす。アパートのドアを開あけ、目めの前まえに広ひろがる東とう京きょうの風ふう景けいをひととき眺ながめる。駅えきの階かい段だんを登のぼり、自じ動どう改かい札さつをくぐり、混こみ合あつた通つう勤きんの電でん車しゃに乗のる。人ひと々びとの頭あたまの向むこうに見みえる小ちいさな青あお空ぞらは、突つき抜ぬけるように澄すんでいる。

俺おれは電でん車しゃのドアに寄よりかかり、外そとを見みる。ビルの窓まどにも、車くるまにも、歩ほ道どう橋きょうにも、人ひとが溢あふれている。百人にんが乗のった車しゃ輛りょう、千人にんを運はこぶ列れっ車しゃ、その千本ぼんが流ながれる街まち。それを眺ながめながら、あとすこしだけいいから、と俺おれは願ねがう。

その瞬しゅん間かん、なんの前まえ触ぶれもなく、俺おれは出で逢あう。

とつぜんに、私わたしは出で逢あう。

窓まどガラスを挟はさんで手てが届とどくほどの距きょ離り、併へい走そうする電でん車しゃの中なかに、あの人が乗のっている。私わたしをまっすぐに見みて、私わたしと同おなじように、驚おどろいて目めを見み開ひらいている。そして私わたしは、ずっと抱いだいていた願ねがいを知しる。

ほんの一メートルほど先さきに、彼女かのじょがいる。名な前まえも知しらない人ひとなのに、彼女かのじょだと俺おれにはわかる。しかしあ互たがいの電でん車しゃはだんだんと離はなれていく。そして別べつの電でん車しゃが俺おれたちの間あいだに滑すべり込こみ、彼女かのじょの姿すがたは見えなくなる。

でも俺おれは、自じ分ぶんの願ねがいをようやく知しる。

あとすこしだけでも、一いっ緒しょにいたかった。

もうすこしだけでも、一いっ緒しょにいたい。

停てい車しゃした電でん車しゃから駆かけだし、俺おれは街まちを走はしっている。彼女かのじょの姿すがたを探さがしている。彼女かのじょも俺おれを探さがしていると、俺おれはもう、確かく信しんしている。

俺おれたちはかつて出で逢あつたことがある。いや、それは気きのせいかもしれない。夢ゆめみたいな思おもい込こみかもしれない。前ぜん世せのような妄もう想そうかもしれない。それでも、俺おれは、俺おれたちは、もうすこしだけ一いつ緒しょにいたかったのだ。あとすこしだけでも、一いつ緒しょにいたいのだ。

坂さか道みちを駆かけながら、私わたしは思おもう。どうして私わたしは走はしっているのだろう。どうして私わたしは探さがしているのだろう。その答こたえも、たぶん、私わたしは知しっている。覚おぼえてはいないけれど、私わたしのからだぜんぶがそれを知しっている。細ほそい路ろ地じを曲まがると、すとんと道みちが切きれています。階かい段だんだん。そこまで歩あるき、見みおろすと、彼かれがいる。

走はしり出だしたいのをこらえて、俺おれはゆっくりと階かい段だんを登のぼり始はじめる。花はなの匂においのする風かぜが吹ふき、スーツを膨ふくらませる。階かい段だんの上うえには、彼女かのじょが立たっている。でもその姿すがたを直ちょく視しすることができなくて、俺おれは目めの端はしで彼女かのじょの気け配はいだけをとらえている。その気け配はいが、階かい段だんを降おり始はじめる。春はるの大きな気きに、彼女かのじょの靴くつ音おとがそっと差さし込こまれている。俺おれの心しん臓ぞうが、肋ろっ骨こつの中なかで跳はねている。

私わたしたちは目めを伏ふせたまま近ちかづいていく。彼かれはなにも言いわざ、私わたしもなにも言いえない。そして言いえぬまま、私わたしたちはすれ違ちがってしまう。その瞬しゅん間かん、からだの内うち側がわで直ちょく接せつ心こころを掴つかまれたように、私わたしの全ぜん身しんがぎゅっと苦くるしくなる。こんなのは間違つてると、私わたしは強つよくつよく思おもう。私わたしたちが見み知しらぬ人ひと同どう士しだなんて、ぜったいに間ま違ちがっている。宇う宙ちゅうの仕し組くみとか、命いのちの法ほう則そくみたいなものに反はんしている。だから、

だから、俺おれは振ふり向むく。まったく同おなじ速そく度どで、彼女かのじょも俺おれを見みる。東とう京きょうの街まちを背せ負おつて、瞳ひとみをまんまるに見み開ひらいて、彼女かのじょは階かい段だんに立たっている。彼女かのじょの長ながい髪かみが、夕ゆう陽ひみたいな色いろの紐ひもで結むすばれていることに、俺おれは気きづく。全ぜん身しんが、かすかに震ふるえる。

やっと逢あえた。やっと出で逢あえた。このままじゃ泣なき出だしてしまいそう、そう思おもったところで、私わたしは自じ分ぶんがもう泣ないでいることに気き付づく。私わたしの涙なみだを見て、彼かれが笑わらう。私わたしも泣なきながら笑わらう。予よ感かんをたっぷり溶とかしこんだ春はるの空くう気きを、思おもいきり吸すい込こむ。

そして俺おれたちは、同どう時じに口くちを開ひらく。

いっせーの一でとタイミングをとりあう子こどもみたいに、私わたしたちは声こえをそろえる。

君きみの、名な前まえは、と。



初しょ出しゅつ

本ほん書しょは『小しょう説せつ 君きみの名なは。』（角かど川かわ文ぶん庫こ 二〇一六年ねん六月がつ刊かん）をもとに、漢かん字じにふりがなをふり、読みやすくしたものです。



新海 誠 / 作

1973年長野県生まれ。アニメーション監督。2002年、ほぼ1人で制作した短編アニメーション『ほしのこえ』で注目を集め、以降『雲のむこう、約束の場所』『秒速5センチメートル』『星を追う子ども』『言の葉の庭』を発表し、国内外で数々の賞を受ける。自身の監督作をみずから小説化した『小説 秒速5センチメートル』『小説 言の葉の庭』も高く評価された。

「君の名は。」製作委員会 / カバー絵

ちーこ / 挿絵

千葉県在住。イラストレーター、デザイナー。可愛いものとレトロなものが大好きなうさぎさん派。

装丁 ムシカゴグラフィクス

君きみの名なは。

作さく 新しん海かい誠まこと

カバー絵え 「君きみの名なは。」製せい作さく委い員いん会かい

挿さし絵え ちーこ



2016年8月15日 発行

(C)Makoto Shinkai/2016「君の名は。」製作委員会

(C)Chi-ko 2016

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川つばさ文庫『君の名は。』

2016年8月15日初版発行

発行者 郡司 聰

発 行 株式会社 K A D O K A W A

〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3

電話 0570-002-301（カスタマーサポート・ナビダイヤル）

受付時間 9:00 ~ 17:00（土日 祝日 年末年始を除く）

<http://www.kadokawa.co.jp/>



BOOK★WALKER